

化不可量之仍十月初於紫野龍寶山大德寺催一七日法夏爲御佛事、囑金雜用一萬貫并不動國行御劍其外若干施行累日者也、又御位牌所而建立一字精舍、號、捻見院、同爲卯塙作夏料、銀子千百枚渡之、又寺領五十斛者、後代無相違樣、加遠慮、以八木五百斛、令買得所寄進也、又佛夏之次第、

十一日轉經 十二日頓寫并施餓鬼 十三日懺法 十四日入室

十五日關維 十六日宿忌 十七日陸座拈香

就中十五日御葬禮之作法所驚目也、先、棺槨以金紗金襴裹之、軒之瓔珞、欄干之擬寶珠、皆鑲金銀八角之柱、畫丹青八軒之間、致彩飾、御骨以沈香彫刻佛像、奉納棺槨之中、彼蓮臺野院○原書此數字ノ空格ヲ存ス、詳書類從所收總見門の幕白綾白段千方百二十間の中火屋續路中有方百二間之火屋方形造あり如法經堂造也、惣廻に塔を結トアリ、續路中有方百二間之火屋方形造之堂惣廻結塔、羽柴小一郎秀長爲警固之大將、自大德寺千五百軒之間、警固之侍三萬許、守護路之左右、立續弓、箠、鐵炮、葬禮之場、秀吉分國之徒黨不及、言之、諸侍悉皆馳集、其外見物之輩、貴賤如雲霞、御輿前、轅池田古新輝政昇之後、轅羽柴於次丸秀勝昇之、御位牌○原書、コノ所收總見院殿追善記ニハ、御位牌ハ相長公第八男御、御太刀秀吉持之、彼不動國行也、兩行相聯者三千餘人、皆著烏帽

棺槨ノ莊
沈香ニテ
佛像ヲ作
リ棺ニ納ム

火屋

位牌ハ織
田信好

佛事役者

偈

藻虫齋由

子藤衣、始于五岳、洛中洛外、禪律八宗九宗之、僧侶不知幾千萬、其宗々調威儀、又手問訊、集會行道、五色天蓋輝日、一樣、旛、幡、翻風、沈水、煙如雲、灯、光明似星、供具盛物、龜足造花、作七寶壯嚴、寔九品淨土、五百阿羅漢、三千佛弟子、如在目前矣、佛夏役者、

鎖龕、宗悅、怡雲、大和尚 掛真、宗瑋、玉仲、大和尚

起龕、宗陳、古溪、和尙 念誦、宗園、春屋、和尙

奠湯、宗哲、明叔、和尙 奠茶、宗洞、仙岳、和尙

拾骨、宗紋、竹澗、和尙 秉炬、宗訢、咲嶺、和尙

偈曰

四十九年夢一場 威名說什麼存亡

請看火裡烏曇鉢 吹作梅花遍界香
シテ、其時秀吉御次磨相共に燒香し、十月十五日巳刻、無常の留ざるは、秀吉、誠は一、生別離の悲なり、誰有てか、これを歎ざらむ、就中、涙の留ざるは、秀吉、双眼は下、民を憐む、仍、忝も、勅使をたて、贈官を給ふ、獨歩、院殿は、大相國、安じ、奉、巖大居士と號かし、速に、惟の也、秀吉備中表におい、達し、武勇を專とし、籌策を一、世の冥加末代の珍重云々、藻虫齋由

天正十年十月十五日

天正十年十月十五日

七二六

天正十年壬午十月十五日、○詳書類從所收總見院殿追善記于時天正十
月廿五日ニ作ル、マタ日附ノ下ニ謹誌之

〔豊鑑〕 二 袖露

(天正十年) 同十月十日比より、信長卿は之むむりは之わさいとあまん事を、秀吉催し給へり、さたまつ總見院と云寺を、都の北紫野に造くり給ふ、信雄、信孝の云及、及び柴田、丹羽、池田など有なれども、之むむりは心さしあがりし、秀吉よく執行給ぬ、尊靈をよろおひ給ふへしとそ覺ゆ、十一日よ、御わさ始、様々にさうとを限盡し給ふ、十刹の僧とも經をさけ、諷經、夜をさり、十五日よ、野邊の送、御わさ始り、蓮臺野、火屋をいうん、さうかといりめしく作、まひり、竹垣をゆへ、大徳寺より蓮臺野まで、道はさきひしく、武士ともうさめ、弟美濃守秀長奉行をなせ、棺槨のよそをひ金繡をうさり、玉はようらるをう、やうせり、なうえ、さたの池田古新跡を、次丸こそ、汝うく、秀吉太刀を持給ふ、鎖龕、大和尚、掛真、玉仲、大和尚、奠湯、明叔、大和尚、奠茶、仙岳、大和尚、取骨、竹間、大和尚、兼炬、咲嶺、和尚、大禪師、其偈曰、

秀吉總見院ヲ紫野ニ營ム

羽柴長秀警固ノ奉行トナル

四十九年夢一場、威名說什麼存亡、

請看火裡烏曇鉢、吹作梅花遍界香、

○下略、長岡藤孝、信長ノ追善連歌會ヲ催ス、トニカ、ル、七月二十日ノ條ニ收ム、

〔太閤記〕 三 信長公御葬禮之事

壬午七月中旬、秀吉卿、御次丸を相伴ひ上洛、はし、て、於本能寺、前將軍御腹めされし寺、おして、御愁歎甚しく、涙數行正體もほしまさぬ形勢、哀れおも殊勝おも見えてけ、元來種姓せつと人おのあらされとを、才器何をも無双肩お依て、將軍取立給ふて、諸侯の數お加へさせ給ひし、後、數國を併せ領し、依之、織田家、舊臣、嫉おもふ事、ぬりけを共、信長公會て事共せ、是、剩傘を御ゆるし、あされ、え、は、旁御厚恩山より高く、海より深しと、骨髓お徹し、忘れしと思へり、一念の剛ある、世を累て通りぬるとおもむ云傳、急し、實お宜かり、人もこそ多き、お君の、う、さ、を、目前お誅平、殊お御葬禮を營、奉り、さ、と、當寺おおひて、初て心さし有なり、抑此御次丸と申、將軍、は、五男、よ、て、お、い、せ、し、を、養子お申請奉りし、う、の、同胞合體の腹臣也、亦不貴乎、北畠信雄卿、三七殿、又、の、歴々の宿老衆有けを、御葬禮の儀催し

天正十年十月十五日

七二七

奉行杉原
家次桑原
次右衛門
尉副田甚
兵衛尉

かんもいろう有へきと憚不輕の、とうう延來て、九月お至まで其沙汰もあし、秀吉永き夜れ絲覺ふ、昨友の今日の怨讎と成前榮の後衰と移り易りぬ、誰有て期來日乎、厚恩を報せぬして、衰ふる身と成かひ、噬臍とも益あう候へしとて、於龍寶山大德寺、十月初旬より、一七日の法事執行ひ奉らんと、一萬貫、并八木の播州より精白おして千石、大德寺納所へ相渡し、奉行として、杉原七郎左衛門尉、桑原次右衛門尉、副田甚兵衛尉を加へふたり、其用意漸成て、十月十一日轉經、十二日頓寫施餓鬼、十三日懺法、十四日入室、十五日闍維、十六日宿忌、十七日陞座拈香、中ふも十五日御葬禮の爲體驚目計也、棺槨以金紗金襴裹之、軒の瓔珞、欄干擬寶珠、悉鏤金銀、八角の柱盡丹青、八面の間、彩色御紋の桐引兩筋あり、以沈香雕刻佛像、奉安置棺槨之中、蓮臺野豎横廣大而續洛中、四門之幕白綾方百二十間、中有火屋、其體巍然、より、總廻りふの結瑁、羽柴小一郎長秀警固大將として、大德寺より十町計の間警固の武士一萬有餘、守護路之左右、弓鐵炮其外、鎗長刀を立たけ、冷した事も又夥し、近國お侍る信長公よけうへ奉りし諸士集り會は、御葬禮よあひしうり、一入哀あり、御輿前轅池田（中）小新（右）後轅（左）の御次丸昇給ふ、御位

牌の公の八男御長丸（長）御太刀の秀吉卿奉持之、即不動國行也、二行よ相列者三千餘人、皆烏帽子著藤衣あり、始五岳洛中洛外之諸宗不知幾千萬と云數、各宗刷威儀、集會行道、有五色天蓋輝日、一様之旗翻風、香之煙如雲似霞、供具盛物、龜足造花、作七寶莊嚴せり、寔九品淨土とかんいふ共恥へうらさふ事なり、

役者之次第

- 一 鑽龜 怡雲大和尚 一 掛眞 玉仲大和尚
- 一 起龜 古溪大和尚 一 念誦 春屋大和尚
- 一 奠湯 明叔大和尚 一 奠茶 仙岳大和尚
- 一 拾骨 竹澗大和尚 一 秉炬 咲嶺和尚大禪師

其偈云、（中略）咲嶺ノ偈ニカ、（前掲）豐鑑ニ全ク同ジ、

則咲嶺より秀吉へ、焼香あされ候へと有しうり、御次丸相共よ焼香乃體いとたうと有りたり、天正十年の初冬望日巳刻、奉成無常之送畢、寔是一生別離之悲、誰う不痛乎、秀吉卿涙落とも覺えぬ、袖の雫あそあれてける、將軍比威氣衣被天下、獨步古今、上奉安宸襟、下憐愍兆民、仍忝立勅使、賜諡官奉號

天正十年十月十五日

總見院殿贈大相國一品泰巖大居士、法事初了し日々毎日施行し給ふ事、一日の下行百二十拾石宛、十七日に至て満り、かくて御位牌所として建立一字、號總見院、同卵塔爲作事料、銀子千百枚渡之、其上永代無相違やうふと、寺領五十拾石、大德寺近邊におひて、現米五百斛を以買得し、令寄附畢、無殘所忠臣うかと、心のそこより、其比の俗感しあへりよきり、

評曰、秀吉乃忠孝、上よ立へき御連枝もなく、下よ双へき大臣もあし、依之天下を掌握し、富四海は溢、威古今は秀より、豈天の助はあらざらんや、然則數代相つゞき、家運盡る期有ましき事あり、還て秀頼卿の亡ひさは後絶みし事あと、流らゝし思ふよ、信長公は厚恩を深くおほさゆゝは實あらざ、信孝を弑し被申ましき事一、信雄卿を秋田へ流し奉り、尾州勢州の御知行を奪取被申はしき事二、信忠卿乃御子、(秀吉)黃門を天下に主とし、其身は周公旦を學ひ給ひあん事、理の正當あらんや、背理則背天也、背天則秀頼卿のるうよ、何も子孫は付く天のとうめ有とみえより、又秀次公のるうよ、背理事の甚しきり、其身は對し天はとうめ有もあり、畢竟忠孝乃似せ物故、秀頼卿跡うゝをかく後絶るるり、又秀吉日本國中檢地し侍りて、

諸人の安き事を奪取て、其身ひとり榮花は誇り、加階は付てもとゝかる所ありし故、みえあらんや、是三、後乃明君子細評して正し給ひ、萬幸、或曰、唯理ふ背き給ひし一病故治世窮した、

〔大德寺文書〕

〇二山城

總見院殿御作善料之事

- 一 壹萬貫文
 - 一 御葬禮御太刀 不動、國行
 - 一 御馬 葦毛
 - 一 御鞍 梨地、金具、金覆、輪、御紋、桐、鳳、凰
 - 一 燈 梨地、御紋、桐、鳳、凰
- 以上

天正十年九月十三日

大德寺

羽柴筑前守

秀吉花押

〔總見院文書〕

〇山

天正十年十月十五日

天正十年十月十五日

七三二

爲

總見院殿贈大相國一品泰巖大居士御位牌所建立寄進物渡申分之村○西

所藏文書分之事○西村氏所藏文書、コ

御太刀一腰不動國行 總見院殿永代可爲御校割○西村氏所藏文書、コ

事

一 銀子千枚 總見院御作事方

一 銀子廿五枚 總見院殿御卵塔之用

一 御懸盤 五膳

一 御吳器 七ッ入付御皿十五、御箸一膳

一 右御紋桐金銀金具有之總李地○

一 銀子百卅五枚 八木五百石充○西村氏所藏文書ハ、五

右田地五十石買得之事、内卅石者總見院殿每日朝暮御靈供田之事、付

本膳御菜五ッ、御汁壹ッ、二之御膳御汁壹ッ、御菜三ッ、但御名日、朝者五

之膳、晚者三之膳可被備事、

一 一日之下行八木九枿（付下同シ）充内三枿朝暮之御膳方、殘六枿有之、衆僧朝暮一人

四合宛、然者三十日衆僧十五人之飯米有之、合八木貳石七斗、

右總見院殿御膳、長老齋非時、

搥并十二ヶ月八木卅貳石四斗也、

一 八木廿石、是者總見院所々御修理方之用、

一 壹萬貫殘錢

千四百貫文 總見院殿方丈之繪并疊其外萬入目之用、仁可被相立候、

○西村氏所藏文書ハ、コノ

一行一打ヲシテ記セリ、

羽柴筑前守

天正拾年 午壬

秀吉花押

十月十七日○西村氏所藏文書、

總見院○西村氏所藏

〔眞珠庵文書〕

○三

尙々、態御音信本望候、必々罷上、萬事可申承候、返々五貫文、慥御請取專

一候、

天正十年十月十五日

七三三

天正十年十月十五日

七三四

信長公御忌中、於貴山被執行付、各致上洛、可令馳走之由、則衆中へ披露申候、必各可罷上由候、如承候、貴寺御繁榮諸末庵迄之大慶、不過之候、誠御用多中火番態御下、相心得可申上候由衆議候、

一當庵ナトヨリ漸寫ナト送候テ可然候ハんカ、其元立御聞候て後便宜ニ御指南頼申候、

一土器アイ物五十計、大チウ百計、被買置可給候、後便ニ取可申候、其方ヨリ便宜候ハ、少成共御下候て可給候、

土貢米
和市

一貴庵去年分御土貢米、下行運上之殘五貫文ニ賣置、此次手ニ只今上申候、和市安候へ共、爰元皆悉其分ニ候つる間、無了簡候、今ッ少高ク成申候へトモ、不及力候、料足ニ符付申候、算用狀慥御請取專一候、後便ニ五貫文ノ御請取頼申候、恐々頓首、

九月廿四日

□圓(花押)

酬納所

圓

眞珠納(所カ)□禪師貴報

〔寶山外志〕

金湯

信長宗訃
フニ法ヲ問

摠見平君、諱信長、太政清盛二十一世之孫也、平姓織田氏、世居尾州、初義政以來國郡騷亂不止、信長出兵併吞三十餘州、進從一位右大臣、居江州安土城、其威振諸州、曾問法於(餘平同シ)笑嶺和尚、頗沐薩波若海云、元龜三年、以大宮郷方十九町、長爲本寺所領之地、天正元年、又授印券於本寺、免除其諸役、十年六月、爲明智氏被殺、壽四十九、十月、其臣秀吉建摠見院于本山、葬其遺骨、請笑師下炬、以其法嗣古溪陳公爲其院主、是以其君問法之因緣也、信長法名宗安、號泰嵩居士、法名道稱本院修其薦祓之時、天皇賜使贈太政大臣、自爾織田氏皆爲本山之外護也、

〔龍寶山大德寺誌〕

乾

諸塔頭位籍

總見院

總見院

二百石

天正年中建立、白毫院之舊趾也、白毫未詳何人所建、

古溪和尚、嗣笑嶺、慶長二年正月十七日寂、八十三、大慈廣照禪師、

玉甫和尚、嗣古溪、慶長十八年三月十八日寂、六十八、大悲廣通禪師、

秀吉公爲右大臣、信長公建立、初請古溪和尚爲開祖、未幾溪羅事左遷、改請

其上足玉甫和尚、稱兩開祖、

在于聚光西、

天正十年十月十五日

七三五

天正十年十月十五日

七三六

〔羽前織田家譜〕

信長 十月十五日(天正十年)葬于洛陽紫野龍寶山大德禪寺、是日勅

贈從一位太政大臣、法名天德院、後號總見院、泰巖安公、後秀吉建立一寺於大

德寺境内、號曰總見院、江州安土亦有總見寺者、織田家所建也、

信敏(明正二年)十一月十七日、曩祖信長神號宣下、號健織田社、三年庚午十月十八日、

賜神號改稱之命、號建勳社、翌十九日、以從四位五辻少辨安仲、賜宣命於東京

藩邸之社、

○秀吉、山崎城ノ築營ニ依リテ、信長葬儀ノ延引セルヲ、毛利輝元ニ報
ズルコト、七月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔川角太閤記〕

上ニ一筑前守殿を播州へ歸城し、兎角勝家所より定たま

し、使可立事必定也と思召候處に、如案國大名衆へ觸狀を被廻、それ様

子の、上様御跡を互ま何かと取紛、まうと仕、御弔不仕候事、いゝま

奉存候條(三法秀信下同)吉法様被成御上洛、紫野まで御弔に執行被成、御焼香被遊候様

ふ可仕と存候、爲其各へ連判を以觸申候、御手前も連判の御判尤候と

の使者也、筑前守殿御返事ふは、思召被寄、御弔の御執行可然奉存候、ふよ

勝家廻狀
ヲ以テ秀
信上洛シ
葬儀ヲ營
テ儀ヲ營
マシトス
告グトナ
説

秀吉新寺
ヲ營ミ信
長ノ像ヲ
刻マン
イフ
勝家贊成
ス

秀吉密ニ
武備ヲナ
ス

秀吉ノ眞
意

ふこ御座候にて、不叶仕合み、御座候、乍去存一通申上候、上様の御弔
被成候とて、古た寺よ、天下へ之聞へも如何と不被思召候哉、龜相こ
成と新敷寺を被仰付、佛師の上手に、上様の御姿を木像に御ららし、其
佛前ふく御焼香御尤くと奉存候、柴田殿を、いり様も成と、筑前守上洛さ
よと、奉候へ、被思、さらし新敷寺を立よ、上様を日頃よく奉見候上手に
佛師共を、つ、御影を作り奉、候へよと、京都へ被申遣候、則寺の作
事取か、申候、御影の佛師共より合、御姿を評定せん、さく仕、作りが、
申候事、かり初のやうに御座候得共、右之二色よ、御座候へと、日柄殊
之外立申事、

一播磨も、其内牢人共を、つめ、四方へ不聞様、武具以下に、至ま、無隙
透間内證、御用意被仰付候、右に柴田殿に、之御返事の御分別あり、常
から、其ま、上洛を、を、勝家たまよ、思召、新敷寺又御影を
と被仰付候事、御尤と御返事候、此二色の作事出来候と、無左右出来
有ましき也、其内、人をか、へ、武道具以下用意可被成、右之御分
別の御返事と相聞へ申候事、御寺も御影も出来候得と、又勝家所より重

天正十年十月十五日

七三七

天正十年十月十五日

七三八

而觸狀この御寺も御影を出來候間、岐阜より吉法様御上洛被成、紫野におるく、御焼香可被成、此に御上洛相究候、御供之御用意御尤候と、重而又申來候、此寺はうきん院と申、其時立申寺にて御座候、即御影も其寺に今御座候事、

諸大名京
都ニ集ル

一筑前守殿御分別も、勝家を初とし、定國大名衆も、此度の思ひの外おは人数をたいし可被罷上者也、さらし國々々の大名衆は人を色くくよたさせ、目付を國々へ被遣置候、とや岐阜より御上洛被成候上を、國お留る大名小名一人もなく、洛中におたまれ候事、

勝家等秀
吉ノ上洛
ヲ促スト
ノ説

一筑前守殿より、國々お付置く目付者おと罷歸候、柴田とのち四五千程よく御登候、扱其外瀧川左近殿を何程、五郎左衛門殿人数銘々付分、姫地へ罷歸候、惣大名の人数をかんるへ被成候、思召御胸より人数をくなく候よとかんるへさせ給ふ、たとへ大軍おくも、別お事有ましたかり、柴田殿より使再三に及ふ迄を、上洛ゆるくと待可申と思召候處に、柴田とのを初として、大名衆よりも、秀吉御上洛おたかり候、早々御上洛御尤候と、切々乃使播磨へたち申候事、

秀吉部下
宿札ヲ
洛中洛外
ニ打タシ
ムトノ説

一秀吉御分別も、宿札を殊之外たくさんお御書を被成、其札も羽柴筑前守内鐵炮大將弓頭有名名字を飛き人をも、何某たせしと書付、お宿札を、洛中洛外お打まいさせ、大津、八幡、伏見、深草、醍醐、山科、嵯峨、あやうなる在々迄へ、おたまかく御打まいさせ、被成候事、播磨を御立被成候日より、五日以前も、宿札打まいし候と申來候、上洛の御供の大名小名も、至まらぬおちいぬ、外人をかへら候と聞へ申候、扱を必定也、此度筑前守事を可仕出ると、上下に取沙汰、京中へつまらさ候と聞え申候、さらし播州に目付付付よとて、勝家を初として、皆々おのひくくに目付を被下候事、

秀吉大兵
ヲ率キテ
上洛ス
勝家等狼
狽ヲシテ
都ノ退ク
トノ説

一筑前守殿御分別も、定京中宿札に可驚也、定め我家城にも目付を可下時分あり、さらし出處と思し召陣之様、のほりさし物の、一圓も帶させ、人数二萬計よく、姫地を被成御立候、國々大名衆被付置候目付の者、急京都に走り戻り、其主々へかくと申上候、されどこきとて、先吉法様をの多奉せと、勝家下知し、岐阜を指く三七殿も、柴田とのを初め、敗軍のありさま見え、京中を夜の内に御引拂ひ被成候と聞え申事、

天正十年十月十五日

七三九

秀吉勝家
等退京ス
ルニ依リ
獨リ法事
ヲ管マン
ト報ズ
ノ説

天正十年十月十五日

七四〇

一筑前守殿をゆゆと其跡に上洛を被遂玉へち、大名小名に至るまで、京中よち一人を留る者なき也、洛中町人以下に至るまで、以之外さいた立候も尤之事也、

一筑前守殿、京都よゆゆと遊山して御入候、國々ねの大名衆へ使者を被立候、今度岐阜より御上洛目出度奉存候、上洛仕候處、吉法師様の御供被成、洛中を夜よまたを、岐阜迄さして被成御下候事驚入申候、此上を紫野へ參詣いし、焼香初め可申候、御返事奉待候と、使者を被立候得と、大名衆無面目とや被思ふん、柴田とのを初とし、返狀一通も無之聞へ申候事、

一大名衆よりの返狀無御座候事、能々御聞届被成、扱紫野へ被遂參詣、彼新敷寺に御影の御前より、一番に焼香を被仕候事、○下略、勝家秀吉ヲ除カントシ、越前雪深ク兵ヲ動かシ得ザルヲ以テ、姑ク和スルコトニカ、ル、十一月二日ノ條ニ收ム、

〔細川忠興軍功記〕

一信長様御葬禮、蓮臺野に而被成候、互に御氣遣に而、御警固之儀式、拔身共よて、特々敷相見へ申候由之事、

〔新撰豊臣實錄〕

七 秀吉任官 附 改葬信長部

信雄モ信長
孝モ信長
ノ葬儀ヲ
營マズ

警固ハ拔
ス身ニテナ

○上略、秀吉、敘任、先是七月、秀吉倡導於次丸、至洛陽本能寺、見信長自殺場、愁淚數行甚焦思、秀吉頻雖欲修其葬祭、憚先乎信雄、信孝而不果之、既及九月、二子遂不襄其事、矧舊臣乎、於是秀吉既欲不顧他而營之、自十月十一日至十七日、執行改葬之儀於龍寶山大德寺、今按、在洛陽北乃白米千石、方兄一萬貫、自播州運納大德寺、以充法事數日之費用也、俾杉原七郎左衛門家次、桑原次右衛門、副田甚兵衛監之、洛中洛外近里遠境之男女貴賤、見者蓋如堵、十月十一日轉經、十二日頓寫、施餓鬼、十三日懺法、十四日入室、十五日閣維、十六日宿忌、十七日陸座拈香、就中以十五日為葬日、棺槨共以金紗綾欄裹之、輿軒飾瓔珞、欄千鏤珠玉、八柱竭丹青、八面究彩色、悉畫桐引兩筋、今按、信長家紋、雕沈香、刻佛像、安置棺中、至蓮臺野、四門牽幕、方百二十間、今按、幕用白綾云々、總圍以竹為垣、火場在其中、使羽柴小一郎秀長為警固將、自大德寺至蓮臺野十町之際、勇士一萬有餘、各備鳥銃、弓弩、矛戟、嚴護路之左右、樞前、轅池田古新、今按、後號三左衛門輝政、擔之、後轅於次丸昇之、木主、今按、今於長丸武藏守信吉是也、捧之、太刀、今按、不動國行作、翌日秀吉、秀吉持之、櫬邊從者三千餘人、悉白冠、黻衣、今按、今藤衣、素服、列二行、五岳及諸宗之圓頂、混雜不知幾千人、各勤職、隨輜、功布黼、鬋、香案、食案等、美麗一々、无違記

天正十年十月十五日

七四一

天正十年十月十五日

七四二

之衆僧守役之大概、鎖龕怡雲大和尚、掛真玉仲大和尚、起龕古溪大和尚、念誦春屋大和尚、奠茶仙岳大和尚、拾骨竹澗大和尚、秉炬咲嶺和尚、大禪師、其偈曰、四十九年夢一場、威名說什麼存亡、請看火裡烏曇鉢、吹作梅花遍界香、僧式既畢、於次丸燒香、秀吉次之、今按、斯時信雄信孝不記之、今日巳時、今按、今茲、十、遂焚之、爲九原一邊煙、嗚呼悲哉、將軍全盛時、其威衣被天下、其量獨步古今、上安和宸襟、下憐撫兆民、寔中興名將也、噫、惜有餘、悔不及者乎、(行九)勅使來臨葬處、賜諡官信長、號總見院、贈大相國一品泰巖大居士、信忠爲大雲院仙岩大居士、法會一七日之間、作施行、每日之費用、蓋一百二十斛也、秀吉建立廟宇、號總見院、合祭信忠、且賜白銀千百枚於大德寺主、以充廟碑新造之用、別寄粟五十石之地、以爲信長父子永代之祭領云云、今按、秀吉於大德寺近邊買彼地、其價蓋現米五百石云云、

蓋惟秀吉報亡君之讎之忠、竭改葬之禮之粧、舉世無不感賞之、高傑出古今者、孰覆其功、然潛窺其底意、則專霸者之術、悉假仁義以逞私威者也、至若夫強立三法師者、則恐非阿衡佐太甲之公道、而恰類項籍立義帝之素意者歟、見其行狀而知其肺腑者、豈不羞之哉、

〔龍寶山大德寺誌〕

坤

轉經式

秀勝先ッ
燒香ス
次ニ秀吉
燒香ス

總見院ニ
信忠ヲ合
セ祀ル

一天正十年十月、二十年八月、大德寺兩度轉經會有、六百衆也、其時無今法堂方丈、如初會就方丈補假屋修之、如次會就天瑞寺本殿修之、今失其記焉、故不詳其規也、

拈香陸座清規紫野之例

(二腕之)天正十季壬午十月十七日、總見院殿一百ヶ日、大德寺方丈ニテ、陸座ハ玉仲、拈香ハ春屋陸座ハアジロコシニノリ、唐門ノ外ニテ下ル時(行)キ、蓋ヲサシカクル、一番掛燈籠四箇、行者持、二番ニ杖拂、兄部持行、三番力者、白ハリニテ輿ヲカク、簾ナシ也、次拈香ハヌリコシ也、陸座エンニ上ル時、院主唐戸ノ外ニテ請スル也、陸座小問訊ノ入り、東頭ニ西ムキニ立班ス、次ニ拈香モ同様ニ立班ス、拈香帽子ヲトリ、大衆モトル、班ヲイテ、陸座ニ向テ、小問訊ノ東ニムク、西立班ノ前住ノ首尾ニ小問訊ノ進ミ、中央ヘ普通問訊了、時侍香辨香ヲ香合ノ蓋ニ入レテ奉ル、取テ拈之、香語有リ、了テ本尊ニ香ヲ立、小問訊ノ開山ニ燒香ノ、小問訊ノ、亡者ニ燒香ノ、小問訊ノ、中央ニヨリ唐戸ヲ出テ、法衣ヲヌキ、平衣ヲ掛テ、西立班我位也、

天正十年十月十五日

七四三

法會次第

天正十年十月十五日

七四四

一陸座帽子ヲトリ、大衆モトル也、西立班ノ前住首尾ニ小問訊、中央普通問訊了、時ニ侍香辨香ヲ大香合ノ蓋ニ入レテ奉ル、取テ拈メ前ノ香語了、本尊ニ香ヲ立、小問訊ノ、開山燒香、小問訊ノ、亡者ニ燒香ノ、小問訊ノ、中央ヨリ行キ椅子安座ス、侍香ハ唐戸ノ高卓子ニ、大香合ヲ置也、侍衣侍香卓子ヲ椅子ノ前ニ、主杖往來スル程ニアケヲク、少退キ二人共ニ問訊ノ、侍衣ハ右脇ニ、大聽叫共立也、西班前住衆班尾ヨリ出テ、座前禮メ、東ニ行、唐戸ヲ首ニ東立班也、大衆モ唐戸ヲ首ニ立班スル也、小聽叫帽子ヲサケ、提起メカヘス、侍香又手メ出、卓子前小問訊、請法香ヲ左手ニテ燒ク、坐具ヲ以テ左脇ニ依テ問訊、低頭メ又拂子ヲ取テ、左脇ヨリ謹テ奉テ、如前立班スル也、陸座取リ拈テ、索話禪客ハ大ノ中ヲ出テ、東班尾ヨリ問禪スル也、說法了、拂子ヲ卓子上ニ置也、侍衣侍香共出テ問訊、低頭メ卓子ヲ唐戸ノ外ヘカキ出也、陸座椅子ヲ下ル時、小問訊左右ニスル心也、唐戸ノ外ニ出テ帽子ヲキル時、椅子屏風ヲトリ除也、前住衆如前四立班、本尊ヲ首也、陸座中央ニ出、無燒香ノ立班、維那啓請スル也、半齋法衣ニテ行道ヲ引也、五

之段時ニ本尊ニ燒香ノ小問訊ノ、開山ニ燒香ノ小問訊ノ、中央ニ出三拜了、大聽叫大香合ヲモツ也、亡者ノ前ニ進テ燒香ノ退キ、小問訊ノ如前中央ニ立也、回向了、唐戸ノ外ニ出テ法衣ヲ脱キ、平衣ヲ著メ著座ハ如常也

大聽叫
燒香侍者

拂子
燭

燭
掛

南
屏風
椅子

爐卓

拜席

燭
籠

香合
燭

燭
四

衣鉢侍者

小聽叫

雙

西
堂

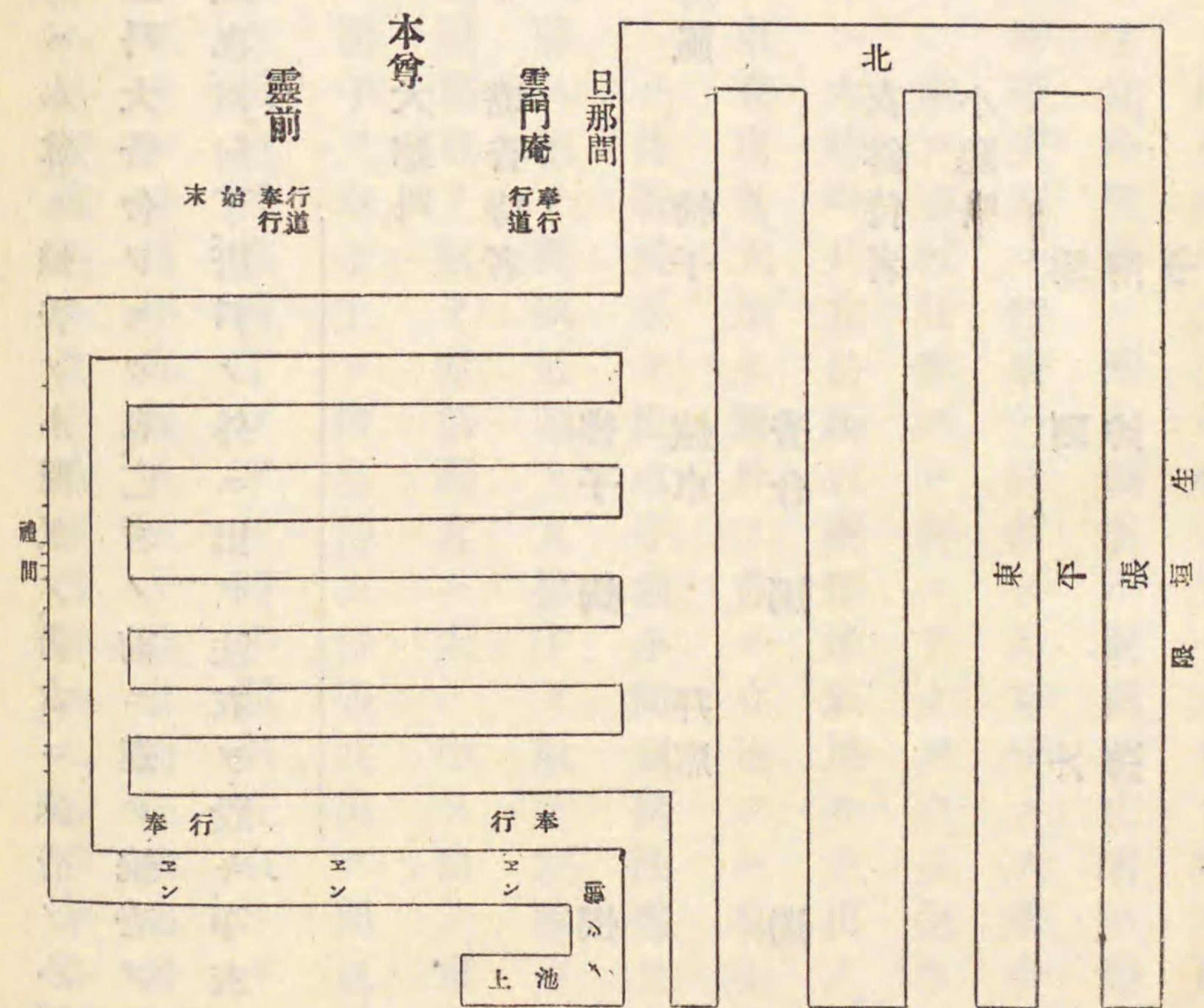
大
衆

前住
平五
山

天正十年十月十五日

七四五

天正十年十月十五日
 總見院殿當日陞座行道之圖 五山皆請當山共六百人之大衆也



〔日本耶蘇會年報〕〔歐文材料第三號譯文〕

八三年及び八四年の日本并に支那の新通信

一五八四年一月二日○天正十一年十一月十一日附長崎發、バードレルイス・フ

ロイスより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

然るにフアシバは、都に歸りて、先づ信長の爲めに、極めて盛大なる葬儀を營むことに決し、之れが爲め、都より四分の一レグワのムラサキの僧院の坊主等に、一萬スクードを與へたり、又甚だ美麗なる棺を造らしめ、恰も其中に信長の死體あるが如くにし、名をウオツキといひ、フアシバの養子となりし彼の幼き子、彼等の習慣に従ひて、喪服を著けたる日本中の領主等と共に、之に手をかけ、其後より金襴の衣を著けたる坊主三千人、及び彼等の虚偽の宗教各派の司祭等、甚だ美麗なる緞子の衣服を著し、水晶の珠數を持ちて行進せり、棺の前には羽柴、信長の劔を抜き、手に持ち歩行せり、茶毘所に達するに及び、坊主等長く經文を讀誦し、且つ數多の迷信を行ひし後、最後に、其一子日本の習慣に従ひて、棺に火をつけたり、而して自然のまゝ寫したる信長の肖像を、僧院に遺して、一同平安に歸途につきたり、

天正十年十月十五日

ふるいす

秀吉盛大ナル葬儀ヲ營ム

信長ノ肖像ヲ僧院ニ遺ス

秀吉秀信ヲ奪フ

秀吉諸大名ノ轉封ヲ謀ル

秀吉大坂ニ城ク

〔訂正 日本西教史〕 第八 章 (歐文材料第四號譯文)

此ニ於テ羽柴ハ、既ニ己レニ抗スル者ナキヲ知リ、幼少ナル織田氏ノ嗣子ヲ、其居城ヨリ出シ、己レノ左右ニ居ラシム、蓋シ此嗣子ヲ奪ヒテ、事ヲ謀ルモノアラシキ事ヲ恐レテナリ、次イテ信長ノ葬禮ノタメ、諸侯ヲ悉ク京師ニ會ス、此葬禮ハ極メテ善美ヲ盡シタリ、然レモ羽柴ノ主トスル所ノ謀ハ、專ラ諸侯ノ封土ヲ變シ、何等ノ親シミナキ地ニ移シテ、以テ諸侯等ノ密ニ事ヲ謀リ、徒黨ヲ組ムノ手段ヲ斷ツニ在リ、而シテ又信長ノ志ヲ繼ク事ヲ示サン爲メニ、其處置ハ皆信長ニ倣ハン事ヲ欲シ、日本全國中ノ最美タル一城ヲ新築セン爲メニ、大坂ノ地ヲ撰ミ、日々五萬ノ役夫ヲ用ヒ、一方又諸侯カ各々安土ニ有スル邸館ニ優ル壯麗宏大ナル邸館ヲ、新都ニ於テ築造セシメ、命ニ從ヒタリキ、○秀吉、大坂城ヲ營ムコト、十月

〔附錄〕

〔織田信長同信忠野位牌〕 ○美濃 崇福寺

惣見院殿贈一品大相國泰岩大居士 覺

織田信長同信忠野位牌

美濃崇福寺所藏

原寸 長一〇・六三

秀吉諸大名ノ轉封

秀吉大坂ニ城ク

ヲ其居城ヨリ出シ己レ
モノアラン事ヲ恐レテナ
會ス、此葬禮ハ極メテ善善
ラ諸侯ノ封土ヲ變シ、何策
ヲ謀リ、徒黨ヲ組ムノ手段
サン爲メニ、其處置ハ皆信
城ヲ新築セン爲メニ、大坂
カ各々安土ニ有スル邸館
シコトヲ望ミタリ、諸侯等
命ニ從ヒタリキ、○秀吉、大

〔附錄〕

〔織田信長同信忠野位牌〕

摺見院殿贈一品大相國奏

秀吉諸大名ノ轉封

秀吉大坂ニ城ク

モノアラン事ヲ恐レテナリ、次イテ信長ノ葬禮ノタメ、諸侯ヲ悉ク京師ニ會ス、此葬禮ハ極メテ善美ヲ盡シタリ、然レモ羽柴ノ主トスル所ノ謀ハ、專ラ諸侯ノ封土ヲ變シ、何等ノ親シミナキ地ニ移シテ、以テ諸侯等ノ密ニ事ヲ謀リ、徒黨ヲ組ムノ手段ヲ斷ツニ在リ、而シテ又信長ノ志ヲ繼ク事ヲ示サン爲メニ、其處置ハ皆信長ニ倣ハン事ヲ欲シ、日本全國中ノ最美タル一城ヲ新築セン爲メニ、大坂ノ地ヲ撰ミ、日々五萬ノ役夫ヲ用ヒ、一方又諸侯カ各々安土ニ有スル邸館ニ、優ル壯麗宏大ナル邸館ヲ、新都ニ於テ築造セシコトヲ望ミタリ、諸侯等ハ皆ナ功ヲ羽柴ニ誇ラント欲シ、精勵神速ソノ命ニ從ヒタリキ、○秀吉大坂城ヲ營ムコト、十一年九月是月ノ條ニ見ユ、十

〔附錄〕

〔織田信長同信忠野位牌〕

崇○美濃福寺

摠見院殿贈一品大相國泰岩大居士

覺

原寸 幅各、〇、〇六三

織田信長同信忠野位牌

美濃崇福寺所藏

原寸

横各〇・〇六三

後見院殿贈一品大將國泰山石大

大禪

寺所藏

原寸
種各〇・〇六三

贈一品大僧正國泰岩大居士 覺

大禪定門 神儀

大^①院殿三品^②□^③□^④大禪定門 神儀

羽柴秀吉、山城山崎城ニ歸ル、養子秀勝モ亦丹波龜山城ニ還ル、

〔言經卿記〕^三 十月十五日、庚子、天晴、

一 織田御次龜山へ、羽柴筑前守山崎城へ、葬已後各被歸了、

神戸信孝、美濃茜部八幡宮社領ヲ安堵ス、

〔岐阜縣續古文書類纂〕^二 證狀之部 織田信孝證狀

^{厚見郡茜部村} 所有茜部神社

あゝかへ八幡宮領拾壹貫八百文之事、如前々宛行^{了カ}フ、聊不可有相違者也、

天正拾

十月十五日

花押

あゝかへ八幡宮

別當

徳川家康、甲斐ノ土飯室昌喜ノ戦功ヲ褒ス、

〔古文書〕^{〇飯室} 〇証録御用所本 飯室次郎兵衛昌喜拜領、同三郎兵衛書上、

天正十年十月十五日、甲州都留郷^{〇都}大竹郷ヨク働、其功ヨ依ク、東照宮ヨリ御

天正十年十月十五日

天正十年十月十五日

七五〇

感之上、高木九助廣次(正)より書簡を贈、

上書 飯室庄左衛門殿へ

返々、今度之御仕合、於私令満足申候、(并伊直政カ)兵部少輔へ此旨可被仰候、已上、折紙披見申候、仍都留之郡大竹之郷へ御働候而、御高名被成候由、頭一則懸御目、一段御機嫌共、彌無御由斷、其口御走廻尤候、何を之衆かいま御注進無之候、隨而先度申候、(おはせし)女之儀、堅御肝煎候而、さやう候て尤候、恐々謹言、

大竹郷

高九助

廣次書判

十月十五日

〔寛政重修諸家譜〕

二百二

飯室昌喜庄左衛門

勝頼よせうへ、天正十年、武田

家没落ののち、諸士とおあしく秋葉山ふをいて、誓詞を東照宮にきて、り、八月二十七日、舊領甲斐國飯室、淺利、山口、鼻輪等、れうちをいて、六十七貫五百文の地をたゐひ、御朱印を下はる、おろとし同國都留郡大竹の郷ふをいて、戦ひ、諸手ふ先ふち、首一級を得て、たてはつりしうば、十月十五日、其の功を賞せられ、のむ高木九助廣正より書狀を送る、○下略、昌喜起請、家康ニ納ル

領、ヲコト、安堵スルコト、八月、七日、家康、昌喜ノ、本

十六日、丑、辛本願寺光佐、光壽父子、羽柴秀吉、惟住長秀、堀秀政ニ物ヲ贈ル、

〔天正日記〕

城〇山

一十月十六日、羽柴筑前守、惟住五郎左衛門、堀久太郎三

人へ爲御音信、河野越中被遣之、薰皮十枚ツ、羽筑取次、淺野彌兵衛へハ、別ニ御音信アリ、

(光壽)新門様ヨリモ、右之三人へ御一禮アリ、羽柴へハ、ハシメ也、寺内伯耆守被遣之、河野ト同道、

羽柴ハ山崎ニ在城、て、則河越ニ逢テ、懇之儀也、

○秀吉、光佐父子ニ答へ、併セテ京畿ノ狀況ヲ報ズルコト、本月二十二日ノ條ニ見ユ、

三河形原邑主松平家忠歿ス、

〔形原松平記〕

甲州御陳之事、(家忠)紀伊守様又七郎様御父子御立被成、御組頭酒

井左衛門尉と也、信長様ハ木曾路を御押被成、權現様ハ駿河路を御押候、山道被成御入、小山田と申者、四郎殿を我ウ城へ御移り被成候ふと、(松平カ)深く御約束申、其後心替仕、四郎殿を甲州郡内へ入不申、たて出し申候、無詮方天目澤

天正十年十月十六日

七五一

光壽始テ
秀吉ニ音
信ヲ通ズ

甲州陣ヨ
リ歸リテ
歿ス

家忠ノ履
歴
吉田城攻
撃

二俣開城

天正十年十月十六日

七五二

此會下よて御腹被召下々の散々ふ罷成候、御合戦も亦く其陳御引取被成候、前紀伊守様者御陳の納也、御年三十六、形原よて御果被成候、又七郎様御陳始也、此合戦之年號ハ天正十壬午三月十一日、武田勝頼切腹也、

〔譜牒餘録〕四十一 松平豊前守

一家忠代

永祿七甲子年、參州吉田城主小原肥余前守を、家康公御攻之時、了念寺口ふ家忠砦を構相戦候、則吉田落城、其とり御手ニ入申候、

永祿十二己巳年、遠州掛川城ふ、石川日向守家成被差置候時、家忠ハ眞蟲塚と申處ハ敵防ハ被仰付、首尾能鎮申候、

元龜年中、遠州小山城を請取可申旨被仰付、罷越候、右同比、遠州小笠山と申所ハ、取出を構申候、此節ハ總人數を被遣、家忠も參候、

元龜三壬申年十月、遠州二俣城を武田信玄より攻時、家忠加勢被仰付、罷越候、此時城代青木又四郎を被籠置候處、甲州方以大勢嚴數日責之、又四郎難保付而乞和、城を渡し、士卒無恙引取候、依之味方原大菩薩と申所ハ

て、家忠家來松平新介康を信玄ハ人質ニ遣申候、又甲州方ハ人質を取リし候、其名ハ知不申候、

同年十一月廿二日、味方原合戦之時、供奉仕相働候、

天正三乙亥年五月、參州長篠合戦之節、組頭酒井左衛門尉忠次と共ハ、松平上

野介、紀伊守等うらかけ被仰付、先掛仕、設樂より出、野田川を渡、鹽澤、吉川所々難所を越へ、鳶巢山之下ニ取出、二構申候、其節長篠城代ハ、奥平九八

郎信昌加勢ハ、鶴殿八郎三郎、松平彌三郎、右三人被籠置候處、武田勝頼出張頻攻之、此時松平上野介、紀伊守兩人共敵之砦を燒拂、得勝利申候、其節

分捕數多、有之候得共、皆討捨ニ仕候、

天正十壬午年、甲州陳之節、紀伊守家忠、又七郎家信父子共ハ、酒井左衛門

尉組ひて罷立候、其外御出陳不殘御供仕候、寛永諸家系圖傳松平家忠傳異事ナリ

〔寛政重修諸家譜〕二十 松平形原

家廣 又七、今の呈

家忠 譜に左太郎、又七郎、紀伊守、母は忠政が女

定信 初家副、紀太郎、又七、早稲、又七、早稲、又七、早稲、紀伊守

天正十年十月十六日

七五三

三方原役
長篠役

甲州陣

天正十年十月十六日

七五四

家忠 永祿七年、吉田の城主小原資良を攻給ひしとき、家忠了念寺口に砦を構へて屢相戦ふ。十二年五月、遠江國掛川城を攻とり給ひ、家忠に仰て、今川氏眞を伊豆國戸倉に送らしめ給ふ。此月、鈞命によりて、石川家成は掛川城を守り、家忠は馬伏塚の要害を守る。元龜三年十月、武田、信玄、遠江國二股城をせむ。家忠援兵として發向せしに、甲軍多勢を以て急にせめしかば、城代青木又四郎某、和を乞て城を避わたす。こゝに於て、家忠も三方原の大菩薩といふ所にて、質をとりかはす。家臣松平新介廣房、質となりて武田が陣に至る。十二月廿二日、三方原の合戦にも、軍忠を勵ます。天正三年五月、長篠の役には、松平上野介康忠と共に、酒井忠次に副られ、先がけて、鳶巢山の要害をせめやぶり、數多の首級を得たり。のち仰を承りて、遠江國小山城をとり、同國小笠山に砦を構へてこれを守る。十年七月、甲斐國にうちいらせたまひしには、男家信とともに、忠次が部下に屬す。其餘御出陣ごとに從ひたてまつる。十月十六日、形原にをいて死す。年三十六。法名淨雲。妻は酒井雅樂頭正親が女。

〔丹波 龜山 松平家譜〕 家忠 左太郎、後又七郎ト云、後又紀伊守ト改ム、家廣ノ嫡

一向一揆

宇津山城
番トナル

子ナリ、母ハ水野氏、天文十六丁未年某月日生ル、

永祿六癸亥年十月、一向門徒參州ニ蜂起シ、家康公ニ敵對ス、累世恩顧ノ家人等モ彼ニ與シ、野寺、佐崎、土呂、針崎ノ邊ニ砦ヲ構ヘ、攻戰ヲ專トス、唯松平一家ノ輩ニハ、我家忠ヲ始トシテ、竹谷家清玄蕃、福釜康親右京、深溝家忠殿主、助藤井信一勘四郎、此等ノミ心ヲ變セス、軍忠ヲ勵ス、

同七甲子年、家康公參州吉田ノ城ヲ攻ム、家忠吉田龍拈寺口ニ砦ヲ構ヘテ敵ヲ防ク、時ニ十八歳、

同十一戊辰年、家康公遠州宇津山ノ城ヲ攻ム、小原肥前守某防戰ニ疲レテ逃去、此時一書ヲ家忠ニ賜フ、其詞ニ云ク、

（後名譽入也）
入手ニ被陣取之由、不相屈儀共候、早速宇津山城ニ被相移、番普請等可被仕候者也、仍如件、

二月十日

御朱印 圓形

松平紀伊守殿

同十二己巳年五月、今川氏眞遠州掛川ノ城ヲ落テ、北條氏政カ許ニ赴カントス、家康公、義元ノ好ミヲ存セラレ、小田原氏政居城ニ送ラシメ給フ、時ニ

天正十年十月十六日

七五五

天正十年十月十六日

七五六

家忠命ヲ受テ、氏眞ヲ送り、伊豆州戸倉ニ至ル、或云、此時石川日向守家成ヲ命メ、遠州蝦蟇塚ノ事トシ、以テ、父家廣勤トス、然レ共、十一年宇津山ノ御書モ、送ルト、蝦蟇塚ノ事トシ、以テ、父家廣勤トス、然レ共、十一年宇津山ノ御書モ、此紀伊守ニ賜ハルナレハ、右ノ兩事モ本ヨリ其以後ノ事タルヲ以テ、此譜中ニ收メ録ス、但シ、父子同時ニ此命アルナラハ、氏眞ヲ送ルハ家忠ニシテ、蝦蟇塚ノ功ハ、家廣ナルヘキカ、

元龜元年庚午年、家康公小笠山ニ砦ヲ構テ、高天神ヲ攻ム、家忠此役ヲ勤ム、或云、高天神ノ城ヲ攻シ、高天神ハサカト云所ノ砦アリ、皆高天神ノ近邊ナリト云、高天神ハ三ヶ年ニ落城ストイヘリ、

同三壬申年十月、武田信玄遠州二俣ノ城ヲ圍テ緊ク攻メ、城兵青木又四郎某保チ難シ、時ニ家康公、家忠ニ加勢ヲ命シ玉フ、程ナク青木和ヲ乞テ、互ニ質ヲ納テ引退ク、我家ヨリモ味方原大菩薩ト云所ニ於テ、新助廣房ヲ質トシ出ス、勘右衛門子、此役ニ、家臣小笠原久大夫某ト云者戰死ス、武田カ質、姓名アル者ノ由ヲ云、或云、此是歲十二月、遠州味方原ノ役、家忠軍功アリ、詳ナレ傳説

天正三乙亥年五月、或云、二日、武田勝頼カ兵、奥平九八郎信昌カ楯籠ル遠州長篠ノ城ヲ攻ム、鶴殿八郎三郎某、松平彌九郎景忠、命ヲ奉テ、奥平ニ加ハルトイヘ共、武田カ兵急ニ攻ム、時ニ酒井左衛門尉忠次、松平上野介康忠、我家忠

ト相共ニ長篠山ノ險難ヲ踰ヘ、深谷ヲ涉テ、鷲巢山ニ上リ、或云、設樂ヨリ出、鹽澤吉川所々ノ難武田カ兵ノ後ロヨリ急ニ進テ攻戰フ、參州ノ俗、是家忠我兵ニ告テ云ク、今日ノ戰太ハタ急ナリ、首級ヲ論スルニ暇アラス、手ニ從テ擊棄ヘシト、是故ニ數多ノ敵ヲ討取ト雖共、家臣等令ヲ守テ功ヲ顯サス、但シ松平但馬貞治、松平新助廣房、坂部藤藏、市川甚五郎、角田久右衛門、市川次大夫等戰功アリ、時ニ戸田半平ハ甲冑ヲ脱キ、長篠川ニ水垢離トリ、再又甲冑ヲ著シ、山上ニ進ミ登テ敵ト組合、谷底ニ陥リ、遂ニ其首ヲ得タリ、家康公遙ニ見玉ヒテ、ソノ勳ヲ賞セララル、後年幕下ニ召出サル、是戸田備後守重利カ高祖父ナリ、

天正十壬午年、或云、三月、家忠命ヲ受テ、酒井左衛門尉忠次ニ屬シ、甲斐州ノ役ニ赴ク、嫡子家信隨從ス、是家忠出陣ノ終ニ、家信ノ初陣也、家信時ニ十七歳、或云、味方ノ兵イマタ甲州ニ著セサル前ニ、武田已ニ敗亡ス、故ニ戰ニ及ハス、是歲十月十六日、形原ニ於テ卒ス、時ニ三十六歳、夫人ハ酒井雅樂助正親ノ女、河内守重忠ノ妹、備後守忠利ノ姉也、寛永十五年三月二十五日、下總州佐倉ニ於テ卒ス、時ニ九十三歳、男子一人、女子二人、嫡子ハ家信ナリ、女子一人ハ參州ノ住足助某ニ嫁ス、足助ハ一人ハ加

天正十年十月十六日

七五七

天正十年十月十六日

七五八

賀爪甚十郎某ニ嫁ス、家康公岡崎在城ノ時、年始ノ禮、謠初出禮著座ノ次第アリ、五人衆アリ、傳説多シ、七家五家ハ祐全月堂〔伊具郡〕ノ子巖津ノ庶子ナリ、七人衆ハ一云安祥、是我家也、

伊達輝宗、磐城金山ニ出陣ス、中村城主相馬義胤、兵ヲ出シテ之ト對峙ス、既ニシテ輝宗退去シ、義胤モ亦兵ヲ收ム、是日、義胤之ヲ蘆名盛隆ニ報ズ、

〔神田孝平氏所藏文書〕三

態々御届書欣然之至候、然者去刻輝宗丸森之地下著、内々如傳説之者、向金山之地可被及張陳之由候之條、及其擬候之處、去こ一向物淺被相動、無時刻被引除候、其後時宜如何、別而無取刷入馬候、因茲於當方も、則時納馬候、於子細者可御心易候、仍爰元無事裁許之段、其听候歟、元宗〔宜理〕如籌策者、金山、小齋兩地永當方有相拘而、和融可然之由候、併輝宗出馬之砌、一和之事更難信用之段、堅固申拂候、於爰元者、無御心許不可有之候、諸每期後説之時候條、閣筆端候、恐々謹言、

拾月十六日

義胤(花押)

蘆名西殿

輝宗丸森ニ著陣ス

宜理元宗伊達相馬兩氏ノ和ヲ計ル

義胤拒絶ス

〔伊達山治家記録〕四

天正十年壬午、公御年三十九

八月己酉、大政宗君伊具郡角田城ヨリ、同郡會津〔金乙〕へ御出馬、廿日許リ御在留、其後小齋ノ内矢目へ御陣ヲ移サル、時ニ相馬殿ハ、小齋金山ノ境明議山ニ備ヲ立ラル、仍テ小齋城邊ノ山ヲ御陣城トシ給ヒテ相備ラル、此節二本松主畠山右京大夫殿義繼、鹽松城主大内備前定綱、各人數ヲ率テ參陣セラ

畠山義繼大内定綱輝宗ノ軍ニ從フ

九月庚戌、大三日戊午、磐瀨〔二階堂盛義夫人伊達氏〕ノ後室へ、三家和睦〔三階堂、蘆名、田村〕以後御無音ニ就テ、御使差進

セラル、矢部宮内ニ御書下サル、○中略、輝宗、二階堂氏後嗣ノコトニツキ、盡日ノ條、且又當地小齋ニ在城シ給ヒ、追日敵地取詰メラル、御本意程有へカラス、心安カルヘキ旨著サル、

〔白石家戰陣略記〕

天正十年の夏、相馬長門守義胤の幕下小齋右衛門尉輝

宗公へ忠節ヲ實否汝聞召届さ給給ひ、同年八月、相馬領へ御出陣、其節二本松義繼、大内備前守定綱も御味方ニ屬シ、都合三千餘騎の以著到、御先手〔宜九〕白理元安齋、同美濃守重宗、既ニ新地、駒ヶ嶺〔相馬郡〕ニ至る、御合戦及、いんとし給ふの處、俄ニ大雨降テ、軍陣の障有ふよ、御手際ニ想手鐵炮〔イ、ウ〕つるへを

天正十年十月十六日

七五九

天正十年十月十六日

七六〇

懸させ、御陣場を引上給ふの處、義胤此時節を見合、くいとめん^(一)に、其時白石宗實後殿の役を勤むるふよつて、此様體を見澄し、手勢五百餘人を以、即時ふゑり返し、遂防戰能敵十騎、雜兵共百人餘討捕、其日の御合戰得御勝利給ふよつて、宗實カ忠義御褒美不斜、相馬失利引退ク、依之米澤に御歸陣、

〔奥相茶話〕

六

伊達兩將押寄金山丸森、相馬兩將被寄矢野目事

天正九年正月朔日、伊達ノ兩將小深田ヨリ合子内矢ノ目へ還リ玉へリ、輝宗、政宗、小齋ノ城ニ打入テ御座ス、亘理元庵ヲ始メ、加勢ノ歷々冥加山ニ備ヲ立ラル、先手成故ト也、前々ハ此邊迄伊達衆寄來ル事侍ラサリシカ、小齋伊達へ被取タル故ト申ス也、○中略、小齋城將佐藤宮内叛シテ、輝宗ニ屬シ、同月四日ニ、伊達ノ兩將金山丸森へ押寄、鐵炮ヲ打掛驚シ給へ、金山ハ佐藤將監城代也、丸森ハ堀内播磨城代也、父雪齋播州輔佐ノ爲ニ、此時分ハ籠城セラレタリ、兩城共ニ上下二百計ノ人數ナレハ、鳴ヲ定テ鐵炮ヲモ不打、只城へ不入用心計也、況ヤ味方ノ兩將大内ニ御在陳ナレハ、猶々敵ヲ可恐事モ無シ、人音モセテ居タリ、輝宗如何思召ケン、攻給ハテ、早々矢野目へ引除給ヒケリ、輝宗他將トハ如何有ケン、相馬へ向テ人數ヲ立合、大將出合テノ

御合戰ハ、二三度ノ外ハナシ、大形盛胤、義胤御出陳ノ跡、人無隙ヲ^(二)、忍テ跡へ廻リ、出シ拔ヲ好ミ玉へリ、又政宗ノ御代ニモ拔ヲ好ミ給フ、義胤ト懸合テノ御合戰ハ、一度モ無リシ也、後々迄モ如斯也、伊達幾備ニテ攻懸ル、此方ハ勿論小身、又一騎ノ加勢モ無レハ、百騎多キ時百五六十計ニテ、敵ヲ請タリ、去ハ侍モ下々モ、威有テ盛ナルニ付習ナレハ、伊達ノ仕出ルニ隨ヒ、近郡ノ大身ハ、和睦ノ爲ニ加勢シ、小身ハ彌付隨ヒケレハ、加勢モ次第ニ多カリキ、故ニ入替々戰へ、味方ハ替へキ人無レハ、朝ヨリ晚迄終日ノ合戰ノ時モ如此ト也、扱味方ノ兩將ハ、六七十騎計ニテ、伊達大將ノ旗見へ來ラヌ内ハ、勸給ハス、大將ト大將ノ見參ナラハ、涼ク合戰シテ勝負ヲ決スヘシトテ、百四五騎ノ騎兵ヲ二ツニ分、御父子ノ御下知ニテ、合戰可有ト待給へ、終ニ輝宗、政宗ノ旗見へ給フ事ナシト、何モ古老共申ケリ、

○義胤ノ部將小齋城主佐藤宮内、亘理元宗ニ依リ、輝宗ニ屬スルコト、四月二十三日ノ條ニ見ユ、

筑後邊春城主邊春鎮信、龍造寺隆信ニ背ク、是日、隆信ノ將鍋島信生等、邊春城ヲ攻メテ之ヲ拔ク、

天正十年十月十六日

七六一

〔鍋島直茂譜考補〕

四 戸原城攻

一 同年ノ冬、(天正十年)戸原薩摩入道紹眞、再ヒ龍造寺ヲ背ヒテ田尻ト引合、豊後へ通シテ、大友勢ヲ引入ントス。此時政家公ハ田尻ヲ攻ラレ、高良山へ陣シテヲハシケルカ、サラハ先ツ田尻ヲ差置キ、戸原入道ヲ可被攻ト、肥筑ノ軍士二萬餘騎ヲ率ヒテ被相向、既ニ十月十四日、(八女郡)戸原河内へ著陣アリ、三手ニ分テ押寄ラレ、大手ノ先陣ハ小川武藏守、二陣ハ直茂公也、搦手ハ後藤伯耆守、山ノ手ノ先陣ハ高良山ノ座主良寛、二陣ハ納富能登守也、三方ノ寄手一同ニ関ノ聲ヲ上ケ、鐵砲ヲ放チ掛テ、即時ニ城戸ヲ打破ラントス、城中ヨリモ同ク鐵砲ヲ打違へテ、其音百千ノ雷ニ不異、直茂公ノ御手ニハ内田美作入道ト菴、神代彈正忠、(北肥戰志ニハ、神代家ノ陣代同名彈正忠、内田美作入道ト菴トアリテ、蒲池西牟田ノ後ニ加へタリ、)西牟田新介家親、蒲池兵庫頭家恆、相加リテ無二無三ニ攻入ントス、城主戸原入道士卒ヲ下知シ、烈ク戰フニ依テ、寄手ノ先陣小川武藏守ニ屬シテ相戰ヒケル、松田權助鐵砲ニ中リテ高股ヲ打貫レ、直茂公ノ御手ニ付テ働キケル持永治部少輔盛秀疵ヲ蒙リ、神代勢ノ中ヨリ、三瀬長門守痛手ヲ負テ半死半生也、(歸陣シテ死ス、)其外綾部尾張守幸義、高木左馬

高良山座主良寛

隆信ノ兵苦戰ス

再攻撃

大輔盛房、原口平次兵衛憲秀、千々岩甚太郎、(北肥戰志、千々岩ヲ除キ、石田新太郎、同萬五郎以下宗徒ノ者共討死シ、)西牟田神代カ兵モ算ヲ亂シテ討レタリ、(北肥戰志、コノ次ニ、搦手ノ後藤勢モ、勵ミ戰テ死傷多ク、又山ノ手ニ向タル高良山ノ座主良寛、一陣ニ進テ、同宿餘多討テ、下ノ小宮以下ノ交名ヲ掲ゲタリ、)山ノ手ニ向フタル納富能登守カ手ニモ、小宮左馬丞、於保左衛門尉、川浪大藏允、牛島兵部丞、同新右衛門、石丸藤太左衛門、小柳彌藤左衛門挑ミ戰フトイヘ、二ノ目ノ軍ニ、小宮左馬丞ヲ初メ、若干討レテ、諸手共ニ寄手不堪引退ク、

一同十六日、直茂公城ノ廻リヲ御巡見アツテ、八戸左近大夫、鹿江伯耆守ニ御下知被成、西牟田蒲池カ猶豫シテ不進ニ、軍使ヲ以テ早速被懸へシ、於延引ハ二心アリト思召ノヨシ被仰遣、其身ハ御手勢七百餘騎ニテ、大手ノ口へ押寄ラル、江副兵部左衛門、一番ニ大矢倉ニ付テ味方ヲ招クニ、三ヶ島又右衛門馳來リ、北島治部丞、陣内相兵衛、大塚勝右衛門相續ヒテ、堀ノ手ニ混々ト付ク、是ヲ見テ、鳴打右衛門佐、江里口藤七兵衛、中野兵庫助、同名式部少輔、大塚内藏允、下村生運、(北肥戰志、大塚ト下村トヲ顛倒シ、)副島右近允、益田善兵衛、澁谷善右衛門、杉町刑部、中橋平兵衛、同勘兵衛、小

天正十年十月十六日

七六四

火矢ヲ以テ城ヲ燒ク邊春鎮信

柳源兵衛モ馳來リ、塀ヲ打破ツテ、各我先ニト乘入ル、于時三ヶ島又右衛門致分捕、喉笛ニ疵ヲ蒙ル、斯ル處ニ、西牟田家親、蒲池家恆モ來リ加リテ相戰フ、○北肥戰志、コノ所ニ、石井五郎右衛門モ手ヲ負メタリトアリ、又田中日向守泰景、同嫡子相兵衛賢秀、二男源右衛門、三男新左衛門、父子兄弟四人、丑寅ノ方ヘ忍ヒ寄り、二ノ丸ヨリ乘込ケルカ、日向守ハ討死シ、相兵衛ハ深手ヲ負テ働キ不得、歸陣シテ死ス、弟源右衛門土手ヲ越テ相戰フニ、副島右近允來リ加ル、搦手後藤伯耆守ノ手ニモ軍始リテ、敵味方手負死人數ヲ不知、此時後藤カ侍土岐心學入道ト、城兵戸原何某ト馬上ニテ切合シカ、後ニハ馬ヨリ下リ、引組テ雙方差副ヲ以テ刺透シ、勝負既ニ見ヘケル處ヲ、兩陣ヨリ下リ合、共ニ左右ヘ引分ケタリ、サレハ此者共不死シテ、塚崎ノ湯ニ入り、參會一笑シケルト也、此外大手ノ戰ヒニ、戸原五郎ト南里太郎三郎組テ臥ス、南里ハ若年ニテ危ク見ヘタリシニ、鍋島大膳馳合セ、戸原ヲ討テ首ヲトル、斯ル處ニ、○北肥戰志、コノ所ニ、鍋島信生ノ手ヨリトアリ、武藤丹後守貞清、例ノ火矢ヲ以テ城中ヲ燒立、中野式部少輔清明モ、城中ヘ入テ火ヲ掛ル、斯リシカハ、餘焰頻リニ覆フテ、城主戸原入道紹真堪ヘ兼、イツクトモナク

ハ、通ルト

豐饒鎮連ニ戰死ス、トスルハ誤トノ説

鎮信降伏ストノ説

天正十一年説、同九年説

落失ケリ、斯テ當城落去シケレハ、政家公直茂公諸軍ヲ引テ御歸陣アル、直茂公此時懷中ヨリ、當城落去ノ注進狀ヲ被取出、隆信公ヘ被送ケリ、當城未タ落城セサルニ、早被認置ケルニヤ、武藤丹後守貞清、去ル天正七年五月、和仁大膳亮カ、城御攻ノ時モ、火矢ヲ仕リテ城ヲ燒ク、每陣如此ト也、

或記ニ云、此時城主戸原薩摩守親隆、并豐饒中務大輔鎮連於當城俱ニ討死スト有リ、非也、豐饒ハ去年於鹽塚城討死ス、于時美作守ト改名、實名ハ鎮速也、前美作守鑑永入道永源ノ子、或記ニ云、戸原紹真入道此度降參、隆信公被許之一所ノ地ヲ被與シトモ、或記ニ云、當城落去ハ、天正十一年十月十七日ノ事成リテ、又云、天正九年トモ、

此時一番ノ山下衆、二番ノ西牟田衆、三番ノ神代衆、皆敵ノ強ニヒシカレテ進ミ不得、公御立腹アリテ、一番ニ乘入ント遊ハサレシニヨリ、下村生運一番ニ構ヲ乘破リ、江里口藤七兵衛、中野甚右衛門續ヒ

天正十年十月十六日

七六五

天正十年十月十六日

七六六

テ乗入ト、略記、

田中日向父子四人、此外一族、十月上旬ヨリ押寄、夜白攻戰、十四日、本丸二ノ丸落城、此時後陣ハ納富、小川ニテ、若落城於延引ハ、入替リ乘取可申旨被仰付ニ付、相戰ヒケルカ、矢狹間ヨリ鐵炮ニテ、日向眞向ヲ射ラレテ即死ス、嫡子相兵衛敵ヲ追拂ヒ、日向ヲ助ケントスル處ニ、敵ニ被押隔、力戰シ二人討取、深手ヲ蒙リ、召仕掛付、相兵衛ヲ助ケ、レレ、七日目ニ相果、二男源右衛門ハ土手ヲ乘越ヘシニ、敵七人前後ヨリ取卷、就中鍵持チタル敵三人掛合セ、源右衛門カ左ノ腕ヲ突、土手ノ石垣ニ押付處、副島左近主從五騎ニテ源右衛門ヲ助ク、此節手疵八ヶ所負ト、田中戰功記、○下略、下ニ掲ケ

〔後藤家事蹟〕

三 十左衛門家信

一天正十年八月、筑後鷹尾城主田尻丹後守鑑種奉背龍造寺、鷹尾城ニ楯籠リ候由、隆信公於須古被聞召、則御征伐之御評定相極リ、其段政家公、直茂公于時信、被仰越候、御兩公子時柳川、御兩公、并家信、城之三方被御取圍、船手カハ田雜大隅守等を以而被爲攻候得共、城中堅固致防禦、數日之

田尻鑑種

隆信鑑種

田尻城守

鎮信鑑種
ニ通シ大
友氏ノ兵
ヲ引ス
ト政家
ヲ攻ム

間落城不致ニ付、先以榎ノ浦之端城を可攻落旨、御評議相決、鷹尾ハ多勢ニ而被御押置、家信を大將ニ而直茂公其外榎ノ浦へ被御取懸候處、田尻鑑種之從弟田尻但馬守入道了哲持口を堅メ、稠敷致防禦候、此時家信家來恆安平六左衛門後岡部姓ニ改ム、先陣ニ罷在、敵二人討捕、弟新兵衛致戰死候、其外塚原與左衛門、吉村藤左衛門等各抽戰功候、寄手烈敷雖仕寄候、城中之者疲候模樣無之、愈堅固相守候ニ付、直茂公于時信、并家信以下榎ノ浦城を被差置、又鷹尾城御圍被成、此時隆信公ニも、田尻難攻之由被聞候得共、守城堅固ニ付、政家公ニ高良山ニ御陣を被爲居、田尻を遠攻被成候、春同シ半部原入道紹眞重而奉背龍造寺、田尻と引合、豊後ニ通シ、大友勢を可引入と仕候ニ付、先以田尻を被差置、部原入道を御攻可有之と、政家公御自身御大將ニ而一陣者小川武藏守、二陣者直茂公、大手カ御進ミ被成候、搦手カ家信を大將ニ而一陣者高良山座主良寛、二陣者納富能登守家理、山ノ手カ相進候、十月十四日、寄手一同御攻入相成候處、城中カも鐵炮を打、稠敷防之、討死手負多ク有之、各責口を甘ケ、向陣を取而御扣相成候處、同十六日、又々寄手一同ニ攻入候、此時三池式部太輔親基家信之手ニ屬而、

天正十年十月十六日

七六七

後藤家信
奮戰

天正十年十月十六日

七六八

豐饒鎮連
ノ戰死

天正七年、親基降參之時、家信推致郷導候に付、後藤之兵稠敷攻入候、大手擲手之兵既に城中に入り、火を掛候處、紹真出城逃去候、右合戦之半、後藤之家臣土岐信覺坊城兵部原何某と出合及接戦、遂に致組撃、信覺坊組伏せ之而短刀に而刺之候處、部原も又短刀に而下る刺之、雙方之勝負相見へ候半、城兵來而部原を救候故、左右に相分レ申候、後年信覺坊入湯之折り、疵を蒙り候者に、出會其者之戦功、且又何レ之戦場に而蒙疵候哉と相尋候處、部原守城之節、強敵に遇、右疵を蒙り候段、相咄候に付、信覺坊怪而、其時日及甲冑之模様相尋候得と、右客委細其時之事を相咄候、信覺坊一笑、其時之敵者則某に而候と申、互に勇氣之程致稱美候而、信覺坊自宅に連歸り、早々響應、其後相通音信候、扱又部原落城之節、豐饒中務太輔、家信之家臣梶山奎之允討捕申候事、

〔佐賀諸家系圖〕

後藤家信 同十年六月、筑州部原親隆叛、隆信公道大軍伐

之家、信屬之隆信公、誅蒲池鎮並、以往田尻鑑種不朝、同十年八月、隆信公使政家公及家信之兵三萬餘人征之、同年部原入道紹真、與田尻鑑種同心、通大友麾下、叛佐嘉政家公、攻鑑種、家信從之、

十月十四日
日落城說
大友義統
鎮信ヲ救
ハントス

〔中原雜記〕

覽〇肥後古記集

一筑後邊春之内粟之尾と云所に、邊春殿城有

天正十年十月十四日、落城也、邊春殿の豐後大友殿旗下也、夫故邊春殿籠城の時も、豐後か肥後ノ山鹿迄加勢の出馬候へ、共早邊春落城故、野上歸陣なり、栗ノ尾の肥前衆責候也、寄手衆川崎殿、黒木殿、加町殿、山下殿、其外國人不殘、扱又肥後境目の武士共押寄ル、肥前衆之陣場烏塚に陣を取、是笠ノ手也、山下殿の猶笠ノ手、此陣場黒仁田と云山ノ手と未申に當ル、からす塚の丑刁に、るさむり、夜の明方朝五ツ迄の合戦なり、一邊春の内熊ノ川の口か松尾に入道に、江子と云村の入口左に高山有、夕日さしの城とて古城跡あり、

〔歷世古文書〕

二

筑後上下之者共構未練候之處、從軍前無別儀心底、乍案中感悅無極候、就中親父大藏事、邊春表惡黨取懸候刻、薩摩守同前戰死之次第、忠義無比類候、連々順儀之心懸依顯然、被抛一命候、併御愁傷察存候、仍筑後當條村共五町分之事預進之候、可有知行候、恐々謹言、

三月廿八日

義統(花押)

天正十年十月十六日

七六九

鎮信戰死
ス義統稱員
大藏戰死
ス功ヲ賞

天正十年十月十六日

稻員式部丞殿

〔歷世古文書〕 三

親父壹岐守統連事、不慮之弓箭以來無別儀以覺悟、邊春薩摩守申談、真心之次第感悅無極候、殊連々申組衆令一致、鎮信宅所に楯籠、手切之粉骨剩壹岐守夫婦、舍兄三郎戰死忠儀無比類候、仍爲其賞、三瀨郡之内牟田口貳町二段分、同郡之内一木七拾五町分、上妻郡之内上妻村拾貳町分之事預置候、可有知行候、恐々謹言、

六月九日

義統 花押

酒井田少輔太郎殿

酒井田少輔太郎殿

義統

就近年不慮之御弓箭、筑後上下之諸侍多分雖構未練候、親父壹岐守事、連々之覺悟令首尾、去年最前以手切、邊春薩摩守同前夫婦嫡子三良戰死、忠儀無比類之條、御感深重候、仍爲其賞、三瀨郡之内牟田口貳町二段分、同郡之内一木七拾五町分、上妻郡之内上妻村拾貳町分被成御裁許之由、以御書被仰出

朽網宗歴

六月九日

宗歴 花押

酒井田少輔太郎殿

酒井田少輔太郎殿

宗歴

朽網三河入道

三月十一日
日落城説

天正十年三月、龍造寺政家遣兵攻邊春城、十一日陷之、城主邊春鎮信稱薩摩守、死之、見高良記等書、九州記邊春鎮信作戸原親運、蓋傳寫之誤、

○邊春落城ノコト、年月日未ダ詳ナラズ、姑ク鍋島直茂譜考補、後藤家事蹟ニ據リテ、本日ノ條ニ掲グ、ナホ龍造寺隆信、田尻鑑種ヲ鷹尾城ニ攻ムルコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔肥陽軍記〕 七 鄰國反事

略○上天正 同十年、筑後ノ國黒木兵庫頭實久入道宗英、返逆シテ籠城スルヨシ聞エケレバ、信生公筑後ノ軍兵ヲ率シテ攻戰ヒタマフ、黒木力盡テ、和平ヲ乞ケル間、ユルシテ諸方ノ先手トセラル、戸原親連ハ戸原城、蒲池益種ハ蒲舟

天正十年十月十六日

七七一

黒木實久

蒲池益種

天正十年十月十六日

七七二

津ニタテゴモリシカバ、信生公勢ヲアツメテ、蒲舟津ヲ攻玉フ、益種勇氣ヲ發シ、防ギタ、カヒケル間、先陣悉クツキクツサル、下村生運、富岡喜左衛門、野田右衛門允ナド死生ヲステ、戦ヒ、悉クツキ崩シ、城中ニ追コム、益種安カラズ思ヒ、ツキ出ツキ出戦ヒケルガ、終ニ討死シテ、蒲舟津責落サル、信生公ヤガテ、戸原城ヲ責タマフ、信生公マツサキニノリ入玉ヘハ、綾部尾張守、高木左馬太夫、原口平次兵衛、石井與次郎、矢面ニス、ミ戦ヒ、處處ニテ討レケリ、南里太郎三郎十五歳トナノリ、戸原五郎ニ組ケルヲ、鍋島大膳落合テ五郎ヲ討、江里口藤七兵衛、中野甚右衛門、下村生運城ニ入テ、處處ニ火ヲカケシカバ、親連防戦ニ及バズ、逐電シ、城ハ一片ノケフリトナル、○下略、田尻隆信ニ叛クコトニカ、ル、本月四日ノ條ニ收ム、龍造寺記異事ナシ、

〔普聞集〕

六

同國戸原薩摩守親運、豊饒中務少輔鎮連モ、田尻ニ一味シ、剩

豊後ニ通ノ大友勢ヲ引入ントス、柳川ヨリ田尻ハワツカノ間也、戸原ハ行程隔ルト云、信生了簡ノ旨アルニ依テ、高尾ヲサシ置、同國蒲池家恒、西牟田家周ヲ先手トシ、近邊ノ武士ヲモヨヲシ、戸原城ヲ圍ム、後藤善次郎、家信、納富能登守賢喜、小川武藏守信俊アヒ從フ、信生城邊ヲ巡ツテ、其強弱ヲ伺

處ニ、八戸左近大夫來テ、信生ニ向ヒ、城ノ体イカニト問、信生拳ヲアケテ云ク、城ハ早掌ノ内ニ有、蒲池家恒、西牟田家周早クヲシヨスヘシト下知ス、二人猶豫スルニ依テ、信生、鹿江太郎左衛門ヲ招キ、二人ハ心替リト見ユ、若其色アラハル、ニ於テハ、可討果トフクメテ、各遅々ニ於テハ、信生先掛スヘシト云、捨ヲシ通ス、諸手同シク續テ一同ニ攻、城内ヨリ敵五百計突出ハラヒ立テ、筑後ノ諸勢ヲ切クツス、味方ノ備左右崩ル、ト云、信生勇氣撓マズ、悉ク突返シヲシツ、イテ攻入、諸勢同時ニ塀ニ付、城内ナラ不屈、血戦マズ、勵シ、綾部尾張守、高木左馬太夫、原口平次兵衛、石井與次郎、千々岩甚太郎已下宗徒ノ侍打死ス、ソノ外神代、内田、西牟田、山下等ノ侍手負、死人多シ、田中日向守、同惣兵衛、同源右衛門、同新左衛門ハ、丑寅ノ方ヘ向ヒ、二丸ニ乗入攻タ、カフ、日向命ヲオトシ、嫡子惣兵衛モ討死ス、次男源右衛門、土手ヲ越力戦ス、副島右近、源右衛門ヲスクフ、其外江里口藤七兵衛、鴨打左馬太夫、同刑部太輔、中野兵庫助、同式部少輔、下村生運、大塚内藏允、副島右近、江副兵部左衛門、増田善兵衛、三ヶ島又右衛門、北島治部、陣内惣兵衛、澁谷善右衛門、杉町刑部、中橋平兵衛、同勘兵衛、小柳源兵衛等、一番ニ乗入、塀ヲヤフリ分

天正十年十月十六日

七七三

天正十年十月十七日

七七四

十月十七日
日落城説

捕ス、于時武藤丹後守貞清火箭ヲ放テ城ヲヤク、中野式部ツ、イテ火ヲカケ、一時ニ灰燼トナシ、斬獲若干也、戸原薩摩守親隆、豊饒中務共ニ討レテ落去ス、時ニ信生、隆信ニ注進センタメ、胄ノ引合セヨリ狀ヲ取出シ、須古ニツカハス、軍以前ニ落去ノ事ヲ認メ置ト云々、

〔水江事略〕

五 同十七日、攻戸原城陷之、（德春）○歴代鎮西要略、歴代鎮西志共ニ十七日、日落城ニ作ル、

十七日、（實）岩代三春城主田村清顯、安齋八郎左衛門、本田平左衛門ニ采地ヲ與フ、

〔松藩搜古〕

二 （安齋村）西新殿村里正新左衛門所藏

此度忠節申候之間、經木之内堀籠之在家無相違出置候、於向後在尙無二奉公可申候、仍而如件、

十月十七日

清顯花押

安齋八郎左衛門とのへ

〔松藩搜古〕

二 （杉澤村）西作在百姓平左衛門所藏

此度安齋治郎左衛門（實）○前掲十月十七日附、清顯知行宛行狀ノ安齋八奉公候ニ付而、其身令馳走候條、菅之澤在家西さく三貫文之處、同在所一貫文之

所、於向後相違有間敷候、爲後日如件、

天正十年十月拾月日

清顯花押

本田平左衛門殿

清顯ハ田村大膳大夫清顯ナリ、此頃ハ杉澤、西新殿、百目木邊、皆田村ニ屬シタルト見ヘタリ、菅ノ澤ハ今ノ杉澤也、

十八日、（卯）神戸信孝、書ヲ羽柴秀吉ニ與ヘテ、柴田勝家ト修睦セシム、是日、秀吉、信孝ニ答書シテ、信孝ノ己ヲ疏斥スルノ非理ヲ陳辯ス、

〔金井文書〕

○津攝

先度者預御書、謹而拜見仕候、○淺野家文書ニハ、本月八日ノ柴田我等間柄何と哉覽被聞召可被成、御肝煎由忝奉存候、乍去、右ニ相定申候一書、并誓紙、血判之筈相違申候ヘリ、何ハる儀も入申間敷存候事、
一 信孝様、（信雄）三助様、其外家康誓紙、并宿老共之一札以下、未來を大事ニ存、我等ハるに所持仕候事、

一 御兄弟様雖多御座候、別而前々よリ被懸御目候條、今以左様ニ可有御座と存候ヘリ、我等程被懸御目候者多出來候故、跡へ罷成無念ニ存候事、

天正十年十月十八日

七七五

勝家が誓約ノ上ハ調停ノ要ナシ、頼スハ信秀、吉ハ信康、等ノ誓紙ヲ所持ス、從來信孝ハ好意ヲ寄ハシガ今ハ然ラズ

信孝信雄
嗣立ヲ争
フ
秀信ヲ立
ツ

秀吉ハ秀
孝ニ托ス

信孝ハ秀
吉ニ安土
ニ移スコ
トヲ肯セ
ズ

秀吉ハ秀
勝ヲ信長
ノ後嗣ト
ナシタル

信孝勝家
等ニ惡マ
ルハ迷

惑

信長ノ命
ヲ受ケテ
西國ノ先
鋒トナル

信長家臣
ノ茶湯ヲ
禁ズ茶湯
秀吉ニ茶
湯ヲ許ス

一層ノ戰
功ヲ勵ム

天正十年十月十八日

七七六

一 信孝様、三助様御兩人、御名代御あはれそひ被成候に付而、何を御名代に立置候のんと、宿老共清須ひて令談合候處、信忠様御子(秀信)を取立申、爲宿老共もアて可申と相定、御兄弟之儀を伺候へり、尤之由被仰出候間、四人之宿老共、かやうにも可有御座と存、御誓紙をまねへと、從清須、岐阜へ御供申、信孝様若君様を預ケ申候事、○秀吉、勝家等、清洲ニ會シ、信長ノ繼嗣ヲ定メ、遺領ヲ處分スルコト、六月二十七日ノ條ニ見ユ、

一日數無幾程御座候に、安土へ若君様を移參らせ給るまじき由、信孝様被仰候て、於于今、其儀無御座候事、○秀吉、長秀ニ書ヲ與ヘテ、秀信ヲ安土ニ迎ヘンコトヲ促スコト、八月十一日ノ條ニ見ユ、

一 御兩人之御兄弟様と、御名代を御あはれそひて御座候に付而、御主ことと致あるき、迷惑仕候、御次も如被成御存知、十五六は御成候て、武者をも被致候間、御主に用申ても、人笑申間敷といへとも、我等養子といひし候間、八幡大菩薩愛宕も御照覽あせ、御主に用させ候事、たゞし申候共有之間敷と、ふつはと思切候事、

一 何様と賢人をはとて、何する儀も、信孝様御事り不及申、御一類迄も御進退成候のぬをり、馳走可申と存候に、何事に而御座候哉、御兄弟様其外御宿老衆之御惡を請申候儀、迷惑に存候事、

一 如御存知、上様御存生之御時も、我等(勝家)播州但州を被下、其上北郡、於于今無不甲斐雖御座候、西國之先懸仕候へと、上様被仰出候に付テ、播州致在陳候處に、三木之別所企謀叛、筑前迷惑仕候處に、重而荒木攝州伊丹(丹重)に在之、謀叛を仕上り、通路を取切雖申候、終別所り、刃首申候に付而、上様重々預御褒美御感狀、其上但州金山、御茶湯道具以下迄取揃被下、御茶湯雖御政道、我等に被免置、茶湯を可仕と被仰出候事、今生後世難忘存候、されやの御人よりゆるしをのよはせらるへきと存出候へり、夜晝泪をうかめ、御一類之御事迄あふにも不存候事、

一 右之御褒美之事り不及申、安土へ致伺公、上様之懸御目候へり、御座所へ被召上候て、筑前額をなてさせられ、侍程之者り、筑前あやかり度可存と被仰出候に付而、猶々之けきをいひし、去年ふて御座候哉、因州之内鳥取之城、雖爲名城取巻申、悉刃首、是又因幡一國之事り不及申、伯耆之國中迄本意仕候事、

天正十年十月十八日

七七七

光秀信長
ヲ弑ス

天正十年十月十八日

七七八

秀吉高松
城ヲ圍ム

信長ノ計
ニ接ス

一 明知^(曾下同)め構逆心、上様京都ニ御座候を、夜討同前といひし、御腹をめさせ候、我等在京をいひし於在之者、小者一僕ニ而成共、御座所へ走入、腹十文字ニ切候共、本意之上、御座候ニ、其刻備中之國へ罷越^(分)か、やの城、^(集)くもの城責崩、悉列首申候て、重高松と申城ハ名城、^(分)三方ニふけを抱、其上堀ひろく、ふけたち不申ニ付而、力責ニ成不申、水責いひまへきと筑前見及申候て、右之高松取巻、堤をせりせ、水とや土居半分ニあり、城迷惑仕候ニ付而、西國悉催、毛利一類後卷ニ罷出、五萬計、筑前二、三万ニ而取巻候所へ、五六町ニ罷越、相陳をかまへ、後卷可仕、敵相定申候事、一 右之陳取、筑前不用後卷、猶々堅取巻申候へ、城主腹を切可申と懇望申候へ、共、免不申候處ニ、六月二日、於京都、上様御腹めされ候由、同四日ニ注進御坐候、筑前おとろき入雖存候、御腹之御供、おそ不申候共、於此陳ニ任本意、城之事ハ不及申、毛利を切崩、列首申候者、明知退治之儀ハやまく御座候と存切、終城主之事ハ不及申、悉列首申候事、^(高松)○高松落城ノコト、六月四日ノ條ニ見ユ、一 手前隙明申候間、毛利陳所へ切懸可切崩ニ相定候處、毛利令懇望、國を五ツ、筑前ニ於人質兩人迄相渡可申由申候へ、共、許容申間敷ニ雖相定、明知

輝元ト和
ス

め討果申度ニ付而、毛利一書、并血判人質兩人迄請取、同七日、廿七里之所を、一日一夜ニ播州姫路へ打入候事、^(秀吉)○秀吉、輝元ト和スルコト、六月四日ノ條ニ見ユ、^(輝元)一 人馬をも相休切上可申と存候處、信孝様大坂ニ御座候を、明知め河内へ令亂入、とや大坂を取巻、御腹を可召之由、八日之酉之刻ニ風便ニ御注進候之間、若信孝様御腹を被召候て、い、なにかも不入儀と存、夜晝あし、十一日之辰之刻ニ、尼崎迄令著陳、人數不相揃討死仕而も、^(河)川を越、致後卷可申ニ相定候事、^(秀吉)○秀吉、尼崎ニ抵ルコト、^(輝元)六月九日ノ條ニ見ユ、

信孝ヲ救
ハシガ爲
メ直ニ尼
崎ニ向フ

山崎ニ兵
ヲ出ス

信孝ヲ迎
フ

一同十二日ニ、池田^(佐興)を致同道、同中川瀬兵衛^(高秀)、高山右近令談合、山崎表へ馳上申候へ、共、高山と中川瀬兵衛と御先をあらそひ候間、筑前申様ニ、高山申も無餘儀候、手先之儀ニ候條、一番合戦候處ニ、陳取をかゝめ、瀬兵衛と申談、合戦之陳取尤之由申候て、兩人ハ山崎之内ニ陳取を固させ、それよと次之天神之馬場迄、我等ものを取續陳とらせ、大坂へ人を進上申候間、働雖可申候、信孝様を相待、富田ニ一夜陳相懸申候事、^(秀吉)○秀吉、信孝ヲ迎フ見ユ、^(輝元)六月十二日

天正十年十月十八日

七七九

山崎役

光秀百姓
ハルニ首ヲ拾

信長ノ仇
ヲ報ジ得
タルハ秀
吉ノ覺悟
ニ依ル

信孝秀吉
ブ殊遇セ

齋藤利堯
岐阜城ヲ
ス吉ニ致

秀吉美濃
尾張等ヲ
平定ス

美濃ヲ信
孝ニ渡ス

尾張ヲ信
雄ニ渡ス
近江北郡
ヲ勝家ニ
渡ス

天正十年十月十八日

七八〇

一次之十三日晝時分、川をこさせられ候條、筑前も御迎へ馳向懸御目候へり、御落泪、筑前も得え申候儀、限無御座候事、

一其十三日之晚、山崎に陳取申候、高山右近、瀨兵衛久太郎手へ、明知め段々二人數立切懸候處を、道筋者高山右近、中川瀨兵衛久太郎切崩候、南之手の池紀者我等者この加藤作内、木村隼人、中村孫平次切崩候、山之手の(羽柴長秀)小一郎、黒田官兵衛、神子田半左衛門、前野將右衛門、木下勘解由、其外人數を以切崩候て、則勝龍寺を取巻候へり、明知め夜落に北落候所を、或は川へ追入候儀り、我等覺悟に而仕候歟、就其明知め山科之藪之中に北入、百姓に首をひろこれ候事、○秀吉、光秀、山崎に戦フコ

一信孝様之致御先懸、御無念をやめさせ候事者、我等覺悟よて候も存候、筑前不罷上候共、終に信孝様、明知め首を刎させ候へき御事、案之内との可被思召候へ共、筑前とやく、毛利をも物之數にせし馳上り、信孝様天下之ほまををとりさられ候り、筑前覺悟に而、何様も在御馳走、かむゆからせ候へきと存候へり、其御感り無御座、人並に被思召候事、迷惑に存候事、

一即江州へ致御供、山本之城阿閉持候といへとも、先人數に申付、首を切可申といへとも、令降參人質を出申に付而、尾濃之御成敗可有之ととより

よ命を助、長濱へ罷通候事、○秀吉、長濱に入リ、阿閉貞大ヲ斬

一濃州之面々城を拵、悉成御敵、いなと山をば、既齋藤玄蕃允被相上候といへとも、長濱へ罷越、我等こいふと山可被相渡に被極候、其外國衆之人質不殘、我等請取申候、長松へ此を馳向候之間、一國之者首を助申候事、

一從其尾州へ罷越、又候哉、惡逆人成敗いふまへきと申候處に、我等清須之御城に居申候へり、國中之人質不殘、三河、信濃、堺迄出シ申候間、不及是非候、是又首を助申候事、○秀吉、美濃、尾張に入リ、光秀ノ殘黨ヲ

一右之ほねたり申候儀り、悉我等一人之覺悟に、雖相任候、御國にけをいふし、御兄弟御兩人様へ先國を可致進上と存候て、宿老共と令談合、濃州之儀り、岐阜御城を久太郎上置申候へ共、御國を相添、一國之人質共、信孝様へ進上申候事、

一尾州をは清須之城相副、一國之人質共、三助様へ相渡申候事、
一御國に相殘御知行方御忠節之者共、其外宿老共、久太郎召置候江州北

天正十年十月十八日

七八一

坂本ヲ長
秀ニ渡ス

信長ノ葬
式ノコト
ヲ信孝信
雄勝家等
ニ計ル

秀吉葬儀
ヲ營ム

齋藤玄蕃
允殿
岡本太郎
左衛門

天正十年十月十八日

七八二

郡之知行并長濱之城迄、柴田誓紙を取相渡申候衰、

一坂本之儀、我等取口ニ可仕由、各雖被申候、坂本を持候ヘハ、天下を以テ、少候テ、筑前天下之意見をも依申度、志賀之郡を相抱候与人も存候ヘハ、少之間も、其以爲迷惑ニ存、賢人をはとた、(惟任長秀)五郎左ニ相渡候事、

一御佛事被仰、御兩人様へ、從御次被申上候由、被申候へ共、兎角之御返事もかく、又ハ御宿老衆御佛事之沙汰も無之ニ付而、天下之外聞如何と存、如御存知、小者一僕之者被召上、國を被下候テ、人並を仕候事ハ、上様之御芳情須彌山よりもたもく奉存ニ付而、不叶御佛事いふし候、御跡をもたうせられ、六十餘州之御佛事御座候ハ、筑前ハ御葬禮過追腹十文字よきり候ても、八幡大井限無御坐候、此由信孝様へ御披露頼入候、恐々謹言、

十月十八日

秀吉在判

齋藤玄蕃允殿

岡本太郎左衛門殿

○谷森氏所藏文書大抵同シ、マダ淺野家文書、太郎左衛門ヲ次郎右衛門ニ作ル、ナホ淺野家文書ハ、本文書ハ、本文書ト多少ノ異同アリ、分割十五日、二十七日、二十五日、二日

信孝秀吉
ヲシテ勝
家ト和セ
シム

四人ノ宿
老談合シ
テ秀信ヲ
立ツ

信長秀吉
ニ播磨但
馬及比近
江北郡ヲ
與フ

〔松花堂所藏古文書集〕

御書謹而拜見仕候、

一柴田と拙者問柄之儀、何と哉覽被及聞召、可被仰扱之旨、忝次第候、雖然右申合候誓紙血判之筈相違候得者、何角及不入儀と存候事、

一上様御他界之刻、信孝様(信雄)三助様御名代之御誼候而就御座候、御主ニ事關申條、何を汝御主用可申与、四人宿老共、清須ニ而致談合、信忠様之御若君様ヲ御主ニ用、四人之宿老共トノ守立可申与談合を究、清須ハ岐阜ハ御供申、若君様を信孝様へ預ケ申候事、

一幾程も無御座候と、若君様ヲ安土へ移被參間舗由被仰、今以若君様御渡無御座候事、

一御次も十五六ニ御歳候(成カ)而、武士ヲモ被致候者、御主にも用申候而、人笑申間舗といへとも、拙子育子ニ而御座候間、八幡大菩薩愛宕及御照覽あを、誰々申候共、御主ニ用させぬ事有之間敷と、ぬつと思切候事、

一上様御存生之御時、拙者ニ者、播州但州ヲ被下、其上江州北之郡今以別儀被仰付、雖無不甲斐候、西國之先懸仕候得与被仰出候付而、去年ニ而御

天正十年十月十八日

七八三

鳥取攻
三木攻

革屋攻
巢松攻
高松攻

在京セバ
信長ニ殉
ズベシ

元和和ヲ
乞フ

光秀ガ信
孝ヲ殺サ
ントスル
風聞ニ接
ス

秀吉信孝
ニ會シテ
泣ク

信長但馬
ノ銀山ヲ
秀吉ニ與
フ茶湯ヲ
許ス

天正十年十月十八日

七八四

座候哉、因州之内鳥取之城取巻在陣仕候之處荒木攝州(伊丹)いさみ(村重)に在之、企謀叛候之處重而三木別所謀叛ヲ仕候上者、上方へ之通路雖取切申ト、終別所カ首ヲ刎申候事、

一其勢を以備中國へ罷立、革屋之城(巢松)、悉くもの城責崩、悉首ヲ刎、重而高松と申城者、名城ニ而、三方ニぬぎ攻構へ、城廣長立不申付而、力責ニ不罷成、水責ニ可致と筑前見及候而堤をせうせ、水とや土居半分ニ上り、城迷惑仕ニ付而、西國毛利一類五萬計ニて、後巻ニ罷立、筑前貳參萬ニ而取巻候處、
□五六町之内敵罷越、相陣ヲ構、後巻可仕由ニ相定候事、

一毛利陣所へ切掛可切崩ニ相定候處ニ、上様京都ニ御坐候ヲ、明知逆心(宇平同シ)を構、致夜討同前ニ、六月二日、御腹被爲召候之由、同六日ニ注進御座候、筑前驚入存候得者、我等致御供、京都ニ就在之者、小者一僕ニ而成共、御座所へ走入、腹十文字ニ切申者、本意之上ニ而御座候、御腹御供ヲ社不申候者、於此陣毛利ヲ切崩候ハ、明智退知之儀安御座候と存知、同六日迄逗留仕、堅取巻責申候處ニ、城迷惑仕候付而、城主可腹切と、種々懇望仕候へ共、覺(免)不申、城主之事者不申及、悉首刎候事、

一筑前右陣所者拂、毛利陣所へ切懸可切崩相定候處ニ、毛利種々令懇望國五ヶ國人質兩人迄請取、廿七里之處ヲ、一日一夜ニ播州姫路迄人數打入候事、

一人馬ヲ相休可切上ルと存候處、信孝様大坂ニ御座候而、明知め河内表へ令亂入、七兵衛殿ト申合、信孝様ニ御腹可爲召ニ相定候由、八日之午ノ刻ニ、風便ニ御注進御座候間、信孝様ニ御腹爲召候而者、何角及不入儀と存、不移時日播州姫路ヲ打立、同十二日、富田ニ一夜致在陣、討死仕候共、河ヲ可越と存候而、大坂へ人を進上申候得者、次之十三日晝程ニ、河を御越被成候、則御迎ニ罷出、懸御目候得者、御落涙、筑前もほへ申候儀、隱無御座候事、

一上様御存生之時、安土に罷越、上様へ懸御目候へ者、御座所へ被召上、筑前う首を撫させられ、侍程之者ハ筑前ニあるり度ト可存と被仰出、其上但州金山、御茶之湯之道具以下迄揃被下、御茶之湯可仕ト被仰出候事、誰哉之人歎、加様ニ御免可被成と存候得者、晝夜泪ヲ浮へ、御兄弟様之御事者不及申、御一類之御事迄あゝにも不存候と、何事ニ而御座候哉、御兄弟

天正十年十月十八日

七八五

天正十年十月十八日

七八六

信孝秀吉
ト共ニ信
長ノ仇ヲ
討ツハ天
下ノ主ト
信孝ハ天
下ノ主ト

様其外御宿老之御ふくみ汝請迷惑候事、
一同十四日、池田ヲ致同道、山崎表ニ打向、敵之様子見合候處、明知目山崎表
へ走向、從正龍寺取續陣取候處、高山右近、荒木瀨兵衛御先ヲ論し申候間、
筑前申様ニ先手之事ニ而候間、高山申後無餘儀候之條、瀨兵衛申合候
而陣取合戰尤之由ニ而、兩人之者共、山崎爲陣取、其次之者共、天神之馬場
迄罷越陣取候而、大坂ノ人ヲ進上申候處、則以御手柄七兵衛殿者被討果
候、拙者池田ト一所ニ罷越、明知目先手ニ高山右近、荒木瀨兵衛切懸候之
處、明知目、信長公之重恩ヲ忘レ、構逆心候ニ付而、蒙天罰候故歟、弓矢不取
直敗軍仕、剩百姓等之手ニ掛り相果候、信孝様之儀者不申及、筑前天下雪
會稽申候、此上者以御覺悟、天下之可爲御主候、不謂御存分、拙者ト御
あくみの段迷惑仕候、雖然一々被聞召著候者可忝候、

十月十四日

筑前

川田彦右衛門殿

岡本太郎左衛門殿
左前掲十月十八日附、齋藤玄蕃九、岡本太郎
附披露狀ニ、本文書八月亦草書狀ナリ、而シテ淺野家トア書リ、マタ十日

信孝勝家
ニ志ヲ通
ズレドモ
ナホ表ハ
サズ

信長ノ在
世中ハ信
孝最モ秀
吉ヲ愛ス

〔参考〕

〔新撰豊臣實錄〕七

秀吉報書織田信孝部

○勝家書ヲ堀秀政ニ與ヘテ、秀吉ノ清洲ノ誓約ニ違背スルヲ責メ、更
ニ山崎ニ築城セルヲ難ズルコト、本月六日ノ條ニ見ユ、
十八日附披露狀ト、コノ文書ノゴトガ、内容殆ド同ヨリ推スニ、本書
ハ唯草案ニ止リ、遂ニ信孝ニ與ヘザリシモ、其ノ事ヲ遂メ、
十四日ニ至リ、信孝ノ書狀ヲ得テ、コノ文書ト同ジ、内
容ノ十八日附披露狀ヲ信孝ニ與ヘシモノナラシ、

同年六月、信長薨後、織田三七信孝、雖勳志於柴田勝家、粗疾秀吉、未顯其事、尙
悔兩將有罅、欲俾之和順、今茲十月上旬、投書秀吉、請之、同月十八日、秀吉寄返
章於齋藤玄蕃助、岡本太郎右衛門、報信孝曰、某與勝家矛盾之趣、君既以悔之
故、辱惠貴書、刷和睦、多幸甚慶、何事外之、君不知哉、今般群侯會于安土之日、誓
書嚴驚鬼神、約諾堅徹心耳、而各無不戰慄栗立、而勝家早背天鑑、忽暗人知、翻
誓書、却妨當家相續之策、所謂人而無信、不知其可也者、其在勝家乎、嗚呼、自先
君全盛之時、諸公子中、君尤以憐臣、故臣亦深銘心不忘之、然今淵瀨頓變、寵賞
起臣者、其幾哉、况又近來黨如斯之勝家、而日所疎臣者、是所以爲君不能無怨

天正十年十月十八日

七八七

信孝清洲ノ誓約ヲ
犯ス則テ
秀則ヲ岐
卓ニ止メ
テ還サズ

再ビ信雄
ト争フ
信長ノ葬
儀ヲ營マ
ズ

長谷川宗
仁信長ノ
討音ヲ齎

望也、且惣見院殿薨去之砌、信雄、信孝兩君今按此書翰中曰兩君者皆指信雄、信孝、下倣之、共論代立先後、然四臣今按柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽長、秀池田勝入、當時謂之信長四臣、於尾州清洲胥議曰、不如立信忠嫡子三郎君、以致嗣系正統之順、以兩君亦肯之、乃奉幼君初移安土、爾來君亦犯其約者尤數條、幼君之貴弟今按後稱左衛門佐秀則是也、尙留岐阜而不還之、想夫尋嚴盟、可速移于安土者歟、是不幾日而蚤變信之一也、於安土既定儲君順治之政、以漸營當家隆榮之籌、然兩君翻其制、而再爭繼位之列、此又奪嫡蔑兄以換約之二也、亡君葬送之設、以道論之、則兩君宜拋他事、先勤之者必矣、然兩君遂以無其志、於次麻呂雖遮窺之、尙不應之、如臣爲知深蒙舊君之厚恩、而生前既不能謝之、悔怛之餘、忘忌憚、自十月中旬一七日之際、與於次麻呂共襄事於大德寺、以聊展謝恩之曼乙、兩君其有何面目、見先君子席前地下乎、加之、今茲夏、臣圍備中高松城、數月竭勞、輝元雖援大軍而救之、某曾不屑之、致水戰荐苦之、然六月三日夜、長谷川宗仁自洛馳脚夫、俄告先君之變、臣聞之、體痿心盪、不知所爲、然以思天下大事、深祕胸裏、曾不顯之、同四日、見城主清水等之生害、然后以故告輝元、臣謂輝元若變約乘其釁、則余亦閣賊先挫之、然以輝元却需和平、爲臣割五州、今按五州者備中、備後、伯耆、出雲、石見也、出二質而尋古盟、乃互誓書血、判示其情、而同八日、

信孝坂本
城ヲ秀吉
ニ與フ
秀吉辭シ
テ長秀ニ
與フ
カヲ以テ
論ズレバ
秀吉ハ信
孝ノ股肱
ベシ心タル

臣速飯于播州姬路城、今按自高松至姬路、凡二十七里、六月六日、去高松、即於是欲暫憩人馬、而後上洛、以悉誅賊臣、八日、暮側聞光秀欲竊略河內國、以剽弑君之在于攝州大坂、臣不堪聞之、即日今按六月八日、帥勞兵出姬路、十一日、早晨著陣于攝州尼崎、縱令雖爲寡兵、欲爲君涉福島川、今按在攝州、先伐之、時光秀在山州淀城、未果策、故十二日、臣拖池田信輝、高山右近、中川清秀等、出張于山州山崎、馳使大坂告事於君、即日宿陣於攝州富田、十三日、君欲誅賊臣、擯兵超福島、於是臣亦自富田出迎、先悼舊君蚤亡、而其不覺悲淚餘襟裾、今日於山崎寶積寺、與光秀對陣一戰、功成蚤礫逆臣、悉肆殘徒、雪羞眼下者、臣等之歡抃何事過之、果從君子江州、拔惟任坂本城、君即日雖錫斯城於臣、以名城故固辭、讓丹羽長秀、爾來濃州數砦、又悉反、臣即自潛謀略稻葉山壘、國中每城各占質、而屬平均、直臻參州信州之境、俾之悉服、以出質、而併尾州之質、與清洲城獻信雄君、併濃州之質、與岐阜城獻信孝君、如此之數事、如臣則可謂能報舊君之志、而爲諸公子亦竭忠矣、寔以功論之、則臣宜列君股肱、又當在其腹心、然君曾不思之、却黨柴田而睨臣者、是何故乎、臣其有何事、進則陪先君、夙夜碎思於四海之騷亂、退則戮逆臣、上下散憤於半月之塵戰、尙欲不銜臣之微忠、而使天下大唱諸君盡至

勝家トノ
和平ハ肯
クコト能
ハズ

天正十年十月十八日

孝、吁濟々貴族藩屏之中、其誰能先乎臣爲此策哉、思之則爲君怨淚頻滴衣、且與勝家平成之事、要非黃泉則不肯之、請君歇強勞貴志云云、自是信孝愈疎秀吉、終逮齟齬矣、

七九〇

羽柴秀吉、禁制ヲ攝津塚口神家ニ掲グ、池田恆興、モ亦禁制ヲ下ス、

〔興正寺文書〕城〇山

禁制

攝州塚口神家

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉之事、

一放火之事、付陣取敵味方撰事、

一相懸矢錢兵糧米事、

右條々、堅令停止訖、若違犯之輩在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾年十月十八日

筑前守(花押)

定條々

攝州塚口

一神家申付上境内寄進諸公事免除之事、

一國質所質、并付沙汰停止事、

國質
所質

矢錢
兵糧米

德政

一不可撰敵味方事、

一陣取免許之事、

一德政禁制之事、

右旨於違犯之輩者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正拾年十月日

恆興(花押)

○佐久間信盛等禁制ヲ塚口ニ下シテ、國質所質ヲ禁ズルコト、六年十月是月ノ條ニ見ユ、

前田利家、能登妙成寺ニ制札ヲ掲グ、

〔北徵遺文〕〇加能越古文
叢三十八所收

制札

一寺内可爲如先々事、

一伐採山林竹木事、

一往還之者於寺中猥之義有之間敷事、

右條々、堅被停止訖、至違犯輩者、速可處嚴科者也、仍如件、

天正拾

天正十年十月十八日

七九一

瀧谷寺

增田長盛

壺ヲ切ル

兼和秀吉ノ安堵狀ヲ得ントシテ案ヲ作ル
妙喜庵

天正十年十月十九日

十月十八日

利家判

七九二

瀧谷寺(羽咋郡妙成寺)

十九日、甲辰神祇大副吉田兼和、山城山崎城ニ羽柴秀吉ヲ訪フ、

〔兼見卿記〕四

十月十九日、甲辰羽柴筑州爲見舞、下向山崎、申刻下著、向長

兵旅宿龍庵、增田仁右衛門今度初而奏者也、登城之間遣人、仕合相尋候處、

後刻左右可登城候由申來、則罷向於門外筑州面會、請宅之間罷向、果子茶

以後退出、二重送出、懇情也、ユカケ二具裏付遣之、仁右衛門鞞墨龍庵綿一

屯、入夜下山、又向長兵旅宿、令滯留了、明日筑州爲茶湯而請之、由用意也、切

壺、今夜各吞之、色以下一段也、長兵滿足了、

筑州折紙之事兩人相談之處、不可有別義也、御朱印之案、折昏之案調遣了、

○兼和、信孝ノ安堵狀ヲ得ルコト、六月十四日ノ條ニ、マダ朝廷、秀吉、長秀ニ、公家衆所領ノ安堵ヲ命ジ給フコト、十二月四日ノ條ニ見ユ、

廿日、乙巳、早天長兵會所向妙喜庵、予齋了、上洛了、○下略

羽柴秀吉、因幡鳥取城守將宮部繼潤ニ命ジテ、軍備ヲ嚴ニシ、且ツ鹿野

城ニ糧米ヲ入レシム、鹿野城主龜井茲矩ニモ亦命ジテ、軍備ヲ嚴ニセシ

堺目

龜井琉球守

秀吉ハ上方ニ於テ隙ノ入ルベシトアル

〔龜井文書〕

○乾石見

就伯芴堺目儀罷越候由從善淨(宮部繼潤)ウハ申越候、打續辛勞共候、猶善淨坊可申候也、

九月十二日

龜井流瑠守とのへ(龜井琉球)

(秀吉)朱印

此書狀共、其方々可被相届候、以上、

態申遣候、

一自然此方々秀吉隙之入候事有之候條、被得其意、伯州境目等之儀、堅可被

申付候事、

一(長秀)小一郎届候兵糧少々可在之候間、鹿野へ五百石も可被差籠候事、
(龜井佐右衛門九)

一大崎、其外之儀者、其方分別次第ニ丈夫ニ可被申付候事、

一用瀬人質之儀、平大夫ウハへも申遣候間、被請取候て、其方々成共、平大夫

所ニ成共、可被置候事、

一其城肝心ニ候間、無油斷可有其覺悟候、此時ニ候條、何も堅可被申付候儀

天正十年十月十九日

七九三

天正十年十月二十日

七九四

專一候爲其兼而能申入候、普請等諸事不可有油斷候、恐々謹言、

十月十九日

秀吉(花押)

(切封上卷)

筑前守

善淨房

秀吉

先度之被罷上見參こ入満足候、○茲矩、姫路ニ抵リ、秀吉ニ謁ス、其城之儀境目之事ニ候間、彌丈夫覺悟專一候、兵糧等之儀、五百石も善淨可被差籠旨申遣候、請取候て、能々可被置候、自然秀吉此方隙入事も可在之候、此時候間、堅固之儀兼而申遣候、普請等用心り、何も不可有油斷候、恐々謹言、

十月十九日

(花押)

(切封上卷)

羽筑

龜井流求守殿 御宿所

秀吉

二十日、乙左中辨萬里小路充房、美濃ヨリ京都ニ還ル、

〔兼見卿記〕

四

十月廿日、乙巳万里小路自濃州上洛、出頭之事、予罷出可馳走之由度々使者、明日可罷出之由返事了、○上下略兼和、山崎ヨリ上洛スルコト及ビ佐竹出羽、惟住長秀

九日ノ扶持ヲ受ケルコトニカ、ル、本月十日ノ條ニ收ム、

廿一日、丙午、出京、万里小路在京也、宿所ニ罷向、出頭之事相談了、

(勸修寺略)勸修寺門へ罷向、面會、万里事相談了、今度先可下向之由、万里存念也、然間出頭不及申入、飯宅了、

○充房、美濃ニ赴クコト、七月二十一日ノ條ニ見ユ、

堀秀政、近江神照寺領ヲ安堵ス、

〔神照寺文書〕

江近

當寺内高頭百六十四石之事、天正六年秀吉任御折紙之旨、全可有寺納候、爲其如此候、恐々謹言、

天正十年

羽柴久太郎

十月廿日

秀政(花押)

神照寺 惣中

德川家康、甲斐ノ士小池筑前ヲシテ、北條氏直ニ屬スル釜無若ヲ拔カシム、

〔乙骨太郎左衛門覺書〕

一十月廿日、(坂下同シ、家康)小池越前、御所様へ御披露申上候様

天正十年十月二十日

七九五

羽柴久太郎

小池筑前
家康ヲ乞フ
兵ヲ乞フ
家康武川
衆等ヲシ
テ援ケシ

大須賀康
高ノ陣所
火ケ
小口番
鐵放衆
取出番

天正十年十月二十日

七九六

と我等之のひ候て、(北巨摩郡釜無)うはふしの小屋をおとし申度候へ共、無勢に而難成候間、御加勢被下候へと被申上候へ、其時之御誼に、(武)河拾貳騎之者を可遣との御誼也、又越前申上候へ、十貳騎之分に而、罷成間敷と申上候へ、又御意に、旗本之者を三千可遣と被仰出候而、則人數被下候、其勢都合五千に而、うはなしの小屋へ押懸、打落申候、惣而其時之首數千百に而御座候、御所様事外御よろこひ被成候事、太郎左衛門首壹ツ取申候、
○家康、小池筑前ヲシテ、忠節ヲ抽ンデシムルコト、六月二十日ノ條ニ見ユ、

〔附録〕

〔家忠日記〕 二 十月二日、(大須賀康高)夜大五郎在陣所へ、火事出來候、
四日、(丑、己)小口番當候、
六日、(卯、辛)雨降、(御嶽小屋)之けこやへ、鐵放衆番に一人ツ、越候、
七日、(辰、壬)取出番に當候、
十日、(未、乙)小口番當候、
十三日、(戌、戊)雨降、

御嶽城山

十五日、(子、壬)雨降、城に不見舞候、
十六日、(丑、癸)小口番に當候、
十八日、(卯、乙)取出番當候、
廿一日、(午、戊)雨降、小口番當候、
廿二日、(未、己)西風あら吹、
廿五日、(戌、壬)雨降、
廿八日、(丑、乙)城へ出候、雨降、小口番當候、

〔甲斐國志〕

四十六 巨摩郡北山筋部九

御嶽城山

是モ亭候烽燧ヲ備ヘシ迹ト

見ユ、御岳里宮ノ東南ナル峭峰ナリ、即チ御岳衆ノ所警衛、山腰ニ蹊アリ、山梨郡河窪ニ出テ、八幡、西保へ通ス、石水寺ノ要害城ニモ、山脈連レリ、山上ニテ東方ヲ遙望スヘシ、南ハ諸山聳エテ見エカタキ故ニ、猪狩村ノ八王子嶺ニモ一所ヲ置キ、亦城山ト稱ス、自是西ヘ下レハ福澤村ナリ、又一坂ヲ踰エテ柳平ニ至ル、皆ナ傳烽ヲ古府、新府ノ方ヘモ、逸見ノ諸口ヘモ達スヘシ、金峰ノ山趾ハ、貳拾里ニ跨カリ、村里モ闊ク、四方ニ十條ノ通路亘リ、金城ノ固メアリ、戰爭ノ世ニハ、實ニ要害ノ内城タリ、天正壬午八月十日、御岳衆ニ賜

天正十年十月二十日

七九七

天正十年十月二十一日

七九八

ハリシ御朱印ニ、御岳足澤小屋中仕置事、並ニ長子之番所各有談合、嚴重可申付之云々トアリ、其頃神祖御巡視ニテ、御一宿アリシトソ、編年集成ニ、同十月六日、御岳ノ城衛トシ、新府在陣ノ諸將ヨリ、輕卒一人ツ、遣ストアルハ、○編年集成ハ、前掲家ハ、忠日記ヲ取リシナリ、加勢ヲ命セラレシナリ、足澤小屋トハ、茅カ嶽ノ東北列峰ノ間ニ蘆澤村アリ、今ハ小物成入會場ニテ、平見城ト名ク、御嶽ノ西壹里餘ニ在リ、蹊路數條亘レリ、此處ヨリ逸見江草ノ岩ノ下番所へ通ス、即チ御嶽衆警固ノ堡障ナリ、長子番所ノ長子ハ、銚子ニ作ルヘシ、金峰ノ頂上ヨリ、信州佐久郡河掃村へ下ル途中ニ在リシ固メナリト云、嶮岨無人ノ境七八里ノ間ナリ、殊更他州ニ交ル地ナレハ、審カニ探訪シカタシ、蓋シ因地形爲名ナルヘシ、

二十一日、丙午羽柴秀吉、書ヲ播磨姫路城留守衆ニ與ヘテ、京畿ノ形勢ヲ報ズ、

〔相州文書〕

二十六 三浦郡 返子村 延命寺藏

態申遣候

五畿内之儀、堅相ト候、人質共之儀、高山右近(長)、中川瀬兵衛(長)、筒井順慶(長)、三好山

五畿内ノ人質ヲトル

池田恆興ト入魂

惟住長秀トモ入魂

長谷川秀一

山崎片家

城谷江三人衆、何も人質共出候事、

一 池勝(池田恆興)之手前相濟、入魂候事、

一 近江之儀、惟五郎事、勿論我等次第入魂、久久(秀一)にて長谷川藤五郎、其外山崎

源太左衛門池田孫二郎、山岡(片家)、何も城之儀、堅申付候、自然何レより惡逆人

罷出候共、物之數、(冊)て有間敷候、若何(冊)る雜説申候共、不可許容候、木工

兵衛をも遣候間、各申談神妙ニ留主儀可申付候、恐々謹言、

筑前守

十月廿一日

秀吉(花押)

小出秀政

小出甚右衛門殿(秀政(左カ))

松浦彌左衛門殿(重政)

蒔田平左衛門殿(久勝)

薄田傳兵衛殿

寺澤藤右衛門殿(弘政)

平野右京殿(長世)

石田四郎兵衛殿

天正十年十月二十一日

七九九

天正十年十月二十一日

寺町權大夫殿

一 牛 齋

八〇〇

神戸信孝、田中眞吉ニ美濃安八郡ノ地ヲ與フ、

〔黃薇古簡集〕

五 田中幸七郎所藏

覺々

かち村郷

榑俣郷

なか村郷

藻池郷

わきたい郷

一かち村之郷

一みれ又之郷

一かち村之郷

一かんどの村

一もいけ之郷

一中□□郷

一上大くれ

一下大くれ

一とさい之郷

以上合六百四十貫餘

けつ所

百廿五貫五百文

けつ所

貳百五十貫餘

同

廿壹貫餘

同

卅壹貫餘

同

卅五貫餘

同

七十三貫餘

公方年貢

廿壹貫餘

けつ所

七十三貫餘

公方年貢

拾九貫餘

天正十年

十月廿一日

田中眞吉とのへ

信孝(花押)

是ヨリ先、足利義昭、織田信長ノ薨去ニ乗ジ、毛利輝元ニ頼リテ、京都ニ復歸セントス、果サズ、尋テ、輝元及ビ羽柴秀吉ノ部將黒田孝高、蜂須賀正勝ヲシテ、之ヲ秀吉ニ説カシム、秀吉諾ス、是日、義昭、孝高ニ物ヲ贈リテ、秀吉説得ノ勞ニ酬ユ、

〔本法寺文書〕

〇山城

信長討果上者、入洛之儀、急度御馳走由、對輝元、隆景申遣條、此節彌可抽忠切事肝要、於本意者可恩賞、仍肩衣袴遣之、猶昭光、家孝可申候也、

六月十三日

(花押)

乃美兵部丞とのへ

〔黒田文書〕

五

態染筆候、藝州和平儀彌無異儀候哉、次歸洛事雖不可有油斷、申聞秀吉、急度令馳走候様、肝煎頼入候、蜂須賀、黒田儀、是又別於入精者、可悦喜由、可相傳段

天正十年十月二十一日

八〇一

乃美宗勝

天正十年十月二十一日

簡要、猶昭光可申候也、

義昭公
御判

八〇二

安國寺惠
瓊

九月廿六日

安國寺

〔黒田文書〕 七

今度歸洛儀申處、秀吉同心之由悦喜此事候、併馳走故候、彌宜様可入精段偏
頼入候爲其差越晴助、太刀一腰、馬一疋遣之、委細安國寺可申候也、

十月廿一日

義昭公
御判

〔附箋〕 黒田如水儀ニ而御座候、 黒田官兵衛尉とのへ

〔筑前黒田家譜〕 一

孝高譜

先年、前征夷大將軍足利義照出走して、毛利家ニ
依頼せらるし、爰ニ於テ、秀吉ニ歸洛を頼ミ、孝高、正勝も情を入をよと
ありし、秀吉承引せらるる、孝高の馳走ふよを以て、十月廿一日、太
刀一腰と馬壹疋を與へらる、

○上
下略

○義昭、紀伊ヨリ備後ニ航シ、京都ニ復歸セントシテ、毛利輝元、島津義
久等ニ援ヲ請フコト、三年二月八日ノ條ニ、コノ後、更ニ京都ニ復歸セ
ントシ、援ヲ島津義久ニ請フコト、本年十一月二日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、豊前神樂城主安心院麟生、大友義統ニ叛ク、義統、佐田鎮綱ニ
命ジテ之ヲ討タシム、是日、鎮綱、神樂城ヲ圍ム、

〔佐田文書〕 九

肥後

安心院中務入道切寄于今相支之由預注進候、被添心候次第祝著候、其表之
儀、毎事田原近江入道被申談、急度落去候之様御才覺頼存候、其堺立柄節々
示給可得其意候、委細猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

十月廿四日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

田原紹忍
ト相談ス

相城ヲ取
付ク

先書如申候、神樂要害于今依相支、相城被取付、鎮綱登城之由候、今度別而被
勵馳走候事、乍案中祝著候、彌各被申談、有才覺彼城早速可落去調儀頼存候、
委細猶雄城肥前入道、小田原左京亮可申候、恐々謹言、

十月廿五日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

天正十年十月二十一日

八〇三

天正十年十月二十一日

八〇四

安心院中務入道要害神樂、于今依相支、田原紹忍被申談前廿一、取詰被遂在陳之由預注進候、御心懸之次第案中候、堺目覺候之條、早々落去候之様、此節別而可被勵忠儀事肝要候、於様體者、義統切々可加下知之條、不及口能候、恐々謹言、

十月廿五日

府蘭(宗麟)花押

佐田彈正忠殿

○神樂開城ノコト、十一年閏正月二十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔豊前古城記〕

神樂城 在同郡龍王

人皇四十四代元正天皇御宇、宇佐兼權太夫諸方八幡宮ニ參籠し、心中乃願望ハ一國守護乃城所、神夢ニ隨ヒ、可草創と祈誓、茂掛け、幣帛、茂捧く、通夜有し、瑞夢乃正しき所を、安心院乃山上と覺、經津主神神樂奏、見、覺ぬ、則山上ニ城、茂築、神樂城と稱ス、安心院氏と改、代々居住、建武乃兵亂より、宇都宮抱城と成、代將替る、住し、永録四年より、大友抱城と成、天正十六年破却、

○義統佐田鎮綱ノ本領ヲ復スルコト、年次未ダ詳ナラズ、仍リテ、便宜左ニ合敘ス、

〔宇都宮文書〕

上津布佐之内廿石分之事、鎮綱由緒之趣、去々年預入魂候之條、必以時分可申談之通書狀進之候、然處、福島佐渡逆意之條、先首尾至義統申理、右地裁許之判形調進之候、雖無申迄候、此節別而忠貞之御心懸肝要候、然者其表調儀半候之間、彼知行安塔之儀、當時者密々專一之段、委細口上申候、可被得其意候、恐々謹言、

十一月廿八日

府蘭(花押)

佐田彈正忠殿

上包 佐田彈正忠殿

義統

津布佐之内廿石分之事、鎮綱依本領訴訟之趣、從休庵承候條、任仰令裁許候之處、爲祝儀銀子廿疋目送給候、委細猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

三月十八日

義統在判

天正十年十月二十一日

八〇五

天正十年十月二十二日

佐田彈正忠殿

八〇六

二十二日、未羽柴秀吉、本願寺光佐、光壽父子ニ答ヘテ、物ヲ贈レルヲ謝シ、併セテ京畿ノ狀況ヲ報ジ、又紀伊根來へ出兵ノコトヲ告グ、

〔淺野家文書〕

尙以御坊領之事蒙仰候、聊不可得御意候、委細淺野彌兵衛(長吉)より可申入候、已上、

信孝勝家
等誓約ニ
背ク
信長ノ葬
儀ヲ營ム
五畿内ヲ
堅ム
中村一氏
等ヲシテ
根來ニ向
ハシム

預御使札、殊薰革十枚被懸御意候、御懇慮之至畏悅存候、隨而今度逆人明智事、拙者覺悟を以即時刎首、天下靜謐ニ申付、城介殿(秀信)若子取立可申ニ各相究候處、無幾程、誓昏血判之筈相違候而其上若子安土へ御上國被押留候之條、不及是非次第候、我等事雖不肖者候、被取上、國々被仰付、如此之段、信長御芳情難忘候條、去十五日、於京都御佛事執行候處、還而各蒙意趣儀、不能分別候、然者五畿内之儀堅相(カ)下、人質共悉取申候就其今度之雜說ニ根來之事、泉州知行等出入在之由候之條、遂糺明爲可申付、廿五日、爲先勢中村孫平次(一氏)伊藤掃部、筒井順慶、淺野彌兵衛、若江三人衆、三好孫七郎、同山城守、其外人數差遣候、依様子自身も可相働候、其元之儀、連々不得如在通候(ハ)、彌御分別尤奉

存候、尙口上ニ申入候條、可被得御意候、恐々謹言、

十月廿二日

秀吉(花押)

下間刑部卿法眼

〔本願寺文書〕

尙爲御香典、金子壹枚被懸御意候、懇志之至候、

從當御門、爲御音信預御使札、殊御馬太刀贈被懸御意候、御懇之儀令祝著候、則御報申入候、隨而今度五畿内人質等之儀、堅相(ハ)隙明候付而、泉州表遂糺明爲可申付、廿五日、爲先勢人數申付差遣候、其元之儀、連々不存疎意候條、其通可被成御心得候、猶追々可申述候、恐々謹言、

十月廿二日

秀吉花押

(切封上卷)

羽筑

下間少進法印

(申之)御返報

秀吉

○光佐父子、秀吉ニ物ヲ贈ルコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

德川家康、甲斐淺間社領ヲ安堵ス、

〔甲斐國寺社由緒書〕

○朝野舊聞哀藁二百七所收

天正十年十月二十二日

八〇七

下間賴廉

下間仲之

天正十年十月二十三日

八〇八

甲斐國惣鎮守一宮淺間大明神所藏

甲斐一宮神領貳百貫文、宮中森林伐事除之、并神主木戸之内諸役免許之事、右如前々不可有相違、彌以此旨、宮社無破壞樣可致修補者也、仍如件、

天正十年十月廿二日

御名乘御書判

一宮神主殿

二十三日、申、戊羽柴秀吉、山城大德寺領ヲ安堵ス、

〔大德寺文書〕〇山城

當寺領、并門前田畠山林所々散在之事、任惣見院殿御朱印旨、如先々、御當知行尤候、誰々御違亂雖在之、我等御馳走申相澄可遣之候、恐々謹言、

天正十年

羽柴筑前守

十月廿三日

秀吉花押

大德寺

納所禪師

〇秀吉、信長ノ爲ニ、大德寺ニ位牌所ヲ營ミ、田地ヲ寄スルコト、本月十五日ノ條ニ見ユ、

信孝京畿
ニ出兵ス
ハシトノ
風説ハ秀
順慶ハ味
吉ニ一

筒井順慶、羽柴秀吉ニ山城山崎ニ會ス、

〔多聞院日記〕〇大和 十月廿三日、

一順慶山崎今朝越了、近日東ヨリ打上、筑州ハ五畿内之衆相調、則順慶モ筑州一味、爲見廻越ト云々、天下ノ様何ニ可破之由沙汰在之、如何々々、

廿五日、

一順慶昨日山崎ヨリ歸了、上略

〇順慶、質ヲ秀吉ニ出スコト、七月十一日ノ條、及ビ本月二十一日ノ條ニ、秀吉ニ從ヒテ、兵ヲ近江ニ出スコト、十二月七日ノ條ニ見ユ、

筑後ノ土酒見右衛門、龍造寺隆信ニ背キ、大友義統ニ屬ス、是日、義統、之ヲ賞シテ、三瀨郡ノ地ヲ與フ、

〔歷世古文書〕ニ

今度以手切出頭、忠儀(義)寔無比類候、仍爲其賞、其方居屋敷蒲池(義)民部少輔跡南分、榎津六町分、同庄分ニケ所、同人跡永藤四町分、同人跡田脇地双分六町、同人跡忽行拾參町分、江嶋太郎跡江嶋參拾町分之内十五町分、加嶋草野右衛門督跡大隈五町分之事、預置候、可有知行候、恐々謹言、

天正十年十月二十三日

八〇九

預置

天正十年十月二十四日

天正十年

午十月廿三日

義統(花押)

八一〇

酒見右衛門殿

二十四日、己酉信濃高遠城主保科正直、酒井忠次ニ依リ、徳川家康ニ屬ス、是日、家康之ヲ賞シ、信濃伊奈半郡ヲ與ヘンコトヲ約ス、

〔寛永諸家系圖傳〕

三十

保科正直甚四郎越前守後

信玄、勝頼二代へ、數

度之忠節あり、天正十年、東照大權現甲州新府へ御打入之處小田原氏直大軍引る上野より碓氷、こえ、甲州へ押よせ對陣の時、正直信州高遠よほり、近邊れ、ものと心汝あは、御味方よまいるへたよし、酒井左衛門尉方よく、降ひ汝もゆく申上し處ふ、御感ありく、伊奈半郡領知を、是の御朱印拜領を、寛政重修諸家譜保科正直講、二萬五千石を領すトアリ、

今度被對當方へ、可有忠信之旨、酒井左衛門尉披露、寔以神妙之至也、早速於手出者、伊奈郡半分可出置事、不可有相違、彌以此旨、可被抽軍忠之狀如件、

天正十年

十月廿四日

御朱印

保科越前守殿

○下略、正直、藤澤頼親ヲ攻ムルコトニカ、ル、十一月是月ノ條ニ收ム、譜牒餘錄異事ナシ、ル、

〔赤羽記〕

○上略、正直ノ子正光、瀧川一益ノ下ヲ逃レテ、眞田眞田昌幸、安房守甚四郎昌幸ニ頼ルコトニカ、ル、六月十九日ノ條ニ收ム、

眞田昌幸
正直ヲ招
ク
高遠奪取
ヲ勸ム

公へ問テ曰、彈正殿行末ハイカント、仰ニ曰、松本ノ小比奈田源太左衛門方ニアルヨシ也、其安房守ノ方ヨリ招ニコサル、彈正公則上田へ來ラシメタマウ、彈正公、甚四郎公、安房殿打寄、人ヲ拂御相談、當時小田原勢強故、シタカウトイエトモ、今世間ヲ見ルニ、家康公ノ軍法健固ナリ、イカニ何方ヘシタカワシヤト、兩公尤ト被同、家康公へ可被順ト、安房守曰、然ハ、彈正殿モ、内藤方ヨリ人數ヲカリ、此砌高遠ノ城主ニナリ、家康公ヨリ朱印ヲトラレ可然トノキナリ、彈正公仰ニ、此コト云遣トモ、大和内藤得心セマシキト也、安房守曰、先遣テ見ラレ候エト、是故狀認被遣ル、大和ノ返事ニ、高遠伊奈ハ小田原ヨリトク朱印ヲ貰、我領スル筈ナリ、隙ナキ故人數ヲ不出、貴殿ハ兄ノ儀ナリハ、惡ハイタスマシ、人數ヲ遣ヘシ、シタカエタマウルヘシトノ返答ナリ、彈正公大ニ立腹シ、遣問敷ト云シ狀ヲ、安房殿助言故、コレ今無心ノ返事ヲミルコト以ノ外ノ氣色ナリ、安房守聞之、日本一ノコトナリ、早々人數ヲ被借

天正十年十月二十四日

八一

正直内藤
大和守ノ
兵ヲ借ル
高遠ヲ奪
取ス

昌幸家康
ニ通ズ

正直使ヲ
家康ニ遣
ス

天正十年十月二十四日

八二二

可然、退治ノ後ハ、自ラ自分ノ領知ニ被致ヨ、武將ノ短氣ハ不宜ト、因茲彈正
公尤ト被同、則己ノ備ヘ立越、大和ト參會、人數五百借友之（伴野カ）十郎左衛門ト云
者ヲ大將ニシテ、高遠ヘ打入、下伊奈ヘ働御手ニ入、天正十年午ノ八月末ト
云、家康公ハ此時新府ヘ働マシマスニ、小田原ヨリ二萬ノ人數ヲ出シ、コロ
サントス、御ナンキハナハタツマリケリ、
眞田、彈正公ト云合ノコトク、新府ヘ使ヲ以曰、我真田安房ト云、上田ヲ領ス、
御味方可仕ト、保科彈正高遠ノ城ヲフマエ在之也、是モ申合ナリ、定而御味
方ノ儀可申上ト、兩人申合上ハ、此邊ニ手立者不可有ト、家康公ヨリ則御朱
印出、御答ニ、其元不可有相違、但彈正方ヨリ何ノ左右モナシト仰越サル、昌
幸、家康ニ屬スルコト、九月二十八日ノ條ニ見ユ、是故安房守立腹、何コトニヲソナワラルソト、彈正
公モイソキ思召トイエトモ、十郎左衛門ヲ初皆已ノ輪ノ者居故、思召ニマ
カセス遅々ス、
彈正公ヨリ御使立、山寺奎左衛門祖父理右衛門、家内奎兩人ナリ、我高遠ノ
城主タリ、御味方可申ナリト、則御朱印來ナリ、伊奈半郡ハ無相違可領ト、伊
奈半郡ハ二萬五千石有、サレトモ十郎左衛門居故、御朱印御開不成ナリ、天

藤澤兵正直親
ト共ニ高直
遠ニ在城
ス
黑河内八
郎左衛門
等ノ處分

正十年午九月ノ事也、酒井左衛門尉殿ニ附而、御朱印御貫被成ナリ、
家康公新府ニマシマシケルニ、小田原ヨリ二萬ノ人數ニテ取ツ、ミ、カテ
ノ通路切、人數籠ノ内ノ鳥ノコトシ、爰ニ鳥井彦右衛門軍内ヨリ出、我勢ニ
江民野伏トモヲカタライ、後詰ヲシ、大忠ノ働ヲシタマウ、其故家康公大ニ
勝タマウ、眞田ハ佐久ノ郡ヲ取故、ウスイヲ切フサキ、小田原ノ通路ヲ切、因
茲小田原勢又途ヲ失ヒケリ、家康公彌危キヲマヌカレサセタマイ、岡崎ヘ
引取タマウ、伊奈ノ士ヒソカニ箭文ヲ以、此節家康公ヘ御順タマエ、御味方
可申上ト、度々申上ル、トク御朱印ハトラルトイエトモ、已ノ輪者多居故、御
開被成事不成、
此節黑河内八郎左衛門ヲ御セイハイ可被成トテ、赤羽又兵衛ニ被仰付、又
兵衛ハ元信玄ニ仕ヘ、勝頼ノ世ニ成、不足在テ引込、在所ニ籠居ス、彈正公高
遠ヘ可被爲入御志ノ時ヨリ奉順ル、因茲御心安被召仕、或夜御酒ヲ被召上
時、手ツカラ間ヲ被成、又兵衛ヲ召、御シヤクニテ御酒被下、ヒソカニ被仰ケ
ルハ、八郎左衛門ヲ可打ト、畏入ヨシヲ申上ル、池上新左衛門ヲ後見ニ云付
ルト、以後新左衛門ニ仰曰、又兵衛ニ用事ヲ云付ル也、順付ヘシト計ナリ、翌

天正十年十月二十四日

八二三

日堀普請有ニ、又兵衛行ミレハ、八郎左衛門下知シテ居ケリ、又兵衛立寄、普請ノ指圖宜カルマシ、イカ、ト云ケレハ、何ヲ云ソ、世倅ナトカ知コトニアラスト云テ、ハヤケトレリ、時刻ヲウツサシト引拔、上意有トテ切ケレハ、クソノ上意ト云サマニ、三尺計ノ太刀ヲ拔打ニ拂切、側ニ八九寸廻ノエノ木アリ、是ヲカケス、切テ落シ、又兵衛首ヘアタリ、フエ計カ、リ、首ノ骨不殘切拂、則切タヲサル、伏ト其マ、ヲキ上リ、前ヘ落ル首、左ノ手ヲ以テ額ヲカ、エ、右ノ片手ニ刀ヲ拔持、八郎左衛門ニモ太刀付ケリ、○コノ邊錯新左衛門走ヨリ、八郎左衛門ト仕合、又兵衛立カ、リ言葉ヲカケ、太刀ヲツエニツキ見物ス、新左衛門終ニ仕留、黒河内ハ大力ノ大勇、彈正公モヤクヲヨリ御覽、又兵衛登城、其趣申上退出ス、フエニモ少アタリ、息出湯水出ケルナリ、然トモ早速平愈ス、又溝口與左衛門御セイハイ也、是ハ鮫島右近ト云者ニ仰付、是モ堀ハタニテ切アイケルニ、ミソ口堀エコロヒケルヲ、鮫島ツ、イテ飛入、ミツ中ニテ切合、終ニミソ口ヲ切殺ス、此者共御セイハイハ、イマタ小比奈田ニ御座アリケル時、伊奈衆ヘ被遣ケルハ、其ヘ立越、其地ヲ打シタカエ度ト、秋山備後、春日河内兩人トモニ、彈正公從弟ナリ、同心ス、其ヲ伊奈衆立

内藤氏ノ援兵歸國ス

金打

腹シ、殊ニ黒河内、溝口甚立腹シ、秋山春日方ヘ押寄打殺ス、上島庄右衛門親秋山ヲ鎧付ケルト云、七十餘歳成ケリ、右ノ品ヲ以、黒河内、溝口ヲハ御セイハイナリ、一瀬ハ少々内通モ有ケルト成、是故安泰也、友ノ十郎左衛門、彈正公ヘ向近寄、申上ル事有之由ヲ云、彈正公刀ニソリヲカケラレ、居ナヲラセ仰ニ曰、カ様ノ節ハ、親ハ子ニ心ヲオキ、子ハ親ヲウタカウ、ナンチナンソ近ウヨルヤト、十郎左衛門退、上意御尤ナリトテ、刀脇差ヲ拔、次ノ間ニ置、御ソハエヨリ申テ曰、只今小田原勢ノ躰ヲ見ルニ、籠ノ内之鳥ノコトシ、私事是ニ長被指置、被召仕被下度ナリ、大和方ヘ逆心ト申ニテハ無之、御足弟(兄弟)ノ御コトナレハ、何方モ同御事ナリ、妻子上州ニ候エハ、御前ヘ御奉公ノ上ハ、於彼地モサセル儀有マシキカ、御人少ケレハ、必御心ヲヤスンセラレ、指ヲカレ度旨申、彈正公聞メシ、仰ニ曰、尤ナリ、乍去其方ハ見合可歸ナリト、十郎左衛門亦申上ル、御意ノ御コトナレトモ、御返アルヘキト不存也ト、又仰ニ曰、必定可返トノ儀ナリ、十郎左衛門曰、然彌無相違御返シ可被成トノ御誓言承知仕度ト、因茲彈正公(金打)キンチャウ被成見セタマウ、十郎左衛門手ヲ合拜シ奉リ、退出シ、其夜取物モ取不合立ノクナリ、○内藤大和守

北條氏直ニ屬スルコト、是ハ彈正公ニハ御別意ナケレトモ、高遠衆皆々御味方ニ無二心ワケヲ見届ケル故、サマシク思イケルト也、此トキ大和ノ旗幕取落シ行ケリ、五百ノ人數トモニ皆々アワテ、歸ル於爰御朱印御開地士ノ面々拜セシメタマウ、因茲皆々案堵スル也、

○下條頼安家康ノ爲ニ、高遠城ヲ奪取スルコト、七月十五日ノ條ニ、飯田ニ據リテ、家康ノ援ヲ乞フコト、八月十二日ノ條ニ、マタ正直、北條氏直ノ軍ニ從ヒテ諏訪ニ出陣スルコト、及ビ高遠城ヲ奪取スルコト、八月六日ノ條ニ、更ニ伊奈郡ニ入り、箕輪城ニ藤澤頼親ヲ攻ムルコト、十一月是月ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔家忠日記増補〕

八月一日、保科越前守正直、高遠ノ城ニ在テ、酒井左衛門尉忠次ヲ以テ、大神君ノ麾下ニ屬シ、軍忠ヲ勵ント請フ、忠次、此旨ヲ新府中ノ御陣ニ達ス、大神君是ヲ許シ給フ、○下略、正直、箕輪城ヲ攻ムルコトニ十月二十四日ノ條ニ、前掲寛永諸家系圖傳ノ保科越前守宛家康知行宛行狀ヲ收ム、略ス、

〔武德編年集成〕

二十 九月廿一日、信州伊奈郡高遠ノ城主保科越前守正

氏正直
室ヲ殺
ス

直ヨリ老臣二人ヲ使節トシ、神君ニ屬セン由ヲ達ス、○下

十月廿四日、保科越前守正直、高遠ノ城ニ在テ、信州ノ士民ヲ諭シ、多ク味方トナスノ由、酒井忠次言上ス、神君伊奈半郡ヲアテ行ハレ、御自筆ノ印章ヲ保科越前守ニ賜フ、○中略、天正十年十月二十四日附、保科越前守宛家康狀、爰ニ於テ、北條怒テ、越前守正直カ最前質トシテ出セシ、其妻子ヲ殺害スル故、松平與次郎忠吉カ後室、神君御妹多劫ノ御方、後日正直ニ再嫁セラルト云、是ヨリ先、徳川家康、家臣高木廣正ヲシテ、尾張ノ士高木清秀ヲ招カシム、是日、清秀、甲斐新府ニ家康ニ謁ス、

〔寛永諸家系圖傳〕

七十 高木清秀善次郎、同十年、大權現、高木九助廣正、陣のとき、大權現を拜して、御旗下に屬せしむる旨、命あるふと、甲州新府御對

〔寛政重修諸家譜〕

三百 高木清秀善次郎、十年、東照宮甲斐國新府に御座るとき、清秀、武名をなせしめ、高木九助廣正を下さり、御

麾下に屬するを、むね仰をかうぬり、すあをちめしに應じて、御陣營おまいり、十月二十四日拜謁し、三河尾張兩國をよひ遠江國豊田郡のうちをい

天正十年十月二十四日

て、采地千石、茂たまふ、

〔参考〕

〔武德編年集成〕

四十

(十月)

高木善次郎清秀六郎左衛門尾州ニ寓居ス、是人水

高木清秀
元水野家
信ハ元ノ家

野下野守信元カ家ニ於テ、精銳ノ士タルユヘ、今度神君、同名九助廣正ヲ以テ招カセ玉フ、則清秀、其弟甚太郎清方、且清秀カ二男内膳一吉、三男善次郎正次ト、正次ト、新府ノ御陣營ニ來リ、謁ヲ執ル、清秀ニ信州伊奈郡ニ於テ千石ヲ賜フ、後主水正ニ任ス、其二男一吉、後志摩守ニ任シ、三男正次、主水正ニ任ス、清秀カ弟清方ハ、天正十九年辛卯、相州ノ内五百六十石ヲ賜リ、清方カ子彦左衛門清政ハ、從弟ノ太田甚九郎、先年長篠ニ於テ戰死シ、其子ナク、家斷絶セシヲ、後年彼家ヲ繼シメ、參州ノ内四百十一石ヲ賜リ、太田彦左衛門ト稱ス、清政ノ弟甚右衛門清元モ神君ニ仕フ、

信濃望月城主望月信雅、村田但馬守ニ采地ヲ與フ、

〔村田文書〕

○信濃

拾貫文有坂之内、拾五貫文鹽田之内、拾五貫文蘆田之内、右之分出置候、向後彌可有奉公者也、仍如件、

壬午 十月廿四日

村田但馬守殿



二十五日、庚戌丹後田邊城主長岡藤孝、京都ヨリ近江坂本ニ赴キ、即日歸京ス、

〔兼見卿記〕

四

十月廿四日、己酉、(長岡藤孝)長兵來、今日逗留、明日下向坂本也、

廿五日、庚戌ニカ、略、惟住長秀、上京セントスルコト長兵坂本ヘ下向、及暮上洛、白川ヘ罷出面會、

廿六日、辛亥、略、長秀上洛、延引ノコトニカ長兵在京候間罷向、(吉田隆勝)盛方院逗留候間直罷向、

卅日、乙卯、出京、長兵在京也罷向面會、

○藤孝、京都ニ入ルコト、本月十五日ノ條ニ、丹後ニ歸ルコト、十一月十二日ノ條ニ見ユ、

二十六日、辛亥北條氏直、信濃高島城主諏訪頼忠ノ臣樋口木工左衛門尉ニ、采地ヲ與フ、

〔兒玉文書〕

○信濃

天正十年十月二十五日 二十六日

天正十年十月二十六日

證文

一所

(小井澤力)
小坂之郷

一所

(東筑摩郡)
諏訪鹽尻

以上

右此度高嶋衆可抽忠信由爲使罷越候、於事成就者、望之地速申上可遣候、仍狀如件、

七月七日

氏照(花押)

氏邦(花押)

樋口木工左衛門尉殿

樋口木工
左衛門尉
諏訪頼忠
爲三氏
直ニ使ス

知行方

一ヶ所

甲州小井澤郷
貳百貫文

一ヶ所

諏訪鹽尻

已上

右之地出置候、彌可被抽忠信旨被仰出者也、仍如件、

小井澤郷

(北條氏、忠)
朱印

天正十年 午

(北條氏、忠)
安房守 奉之

十月廿六日

樋口木工左衛門尉殿

○頼忠、氏直ニ屬スルコト、七月十三日ノ條ニ見ユ、

二十七日、子、飛驒諏訪城主江馬輝盛、松倉城主三木自綱及ビ小島城主小島時光ト戰ヒテ敗死ス、尋テ、時光、諏訪城ヲ奪フ、

〔岐阜縣古文書類纂〕五記文之部 寫本大般若經與書文節略

吉城郡細江村

所有壽樂寺

十七卷畢筆

江馬輝盛
小島城ヲ
攻ム
三木自綱
逆襲ス

天正十年壬午十月廿六日丑刻ニ、江馬方(吉城郡)小島城下取詰處々取合ニ付而不

及戰、荒木地へ引退、然處翌日午刻ニ、(三木自綱)誑庵(飛州志、久)三ヶ所之人數押寄、申

時ニ及合戰、酉刻ニ輝盛討死、其外一家長衆數多戰亡、則廿八日卯刻ニ、高原

へ時光打入、諏訪城無相違、則之(乘)其節此經并大鐘負來之、宮谷寺置之、何ソ法

寶如此哉、

〔飛州千光寺記〕

附○飛州志
錄所收

昔平清盛之時、三郎右衛門景綱從出當國以來、

天正十年十月二十七日

飛騨ノ諸氏

江馬氏ノ出自

自綱輝盛ヲ攻ム
小島時光
自綱ヲ援ク

天正十年十月二十七日

八二二

國士長止出仕、剩切隣國(吉城郡)荒城郡高原郷、江馬小四郎時盛領之、益田郡構城郭、三木大和守直賴在城、大野郡鍋山豐後守、廣瀬右近將監、小田川城前國司姉小路宰相明山、杉崎城小島時光、白川内島氏理、右城々晝夜兵出各相戰、如古異朝戰國七雄、荷鉞裹糧無隙、備尋濫觴、彼江馬先祖者、桓武天皇平氏苗裔、修理大夫經盛卿妾腹出生也、平家滅亡後、彼妾抱一孤、嫁北條時政、後號江馬小四郎輝經、與北條義時不和之間、對北條家欲成讎、故爲賴家卿命、被遠流當國、子孫相繼領知高原、此時左馬頭時盛、長男輝盛、器用骨柄勝人、越中國數箇所、切取中地山拵邑、擲川上中務少輔被居置、誠雖達武勇、不知仁義、血氣勇者也、早爲取家督、討父時盛、積惡餘殃、可有今、一家輩猜之、此家相傳重寶小島太刀、青山琵琶清盛公赤旗、敦盛纒、其外平家累代重物、雖有數多、滅亡至時、係企惡行也、三木聞之爲誅無道、自綱率三千餘騎、欲高原打入、輝盛三千餘兵、蒐出々々合戰、自綱不怵引退、所江馬競來、荒城大坂打越、於八日町相戰、所小島時光加勢自綱、終日戰、屈江馬勢、追散四角八方、輝盛終討死、前國司士卒自綱、與力牛丸又右衛門取首、貫鉞見之、川上縫殿助、同左衛門尉、和爾以下之兵、雙枕自害、哀哉、從輝經數十代、携弓箭施武威、骸骨未乾、名先立消失、爰安國寺別源長

老志依爲大檀那、則營葬禮規式、上略

○輝盛、父時盛ト爭ヒ、上杉輝虎ノ援ヲ請フコト、永祿七年七月二十九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔飛州志〕

八 吉城郡 古城部 小島城

在于小島郷杉崎村、國司姉小路家代々居住ノ本城也、柳ノ御所ト稱ス、城下ニ別業ノ地跡アリ、地名ヲ十樂ト號ス、里人御構御坪ノ内ト云ヘリ、按スルニ、姉小路家任國司ノ年代分明ナラストイヘ共、是後醍醐帝ノ御宇ニ始ルト聞エリ、應永年中、國司尹纒或云尹綱、明應文龜ニ基綱、永正ニ濟繼、大永ニ濟俊等居之、其後天正ニ至ツテ、國司ノ後裔小島右近將監時光居之、天正十年、時光高原郷ノ江馬輝盛ヲ討取リシ事、南光山壽樂禪寺藏大般若經ノ後書ニ見エタリ、然レトモ、時光終ル處分明ナラス、總テ舊國司姉小路家ノ分流三氏アリ、所謂小鷹利氏、小鷹利郷黒内ノ城ニ住ス、向氏ムカイ、同郷信包村ノ向小島ノ城ニ住ス、小島氏、小島郷杉崎村ノ小島ノ城ニ住ス、是也、各其姓名年代等ニ於テハ未詳、國說ニ云ク、國司姉小路家後藤原賴纒、天文四年、小鷹利ノ城

姉小路氏

小島時光

小島城

天正十年十月二十七日

八二三

天正十年十月二十七日

八二四

ニ於テ卒去、法名明山ト云フ、其子右近、母ハ常州ノ人也、然ルニ右近幼稚タルニヨツテ、家臣牛丸又太郎重親、小鷹利ノ城ニ住シテ、是ヲ輔佐セシ所ニ、逆心ヲ起シ、終ニ右近ヲ追出シテ、其跡ヲ押領セリ、此牛丸モ父子三代相續シテ、家苗斷絶ス、右近ハ後常州佐竹家ニ仕ヘテ、向右近ト云、本土所在ノ書ニ、飛州軍亂記ト云フモノアリ、姉小路家ノ事ヲモ記スルヘトモ、或曰、向家説ニ云ク、續太平記ノ説ト同シ、事實分明ナラネト見ルヘシ、飛驒國司姉小路家族小鷹利飛驒守藤原光政、天正年中、常州佐竹義宣ニ奉仕ス、後ニ向右近ト改メリ、光政ハ飛州松倉ノ城主三木大和守自綱カ婿也、

諏訪城

諏訪城

在于同郷殿村、國説ニ云ク、建永年中、江馬小四郎平輝經築之、子孫十七代居城タリ、按スルニ、輝經十七世ヲ常陸守輝盛ト云フ、然ルニ、同郡小島ノ城主小島右近將監時光ヲ攻ルトテ、天正十年壬午十月廿七日、當城ヲ出張シテ、持分同郡八日町梨打ノ城ニ於テ勢ヲ揃ヘテ、小島ノ城ニ押寄せ戰ヒシカ、江馬悉ク打負ケシカハ、輝盛叶ハス、梨打ノ城ヘ引返サントスルニ、敵兵急ニシテ、梨打ノ山下八日町ニ於テ終ニ討死ス、小島家士牛丸又左衛門其首ヲ舉ク、則輝盛所用一文字ノ長刀ヲ分捕スト云、一文字ハ是刀工ノ號ニテ、

牛丸又左衛門

川上縫殿助等輝盛ニ殉ズ

備前國吉岡一文字、福岡一文字トテ二種アル也、於于此江馬累代ノ家臣川上縫殿助、和仁備中守、同與兵衛、寺村長四郎、一瀬源三、山田渡邊等ヲ初メテ、勇士十三人戰死ス、墳墓各今モ八日町ノ路傍ニ在ツテ、御墳ト稱シ、十三墳ト號セリ、此時飛州ノ江馬家終ニ亡ヒ畢ヌ、城地圖地理部ニ載ス、○圖略ス、又同郡小島郷太江村南光山壽樂禪寺藏現在般若經卷第六百之後書ニ、輝盛討死、時光高原ニ打入、諏訪ノ城ヲ乘取リ、分捕等ノ事ヲ載タリ、則小島ノ城ノ譜中ニ出ツ、

〔飛州軍亂記〕

附錄所收

飛州諸將之事

往昔人皇七十八代二條院ノ御宇ニ、平相國清盛ノ家臣飛驒三郎左衛門尉景綱、當國ヲ出シヨリ以來、平家西海ニ亡ビ、源氏モイマダ大平ヲ得ズ、國土長ク出仕ヲ止メテ、州内ニ於テ主タル人無キガ如ク、國土在々所々ニ蜂起シ、己々ニ其威ヲ振ヒ、強キモノハ彌ツヨク、弱キモノハ益弱ク、民ヲムサボリ、仁義ノミチヲサギ、或ハ治メ、或ハ亂レ、年々合戰止ム事ナシ、平家亡ビテ後、源家三代、北條モ九代ニシテ悉ク亡ビタリ、其後國々ノ諸士所々ニ起リテ、聖治ノ澤ヲ蒙ラズ、義貞、尊氏モ合戰シテ、天下久ク靜カ成ラズ、其ノ後飛

天正十年十月二十七日

八二五

州ニ於テ、兵威ヲ振フ者少カラズ、先ヅ益田郡櫻洞ノ城ニハ、宇多源氏ノ後胤三木右京大夫自綱、後大野郡松倉ノ城ニ住ス、大野郡鍋山ノ城ニハ、鍋山豊後守安室、同白川ノ城ニハ、内島兵庫頭氏理、家臣河尻備中守氏信、山下豊前守定安、同山下ノ城ニ、一宮右衛門大夫國綱、同江名子ノ城ニ、畑六郎右衛門尉休高、荒城郡高原ニ、桓武帝ノ後胤江馬左馬頭小四郎時盛、同廣瀨高堂ノ城ニハ、利仁將軍ノ後胤廣瀨山城守宗城、家臣河尻右近、田中與三、右衛門一族、堀越前守、同杉崎ノ城ニハ、小島左近將監時光、同小鷹利ノ城ニハ、姉小路ノ宰相藤原頼纒、入道明山、家臣牛丸又右衛門重頼、同中島ノ城ニハ、向右近大夫、同古川蛤ノ城ニハ、鹽屋筑前守等也、

(頭書) 按ズルニ、國說或ハ其家系ト稱スルモノヲ見ルニ、三木氏ハ藤原或ハ源姓、其ノ先江州京極家ノ臣也、鍋山氏ハ本氏平野、信州ノ人也、内島氏ハ橘姓、本氏ハ和田也、一宮氏ハ本土ノ人、本姓氏未詳、畑氏ハ姓氏來由未考、廣瀨ハ本土ニ在名アリ、小島氏ハ藤原姓、姉小路家ノ餘裔ニシテ、小島氏、小鷹利氏、向氏アリ、各本土ノ在名ナリ、鹽屋氏ハ姓氏來由未詳、委ク古城部ニノセタリ、其餘下ニ併セ可考、

鹽谷筑前守討死之事

天正四年三月、上杉越中ニ入テ所々ニ働キ、鹽屋筑前守ヲ先鋒トシテ、飛驒國ヘ討入給フ、此時ニ於テ江馬輝盛勢盡テ亡フ、

(頭書) 按ズルニ、此江馬輝盛、天正四年上杉ト戰ヒ亡フトアルハ相違ナリ、江馬家ノ滅亡ハ天正十年也、今世本土ノ民所持スル所、天正五年、同六年等ノ文書アリ、○上下略、鹽谷筑前守討死ノコト等ニカ、ル

飛州江馬家之事

抑當國江間家ノ先祖ヲ尋ルニ、桓武天皇ノ後胤平相國清盛ノ舍弟修理大夫經盛卿ノ子ナリ、平家西海ニ沈亡セシヨリ以來、彼妾力ナク孤子ヲイタキテ、身ノ置所ナキ折カラ、北條ノ時政ニカタラヒ、彼孤子ヲ養育ス、日ヲ重ネ月ヲコエテ成長シ、江馬小四郎輝經ト名乗ル、

(頭書) 按ズルニ、飛州江馬家ノ來由未詳、北條時政ノ長男江間小四郎義時アリ、江間、江馬同稱タルカ故ニ、後世其說ヲモフケタルカ、日本古今治亂記之能登國ノ侍江馬常陸守時宣ト云人アリ、尙可考、

時政ノ長子義時トイツノ比ヨリカ不和成シカ、後義時ニアタヲナサント

ハカル、義時早ク其色ヲサトリテ、頼家公ノ仰ナリト偽リ、則輝經ヲ飛驒國
ヘ流シ遣シタリ、然ルニ高原ト云所ニ代々住シ、子孫相續ス、高原ニ在城シ
テ高原郷ヲ領ス、清盛ノ重寶小鳥ノ太刀、一文字ノ薙刀、青葉ノ笛等ヲ持傳
テ家寶トス、其後輝經ヨリ十代ニシテ、左馬頭時盛、其子常陸介輝盛ニ至リ
テ、武威ヲ振、越中ニ討入り、新川郡ヲ切取ルト也、

江馬家滅亡之事

然ル所ニ、江間常陸介輝盛ハ、越中新川ノ領分中地山城ヲ構テ、譜代ノ家老
神代、川上、和仁等ヲ入置、其身ハ甲斐ノ信玄ニ仕ヘアリシニ、謙信方ヨリ中
地山ヘ押掛ケ攻ケレハ、川上、神代、和仁等、タマラスシテ方々ヘ逃落タリ、輝
盛、甲州ニテ此有様ヲ聞、彌信玄ニツカヘ、其上高原ノ圓城寺ハ舍弟ナレハ、
甲州ニ迎テ信玄ヘ人質ニ渡シケレハ、○飛驒治亂記ニハ、コノトコロニ、輝
盛ガ頃ハ天正八年ノ正月、急度思案
ヲ廻ラシ、高原殿村圓城寺ハ舍弟ナレバ、甲州ヘ呼トリ、信玄ヘ人質ニ出シ、
加勢ノ人數被下候ハ、飛驒國中乘取御手ニ入ント被申上ケレバトアリ、
信玄是ヲ還俗サセテ、江島右馬允ト名乗ラセ、手勢ヲ預ケ、幕下ノ先鋒トシ
テ、既ニ飛驒國退治セント極ム、三木自綱是ヲ聞、大キニ驚キ、國中ノ諸將ヲ
觸カタラヒテ、手勢一千餘人引卒ス、廣瀨山城守モ、此時ハ三木ニ縁ヲ組シ

輝盛信玄
ニ仕フ

信玄江馬
右馬允トシ
先鋒トシ
テ飛驒ヲ
定メント
ス
三木自綱
ノ防戦

廣瀨山城
守自綱ヲ
助ク

小島時光
自綱ヲ援
ク

故、休菴ニ加ル、江馬常陸介手勢三百餘騎ニ、越中落去ノ家臣和仁、川上、神代
等ノ士卒ヲ引卒シテ相加ル故ニ、高原ヲ出馬シテ、荒城ニ討出テ責戦フ、三
木ノ勢并ニ廣瀨、牛丸大勢ナリトイヘ共、輝盛物ノカストモセス、手イタク
相戦ヒ、自身一文字ノ大薙刀ヲ以テ大勢ヲ切崩シ、追立々々勝ニ乗テ戦ヒ
ケル處ニ、小島時光三木方ニ加勢シ寄來ル故ニ、サシモノ江馬モ戦ヒ疲レ、
八日町ト云所ノ橋ノ邊ニ立ヤスラヒ居タル所ニ、牛丸亦太郎生年十七歳、
唯一騎カケ乘リ切テカ、ル、輝盛彼薙刀ヲ取直シタリシカ、運命是マテト
ヤ思ヒケン、薙刀ヲ打捨、牛丸ヲ呼ンテ、汝大將ノ首ヲ取ル法ヲ知タルヤト
イフテ、首ヲ指ノヘテ牛丸ニ討セケリ、牛丸首ヲ得テ立去リシカハ、江馬ノ
家臣川上左衛門尉、同縫殿介、和仁經氏、神代某以下ノ者トモ走歸リ、此有様
ヲミテ、同枕ニ討死ス、アハレムヘシ、先祖輝經ヨリ數代弓箭ニ携リテ、譽ヲ
取ル家ノ、一時ニ亡ヒ失シ事痛ハシキ有様ナリ、輝盛ノ骸ハ、八日町ノ橋ノ
邊リニ塚トナス、代々ノ領主タルニヨリテ、尊敬シテ御墳ト云、長刀ハ牛丸
取ツテ、後ニ金森ニ進上スルト也、

○以下江馬輝盛、及ビ其一族家臣等ノコトニカ、ル、

輝盛ノ花
押

天正十年十月二十七日

〔花押彙纂〕

部エ之

江馬輝盛

八三〇



○上杉文書(影)
卯月廿五日附河田豐前守宛書狀

〔飛州志〕

古墳 溫故部 御墓

在于同郡吉城郷八日町村、是同郡高原郷諏訪ノ城主江馬常陸守平輝盛墳墓也、來由古城部ニアリ、

十三墳

在于同村、是江馬輝盛戰死ノ時、其家臣川上縫殿介和仁備中守、川上左衛門、神代ヲ始メ、累代ノ家士十三人、同所ニ於テ討死セリ、其墳墓也、

〔飛州志〕

八 古城郡

江馬家譜略考

平輝經

時盛

江馬氏世系

家臣ノ墓

輝盛ノ墓

輝經

宣盛

輝盛

右馬允

小四郎

輝經 國說ニ云ク、江馬小四郎ト云、飛州江馬家ノ曩祖、其先平相國清盛ノ

舍弟參議備中守經盛ノ子也、平家沒落ノ後、其妾孤子ヲ抱キテ隱ル、後北條時政ノ妾ト成リテ、彼ノ孤子ヲ養育ス、是輝經也、建永年中、飛州ニ來リ、

當城ヲ築キ、是ヨリ子孫十七世相續ス、同村天照山圓城禪寺說ニ云ク、當

寺開基大檀那江馬小四郎修理亮平輝經、貞應元年壬午十月廿七日卒去、

法號圓城寺殿前匠作勇山威公大禪定門、以上按スルニ、北條時政ノ嫡男

江馬小四郎義時アリ、江馬ハ豆州ノ在名タリ、飛州ノ江馬事實未勘、

時經 國說ニ云ク、是輝經十五世常陸介ト云フ、享祿天文ノ間ノ人也、凡テ

代々ノ名字不知、按スルニ、日本古今治亂記ニ、能登國ノ住人江馬常陸介

時宣ト云人アリ、來由未勘、

時盛 國說ニ云ク、時經ノ長子常陸介、左馬頭、越後上杉家ニ屬ス、天正六年

時盛

時經

天正十年十月二十七日

八三一

天正十年十月二十七日

八三二

宣盛

戊寅七月十六日横死ス、或云、嫡子輝盛是ヲ弑ストモ云、
宣盛 國説ニ云ク、時經第二子麻生野右衛門大夫ト云、同郡麻生野村洞ノ
城ノ譜中ニ載ス、

輝盛

輝盛 國説ニ云ク、時盛長子、初メハ上杉ニ屬シ、後ニ武田ニ屬セリ、天正十
年戰死、甲陽軍鑑ニ云ク、永祿七年甲子五月、飛驒半國ノ主江馬常陸守ト
云フ、侍大將降參仕リ、弟坊主園城寺ヲ甲府へ人質ニ進上申候、此出家ヲ
江馬右馬允ニ成サレ、足輕ヲ預ケラル、御旗本ニ置タマフ、按スルニ、園城
寺トアルハ、圓城寺ナル歟、

右馬允

右馬允 同郷麻生野村慶雲山兩全寺説ニ云ク、常陸介時盛第二子右馬允、
第三子小四郎兩人心ヲ合セテ、當寺ヲ建立スルカ故ニ兩全寺ト號ス、法
名心月行安居士、

小四郎

小四郎 同寺説ニ云ク、時盛第三子小四郎是也、法名廣清宗久居士、
以上、飛州江馬家ノ來由國説ヲ載ス、

江馬ノ下館

江馬之下館
在于同村、（舊傳）諏訪ノ城ノ根小屋跡也、

江馬ノ館

江馬之御館

在于同村、是越中口ノ要害也、江馬輝盛甲州武田ニ屬スルニヨツテ、信玄越
中發向ノ爲トシテ、甲士山縣三郎兵衛正景（長近）ガ繩張成ルト云、其後金森法印
入國ノ時、家臣山田小十郎守之地圖地理部ニ載ス、○地圖

畑佐城

〔飛州志〕八 古 城 部 畑 佐 城

川上縫殿

在于川上郷新宮村、往古山田紀伊守、其後川上縫殿介居之、川上ハ天正十壬
午年小島合戰ノ時戰死、來由吉城郡諏訪ノ
城ノ譜中ニアリ、

淨德教寺
ニ傳ハレ
ル江馬氏
歴代

〔斐太後風土記〕十四 小 鷹 狩 吉 城 郡 淨 德 教 寺

江馬系

- 十一代 江馬平馬平時直、寛正六年七月歿、七十五、德翁寺洋月、
 - 十二代 江馬平之進時重、文明十年九月歿、四十六、光圓寺月山慶文、
 - 十三代 江馬右兵衛佐時正、天文四年八月歿、八十六、瑞岸寺雲宅行庵、
 - 十四代 江馬左京進時經、天文七年九月歿、六十一、永常寺觀山見流、
 - 十五代 江馬左馬助時盛、天正六年七月所害、七十一、洞雲寺、
- 右江馬十四代に重正と云はなし、代々長命にして時字を用來れり、蓮如

天正十年十月二十七日

八三三

天正十年十月二十七日

と同時は、時重、時正の内か、寺傳甚不審其近臣とあれば、尙信用しがたし、

八三四

〔江馬家後鑑録〕

○妻太後風土記附録所收

江馬小四郎平輝經、修理大夫平輝經末子、

高原太郎平朝方、實北條式部大夫朝直長男、輝經養爲子、

長
二男
時信、

小平太光盛、實初代輝經長男、二代朝方義弟、

小四郎平公時、三代光盛嫡子、

小彌太平朝光、四代公時嫡子、

小四郎平時光、五代朝光嫡子、

平四郎平時則、六代時光(應元丸)、

荒城郡司平德盛、七代時則長子、

藏人平輝時、七代時則二男、

旭四郎平宗時、九代輝時長子、

平馬平時直、九代輝時二男、

平之進平時重、十一世時直長子、

右兵衛佐平時正、十一世時直二男、初名九右衛門、

左京進平時經、十三世時正嫡子、

左馬助平時盛、十四世時經長子、

麻生野右衛門大夫直盛、童名小二郎、

大島左近平重、輝重、

左兵衛佐

治部大輔

豐前守

麻生野淺之進平慶盛、右衛門大夫直盛長子、

女子、
紀伊女、

修驗養慶、初名麻生野小二郎、

常陸守平輝盛、十五世時盛長、童名辨彌、左馬頭、常陸介、

右馬助信盛、時盛二男、輝盛弟、園城寺住持、善立還俗、

小三郎貞盛、時盛三男、輝盛弟、

天正十年十月二十七日

八三五

天正十年十月二十七日

八三六

小四郎

女子十六代輝盛息女、金森二代可重君妾、

輝盛 永祿二己未年、甲州武田家に屬し、七月、信州松本にて信玄に謁、同年

越中國中地山城に住、同八乙丑年六月、信玄越中出馬、江馬時盛先鋒、猿倉

城主鹽屋秋貞降、中地山城預輝盛、天正元癸酉年四月、武田信玄卒去に付、

越後上杉謙信の幕下に屬し、其の軍兵とともに、越中國士(つみ)に諸處合戰、猿

倉城をも諸共に責落しけるが、其の猿倉城は、上杉の下知にて、鹽屋筑前

守秋貞に預けらる、天正四丙子年、輝盛出仕甲州猿倉城主鹽屋秋貞、導越

後兵、落中地山城、輝盛歸國、再屬越後、天正六戊寅年三月、上杉謙信卒去に

付、同七月、越中新川郡中地山城は、母方の伯父川上伊豆守忠輔に預置て、

飛州本城へ引取、同年七月十六日、父時盛を殺、年七十一歳、同年八月十八

日夜、不意に責麻生野淺之進、慶盛自殺、年三十五歳、同年天正六寅九月、越

中國士神保安藝守□、徳山□等蜂起して、中地山の城を陥る、江馬輝

盛士卒を引率、國侍の加勢を以て防戰すと雖も、終に不叶して、川上忠輔

討死して、中地山の城没落せり、一書に、元來江馬輝盛は、越中國中地山城

輝盛ノ履
信玄ニ屬
ス

謙信ニ從
フ

父時盛ヲ
殺ス

中地山城
没落

小島時光
等三木自
綱ニ加勢
ス

勝頼ノ兵
輝盛ヲ助
ケテ八日
町ニ戰フ
トノ説

江馬信盛

を領し、家臣川上中務丞、和仁出羽守、川上忠輔等を入れ置き、自身は武田

家へ勤仕、家臣川上縫助を甲州へ節々往來致させけると、謙信に聞えけ

れば、謙信方より軍勢を出し、中地山城を攻めける故、落城に及びけり、此

の説は信じ難し、謙信卒去付、越中國士蜂起せし方、正説なるべし、其の後

江馬家と三木其の外不和に成り、天正十壬午、終に合戰に及ばむとす、小

島時光、廣瀬山城守、其の外國內の諸家、三木に加勢の由きこえければ、輝

盛は甲州武田家へ急を告げて、加勢を頼みければ、武田勝頼早速に、江馬

左馬助信盛、元園城寺善立還俗に加勢の軍兵一千餘騎を差し添へて遣

しければ、輝盛大に勇み立、川上中務丞、同縫殿助、同左衛門尉、和仁備中守、

其の外手勢を打ち揃へ、江馬信盛、甲州の加勢を率し、先鋒先鋒として、荒城郷

八日町へ發向しけるが、頃は天正十年壬午十月二十七日、三木久庵久庵、廣瀬

山城守、牛丸、小島の軍勢と、火花を散して戰ひしが、三木勢はやゝ負色に

成りければ、江馬勢氣をいらち、無二無三に突戰して、逃る三木勢を追ひ

すがふて、何國までものがさじと、長追ひしけるに、豈圖らんや、八日町の

橋の側より、牛丸、小島の伏兵起て、江馬の本陣へ討てかゝる、輝盛打ち驚

天正十年十月二十七日

八三七

天正十年十月二十七日

八三八

輝盛ノ法

き、自身薙刀おつ取りたたかひけるが、敵の打ち出す鐵砲に急所をうたれ、ひるむ處へ、牛丸又太郎飛び出で、大將輝盛と戦ひけるが、輝盛は痛手を負てたまりえず、終に牛丸にうたれけり、江馬輝盛八日町橋詰にて、天正十壬午年十月二十七日討死、年四十八歳、法諡旭光寺殿天岳良英大禪定門、墳墓在八日町村、○輝盛ノ外ハ、輝盛以下歴代世系ヲ示スニ止メ、履歷ヲ省略セリ、

江馬黨

〔飛州志〕

十國土温故名

黨類并紋傳有無、附黨類未考之分江馬黨

江馬小四郎平輝經家幕ノ紋三 同常陸介時經 同左馬頭時盛 同右衛門大夫重成 同常陸守輝盛 同小四郎 同右馬允 同右馬介 同小次郎 同治部大夫 同豐前守 同左兵衛佐 同九右衛門 麻生野式部大夫 治衛門太夫平直盛家幕ノ紋三 同麻之進慶盛 川上河内守家幕ノ紋三 同中務丞 同佐渡守 同上野守 同石見守 同左京進 同善介 同用介 同四郎兵衛 同伊豆守 同縫殿介 同式部 同文助 同彦三郎 同千丸神代カシバ家幕ノ紋 和仁孫右衛門備中守吉元家幕ノ紋巴 同備中守勝雅 同淡路守 同三河守 同出羽守 同刑部丞 同九郎兵衛 同彌兵衛 同農左衛門 山田右衛門尉家幕ノ紋巴 大島左近介 寺林甚四郎 同大藏 鎌崎次郎 一瀬清四郎 鷲見文四郎家幕ノ紋葵 脇田右衛門七家幕ノ紋巴 中山彌四郎

○廣瀨山城守、小鷹利城ニ牛丸亦太郎ヲ攻ムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔飛州軍亂記〕

附錄所收

小鷹利落城之事

カクテ、三木休庵ハ松倉山ニ新ニ城ヲ築キテ居住ス、天正八年、廣瀨山城守宗城ハ、牛丸亦太郎トハ兼テ親切ナリシカトモ、三木ト縁ヲ組シ故、牛丸ヲ亡シ、前々國司ノ一跡ヲ奪ヒトラント謀リ、家臣磯村長十郎、廣瀨助之進ヲ兩大將トシテ、二百人ノ軍兵ヲ添テ、小鷹利ニ差向ケル、是ヲ聞テ牛丸亦太郎、其身ハ城ニ有ナカラ、伯父後藤帶刀重元、牛丸左馬亮重清後備前守、牛丸治郎右衛門親次等ニ、百餘人ヲ相添テ、古川ニ於テ一戦ス、双方對々ニテ引退ク、翌年、天正九年、和睦シテ、廣瀨、牛丸シハラク無事ナリケルカ、次第ニ牛丸威衰ヘタルユヘ、又天正十年正月廿七日、廣瀨、三木兩旗ニテ、大軍ヲ催シ、小鷹利ニ發向スル、牛丸又右衛門城中無勢ニシテ、叶カタクヤ思ヒケン、其夜城中ニ篝火ヲ燒捨テ、牛丸又右衛門、渡邊主水、同筑前、牛丸次郎右衛門、同對馬、同左馬亮、後藤帶刀、山賀新兵衛、彼是五十餘人、城中ヲ出テ、越中ヘ落行

自綱松倉ニ城ク

天正十年十月二十七日

八三九

ケル、三木、廣瀬急ニ追掛シカハ、角川ト云所ニテ、後藤重元返シ合セ、散々ニ相戦ヒ、行年六十二歳、終ニ戦死ヲシタリケル、其隙ニ亦右衛門ヲハシメ、其外ノ輩三十四人、越中水無瀬通リヲシテ落行ケルカ、越中富山ノ城主佐々陸奥守ニ責出サレ、夫ヨリ越前へ落ノヒ、越前青瀧山ノ城主金森五郎八長近ヲ頼ム、伯父牛丸左馬亮ハ、佐々成正ニ降參シ、牛丸備前守重清ト改ム、後ハ常州ニ行、佐竹家ニ仕フト云、

(前考) 按ズルニ、此牛丸一黨ノ中、牛丸備前守重清、常州ニ行、佐竹家ニ仕フト云ハ誤ナリ、佐竹家ニ向氏アリ、其家説ニ云ク、飛驒國主姉小路家族小鷹利飛驒守藤原光政、天正年中、飛驒ヲ去テ常州ニ來リ、佐竹義宣ニ仕、子孫向飛驒守ト云是也、

二十八日、(癸)羽柴秀吉、惟住長秀、池田恆興等ト京都本因寺ニ會ス、

〔兼見卿記〕四 十月廿五日、庚戌、自惟住五郎左衛門、江口三郎左衛門來、明

日上洛也、在所へ可來之由案内也、○下略、長岡藤孝、坂本へ下向スルコトニカ、ル、本月二十五日ノ條ニ收ム、

廿六日、辛亥、五郎左衛門上洛延引、○下略、兼和、藤孝ヲ訪フコトニカ、ル、本月二十五日ノ條ニ收ム、

廿七日、壬子、五郎左上洛延引、磯谷新介來、明日可上洛之由等也、

長秀上洛

坂本へ下

天下ヲ靜メルコトニ決定

吉田ニ會ストノ説

廿八日、癸丑、五郎左上洛、直出京、羽筑對談云々、晚ニ可來之由、於路次被申也、

(友カ) 夕閑夕庵來、五郎左臺所人、茶湯防主兩人下々各來、今夜在京也、

廿九日、甲寅、午刻五郎左直ニ坂本へ下向、路次へ罷出對面了、

〔蓮成院記錄〕一 晦日、京都慶圓注進モ、廿八日六條之寺ニテ、羽芝筑前守、丹

場五郎左衛門、池田紀伊守兩三人被相談、天下可被相靜旨決定之由申來

間、珍重旨返條了、○慶圓、興福寺ノ使僧トシテ上洛スルコト、本月十五日ノ條ニ見ユ、

〔天正日記〕○山 一十月廿七日、羽筑山崎ノ城より上洛、廿九日、於吉田、惟

五左、堀久太、金森五郎八、其外歴々參會、世上無事之談合云々、

○秀吉、長秀等京都ニ會スルコト、九月十八日ノ條ニ、マク長岡藤孝、長

秀ヲ坂本ニ訪フコト、本月二十五日ノ條ニ見ユ、

德川家康ノ部將駿河江尻城主本多重次、日蓮ノ筆蹟ヲ西山本門寺ニ寄進ス、

〔西山本門寺文書〕○河 駿

今度就于大亂、日蓮之御筆拙者改出申處、黄金五百兩之爲御禮被下候ハ、ん
も之御兼約候つる處、末代之爲め候間、五百兩之金を取不申、彼日蓮之御

天正十年十月二十八日

八四一

本門寺重
次ニ黄金
五百兩ノ
禮ヲ約東
重次禮金

ヲ取ラズ

置狀

天正十年十月二十八日

八四二

筆、新きまんとして、永進置候、是を以、いよ／＼(筋)ごん經をも無御無沙汰様こ被仰付候て可然候、彼御筆共こ若横合之者御座候共、拙者進置申上り、違亂少々御座有ましく候、右旨駿甲之御旦方仰ふせられ候へく候、仍置狀如件、

天正十年午

拾月廿八日

本多作左衛門(重次)花押

本門寺

日春上人様

日蓮ノ自筆

日蓮御自筆(徳カ)物數合六拾六、此内御筆之本尊八通請取申候、六十六こと御貴所之判被成候、又六十六之外日蓮筆金泥法華經貳部、并御珠數一連請取申候、右爲御禮金五百兩可進置と申合處、一圓被下置候、事生々世々誠過分共無申計候、此旨且方衆何せへも可爲申聞候、御貴所以御覺悟を、おし山ノ新地こ御取立被成候も存知、末代迄壹代之内右御おんせう忘申聞敷候、

〔附録〕

〔西山本門寺文書〕

河○駿

條々

一 重須之僧且、任八通之御遺狀、日代上人依爲御法燈、至于末代迄、可奉代上(日代上人)

於尊敬之事、

一 雖經年月、今度日代上人重須(カ)御還住被成之事、

一 列知識血脈付法之代之事者、被任高開兩師之御筆跡、可爲日春上人御存(西山他)

分次第之事、

右三ヶ條之旨、於有違背之僧俗之者、蒙日蓮大聖人、日興上人之御罰、其上

申貫首、永可有門徒於追放候、仍爲後日、以一札申上候、

天正拾壬霜月十五日

寶積坊日教

石川三郎左衛門(同護那)

〔重須之僧且へ遣一札之案文〕

澁谷伊賀

井出土佐

日春上人參

○本書ハ、重須ト西山ト和融ノ際、重須ヨリ西

足利義氏、小池肥前守ノ戦功ヲ賞ス、

〔下總舊事〕

三水葛飾郡古文書
水海村小池藤八所藏

屬一色右衛門佐、出北口備前敵討捕走廻之條、神妙之至思食候、依之受領被

天正十年十月二十八日

八四三

日興ノ遺狀ハ、重須ノ法燈ニシテ、代ナレバ、日蓮ノ御筆跡、可爲日春上人御存、

一色右衛門佐

天正十年十月二十八日

下之者也、仍如件、

天正十年十月廿八日

小池肥前守殿

(花押)

八四四

毛利輝元、石見益田邑主益田藤兼ヲシテ、其父元祥ノ所領ヲ襲ガシム、

〔萩藩閥閥録〕七ノ一 益田越中

吉川駿河守

益田右衛門佐殿(藤兼) 參御返報

元春

益田藤兼
家督相續
シテ祝儀
ノ物ヲ
吉川元春
ニ贈ル

態御札令拜見候、抑爲御家督御祝儀、御同名以治部大輔殿蒙仰候、殊御太刀一振、金覆輪、御腰物一腰、行次、馬壹疋、黒毛被懸御意候、寔御丁寧之儀畏入候、長久不相易可申述候、何様從是可申入候間、不能審候、恐々謹言、

十月廿三日

元春 御判

益田右衛門佐殿參御返報

藤兼所々當御知行分等之事、被任御手續、永可有御領知事簡要候、全不可有相違候、仍一行如件、

天正拾年拾月廿八日

(輝元) 右馬頭御判

益田右衛門佐殿

右馬頭

元祥 御返報

輝元

爲御家督御祝儀、御太刀一振、刀一腰、通平甲鎧被懸御意候、御丁寧之至尤目出候、彌長久可申談候、委細御同名治部大輔殿任御演說候、猶從是可申入候、恐々謹言、

十月廿八日

輝元 御判

元祥 御返報

小早川左衛門佐

益田右衛門佐殿御返報

隆景

爲御家督御祝儀蒙仰候、尤珍重候、殊御太刀一腰、金覆輪御腰物一腰、祐光馬一疋、青毛被懸御意候、御丁寧之至畏入候、從是社頓可得御意之處、遙々御懇

天正十年十月二十八日

八四五

藤兼祝儀
ヲトシテ
小早川物
贈降景ニ
モ

益田元祥
藤兼相續
シテ祝儀
ノ物ヲ
輝元ニ贈ル

天正十年十月二十九日

八四六

之儀難申盡候、御慶重疊可申述候、猶御同名治部大輔殿可爲御演說候、恐々謹言、

十一月一日

隆景 御判

益田右衛門佐殿 御返報

大友義統、野上紀右衛門ノ軍功ヲ褒ス、

〔立花家舊臣文書〕後 筑

野上紀右衛門下毛郡萬田ニ攻メ寄ス

今度豊前發向之刻、野上治部少輔同心在陣辛勞、殊々下毛郡萬田切奇推(奇カ)へ、砌以刀打別而軍忠之段感入候、必追而一稜可賀之候、恐々謹言、

天正十年十月廿八日

義統 書判

野上紀右衛門殿

○義統、佐田鎮綱ニ命ジテ、豊前神樂城ヲ攻メシムルコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十九日、寅德川家康、北條氏直ト和ヲ講ジ、上野沼田ヲ以テ、氏直ノ信濃佐久及ビ甲斐都留ノ二郡ニ換へ、又家康ノ女ヲ以テ、氏直ニ嫁センコトヲ約ス、是日、質ヲ交フ、

〔譜牒餘錄〕四十五 内藤紀伊守

急度申入候、仍上方忿劇付而、當表無事可然之由、信長從御子達、度々御異見之間、殊我等事、日比信長御厚恩不淺之間、先以任其儀令和與候、彌相示自是依田肥前守(信守)を以、巨細可申入候、恐々謹言、

十月廿七日

家康 御書判

依田右衛門佐殿

覺

一拙者家來依田舍人と申者、權現様之御書一通持傳候付而差上申候、御書致頂戴候レけ、如左ニ而御座候、

一依田右衛門佐信蕃先祖代々、信州佐久郡依田庄ニ居住仕付而、則以依田爲稱號、屬武田信玄、勝頼、依軍功功、信州二郡領之、然處天正十年、武田家滅亡付而、家康公ニ御味方罷成、御忠節仕、翌十一年、於信州岩尾城打死仕候、右之御書者、天正十年、家康公と北條氏直於甲州御對陣之節、被下置候と申傳候、○信蕃戰死ノコト、十一年二月二十二日ノ條ニ見ユ、

天正十年十月二十九日

八四七

上方忿劇ニツキ信雄等ヨリ信和ヲ勸メ來ル
家康構和ヲ依田信蕃ニ報ズ

信蕃戰死ス

信蕃ノ子
昌蕃内藤
信成ニ仕

水谷勝俊
ニモ報ズ

和與
氏直ト和
スルニツ
キ結城晴
朝ニ諫言
スベシ

天正十年十月二十九日

八四八

一信蕃子依田藤左衛門昌蕃、天正三^亥年、信州佐久郡ニ而出生、信蕃討死之節、昌蕃九歳、其後慶長六^丑年、私先祖内藤三左衛門信成、駿州府中在城之時分召置、其子孫于今家來ニ而罷在、唯今舍人ハ藤左衛門孫ニ而御座候、

以上

子^(貞享元年)三月廿二日

内藤紀伊守

〔古文書〕

水谷
〇記録御用所本

水谷伊勢守勝俊拜領、同左門勝周書上、

東照宮御書

急度令啓候、抑今度各申合候處、上方申事在之付而、三介殿^(信雄)自御兄弟當表對陣之儀、令無事諸事御異見等之儀、我等被頼入候旨、度々御理之條、任其儀、氏直と和與之事ニ、其方如存知、我等年來信長預り御恩儀不淺候間、無異儀候、落著ニモ付而、信長如御在世之時之節、惣無事尤候由、氏直ハ申理候間、晴朝^(結城)へ御諫言第一候、委細幡龍齋^(水谷正村)可爲口上候、恐々謹言、

十月廿八日

御名御判

水谷伊勢守殿

氏政ノ誓 紙ヲ家康 ニ與フル コト 家康ノ飛 脚ヲ佐竹 結城ヘ無 事通スベ キコト 皆川水谷 兩人歸國 ノコト 城昌茂妻 子ノコト 蘆田ヘ飛 脚ノコト 氏直ノ飛 脚ヲ原無 事通スベ キコト 小田原ニ 通スベキ 大久保 世ヲ小田 原ニ赴カ 下シムル

〔木俣文書〕

江○近

甲州若^(上包)御^(御)子^(御)之^(御)原^(御)ニ^(御)而^(御)北^(御)條^(御)氏^(御)政^(御)ト^(御)神^(御)君^(御)御^(御)和^(御)睦^(御) 相調直政公執筆之五ヶ條氏政點頭御書壹通、
一 御るんきよ様御せいく之事、○年十二月二日直ニ讓ルコト、十

家康へ可給候事、

一 さふけ^(佐竹義昭)ゆふきゑ^(結城晴朝)ひきやく御通可被成之事、

一 みあか^(皆川廣照)か^(水谷正村)方^(水谷正村)水之る^(水谷正村)兩人御通候て可給候事、

一 玄^(城昌茂)よ^(城昌茂)のおりるさい^(城昌茂)玄御渡可給候事、

一 あ^(依田信等)した^(依田信等)ら^(依田信等)ふ^(依田信等)へのひきやく之事、

以上、

十月廿八日○以上ハ、徳川氏ヨリ提出ノ條件ナルベシテ、

一 小田原へ御ひきやく之事、

一 七郎右之儀、あ^(天久保忠世)を^(天久保忠世)小田原までさしこされ候い、濃州^(北條氏親)一代御おんこ可

被請候由被仰候事、○本書ハ、井伊直政ノ自筆ニシテ、其骨子ハ、是ヨリハ、講

既ニ決定シ、
タルガ如シ、

天正十年十月二十九日

〔家忠日記〕 二 十月廿九日丙寅 氏直無事相濟候てのき候、様子（郡留）の鶴の郡を

此方へ（家次）とさし候、玄ち物（直次）は酒井小五郎、敵より（直次）の大道寺、山角越候、

晦日（丁卯）、人玄ちるへ（直次）に働候、

〔當代記〕 二 十一月、家康、氏直無事、家康女可嫁、氏直之由有諾應、翌年小田

原へ興入ル、

〔乙骨太郎左衛門覺書〕 一 霜月廿日（忠次）に、鎌倉光明寺之上人（家康）御所様之御陣場

に御越被成、酒井左衛門尉殿（忠次）以被仰上候と、此度之御陣永々之儀、御座

候、左候へ（忠次）と、氏直（忠次）い（忠次）ま（忠次）妻女無御座候、幸徳川様（忠次）の御むすめ子御座候

由承候間、同（忠次）と、氏直を御縁者（忠次）に被成、先々互（忠次）にせう（忠次）まんを御とり（忠次）と、し

候て、御陣御引被成候へ（忠次）と被仰上候、其時光明寺（忠次）に御對面被成、直段（忠次）に而、

右之事共二三日御談合被遊、其上御合點被成候て、氏直（忠次）よりのせう人（忠次）よ

り、松田尾張殿（忠次）子息、又御所様より（忠次）の榊原小平太殿被遣候而、同廿五日（忠次）に

互（忠次）に御陣御引被成候、

〔三河物語〕 三 其儀なら（郡留）ばぶぢ（郡留）を（郡留）は（郡留）くり（郡留）て、合互（郡留）に引（郡留）の（郡留）け（郡留）を（郡留）し（郡留）とて、ぶぢ

を（郡留）ぞ（郡留）は（郡留）くり（郡留）給（郡留）ふ（郡留）、然る間、ぐん（郡留）かい（郡留）と作（郡留）之（郡留）郡（郡留）を渡（郡留）玄（郡留）可申間、然（郡留）とぬ（郡留）ま（郡留）を此

光明寺ノ
奉聖傳ノ
家康ニ謀
ルシ和ヲ

十一月
和説

氏直兵ヲ
撤ス家次
大導寺直
政ニ實ヲ
返ス

都留佐久
二郡ト沼
田トヲ換

松田憲秀
ノ子息及
政質トナ
ルトノ説

氏直佐久
郡ニ出テ
上野ヨリ
歸ル

家康大久
保忠世ヲ
佐久郡ニ
遣ス

水野勝成

北條氏規
三坂城ヲ
渡ス

鳥居元忠

方へ御歸しあつて、御ぶぢ（郡留）に被成候へ（郡留）と仰（郡留）なれば、其儀（郡留）もお（郡留）いて（郡留）り、尤可然
と被仰候ら（郡留）いて、頓（郡留）而御ぶぢ（郡留）に成（郡留）而、ま（郡留）づ（郡留）ぐ（郡留）ん（郡留）かい（郡留）を渡（郡留）し給（郡留）ひ（郡留）而、其故（郡留）氏（郡留）お
を（郡留）り、の（郡留）壺山（郡留）よ（郡留）か（郡留）、ら（郡留）せ給（郡留）ひ（郡留）而、作（郡留）之（郡留）郡（郡留）へ出（郡留）させ給（郡留）ひ（郡留）、う（郡留）まい（郡留）が（郡留）と（郡留）う（郡留）げ（郡留）を越
而、上野へ出（郡留）させ給（郡留）ひ（郡留）而、引（郡留）入（郡留）給（郡留）ふ（郡留）、家康も、う（郡留）い（郡留）の（郡留）國（郡留）を（郡留）お（郡留）さ（郡留）め（郡留）させ給（郡留）ひ（郡留）而、其
寄大久保七郎（忠世）右衛門尉を仰被付而、作（郡留）之（郡留）郡（郡留）へ召（郡留）は（郡留）くり（郡留）とされ（郡留）而、御馬（郡留）の入（郡留）、
下略、鳥居元忠等、北條氏忠（郡留）ヲ破（郡留）ル（郡留）コト（郡留）、及（郡留）ビ（郡留）大久保忠（郡留）世（郡留）信（郡留）濃（郡留）諸城（郡留）ヲ
鎮撫スルコト（郡留）ニカ（郡留）、ル（郡留）、八月十二日（郡留）、及（郡留）ビ（郡留）十二月十二日（郡留）ノ條（郡留）ニ收（郡留）ム（郡留）、朝野舊
聞、哀（郡留）藁（郡留）二百八（郡留）所收關
野濟安聞書（郡留）殆（郡留）同（郡留）シ、

〔水野勝成自記〕 成（郡留）上略、黒駒役（郡留）ノコト（郡留）ニカ（郡留）、ル（郡留）、水野勝（郡留） 其首新府へ爲持上

候へ（郡留）り、敵陣近（郡留）た處（郡留）に柵（郡留）を結御見（郡留）を被成候、其首共（郡留）を敵見申、懸（郡留）てあ（郡留）り（郡留）と（郡留）ひ

に罷成候、北條家より大道寺（郡留）む（郡留）ま（郡留）こ（郡留）孫九郎（郡留）と申者（郡留）を人質（郡留）に權現様へ越申

候、其後氏直（郡留）と御縁邊之儀候て相濟申候、孫九郎事（郡留）ハ彦右衛門（郡留）、榊原小平太（郡留）、

拙者（郡留）三人送（郡留）り、三坂（郡留）の城（郡留）も北條美濃守被居相渡申候、（郡留）下略、寛政重修諸家

譜（郡留）、水野勝成譜（郡留）ニハ、大

〔寛政重修諸家譜〕 五百 鳥居元忠（郡留） 十月二十九日、北條氏直數日（郡留）乃

合戦（郡留）、玄（郡留）の（郡留）利（郡留）を失（郡留）ひ、和議（郡留）を（郡留）お（郡留）ふ（郡留）により、お（郡留）ま（郡留）を（郡留）ゆ（郡留）ゑ（郡留）は（郡留）を、人質（郡留）として、

大道寺孫九郎直政、山角某兩人をたてまつる。晦日、姫君をもつて、氏直ふ嫁せらるへき。乃御契約あり、人質乃事に及いよとて、これを返さふ。おのとな水野勝成、榊原康政ともふ仰をうきたる。乃り、大道寺、山角乃二人を見坂乃城ふ送り還せ。○下略、元忠、都留郡ノ地ヲ領スルコトニ

〔木俣土佐紀年自記〕

不日として、御馬を甲州に入らる。北條氏直と對陣、

武田所領の亡地を争、已として御刷り、氏直先切取所の地、氏直の領分と

す、其外駿甲を以、家康公御領分とす、互に御馬を納らる。○中略、家康、故武田

と、甲州新府にたゐりて御對陣、其後御刷、此御刷使直政は仰付らる。此副士守

勝は命をうく、直政自筆を以て、五ヶ條の覺書守勝に申渡さる。守勝即氏直

の陣に到りて問答し、○寛政重修諸家譜、井伊直政譜、陳して是を説く、氏

直點頭刷を受く、互に證文を取り、御馬を入らる。是を以、家康公御領國に相

定、北條家と御縁組相調、御輿に入有り、右五ヶ條覺書守勝家所持之。○上

家康、堺ヨリ三河ニ歸ルコト、及ビ守勝ヲシテ、直政ヲ輔ケシムルコト等ニ

カ、ル、ナホ寛政重修諸家譜、井伊直政譜ニハ、氏直、甲斐、都留、信濃、佐久、兩郡

諸ヲ家康ニ與ヘ、自ラ上野ヲ領センコトヲ求メ、家康之ヲ

家康、井伊直政、命、直政、自筆、以、テ、五、ヶ、條、の、覺、書、守、勝、に、申、渡、さ、る、守、勝、即、氏、直、の、陣、に、到、り、て、問、答、し、互、に、證、文、を、取、り、御、馬、を、入、ら、る、是、を、以、て、家、康、公、御、領、國、に、相、定、北、條、家、と、御、縁、組、相、調、御、輿、に、入、有、り、右、五、ヶ、條、覺、書、守、勝、家、所、持、之、

〔寛政重修諸家譜〕

二十 松平清宗玄蕃

天正十年

しかば、御使をうけたまはりて、小田原城に赴きしに、氏直、葡萄の蒔繪したる鼓の筒を與ふ、

〔小田原日記〕

天正十八年、小田原落城の由來、先年天正十年、信長御生害

時、甲斐、信濃、明國となる。家康公、甲州へ入國有て、信長臣河尻秀勝肥前守討取、甲

斐國を治んとせ給ひし時、甲斐住人大村右衛門、同伊賀と云もの、小田原を

註進いよしけるより、小田原衆甲、出張、郡内を討取、若御子迄御馬被

出家、家康公を新府城籠て對陳有て、所々に足袋留、百ヶ日、及所、北條美

濃守氏規、先年今川氏眞の時分、家康公と入魂、有しゆへ、家康公をあつひ

を入給ひて、小田原と無憂、被成可然也とて、あつひの筋目を、今度武田

持分之國中、甲斐、信濃、家康に渡し、上野の北條渡し、其上よく、家康の女、

氏直へ迎取、縁者にあり、自今已後、猶以入魂よとの、憂にて無憂相調、北條殿

御馬入給ふ、依之、北條家へ討取所の甲州、信州郡内の家康へ被遣、扱三河よ

り御入與有之よつて、代々武者大將山角龍記伊守定勝、始より和睦の御使た

るよよつて、見坂城のこり、御入與の御仲人より、首尾好御祝儀相濟ぬ、○

天正十年十月二十九日

氏規和ヲ

山角定勝

天正十年十月二十九日

八五四

略、家康、真田昌幸ニ諭シテ、沼田ヲ氏直ニ致サシム、昌幸聽カズ、羽柴秀吉ニ通ジテ、援ヲ請フコトニカ、ル、十三年七月十七日ノ條ニ收ム、

〔寛政重修諸家譜〕

八百九 大道寺政重駿河守 北條氏康ふつかへ、武藏國

岩槻城を攻るのとな、政重先手となりて、軍功あはより、同國松郷今成乃地をあふへらる、其れち氏政、氏直ふ歴仕し、氏政より諱乃字をあふへらる、之とく、戦功をこけまはるゆへに、上野國松枝をよび信濃國小諸は城主となりて、信濃國佐久郡を領す、天正十年は冬、東照宮氏直を御和睦あり、佐久郡及び甲斐國都留郡の所領を獻するにをよひて、政重佐久郡を避て、松枝城ふうりる、

〔譜牒餘録後編〕

二十四 大御番 安部攝津守組 山角權兵衛

右權兵衛高祖父山角紀伊守儀、北條家氏政、氏直迄奉公仕候、權現様甲州の御討入之節、北條家も信州（をカ）に討隨、甲州に責入候比、權現様新府に御籠城北條家と御對陣、其後北條家小田原に引取、紀伊守見坂と申所、數日御籠城を守罷在候、其内北條家と權現様御和睦之儀申成、其上姫君様被成御座候付、氏直に御入室之儀御使仕、御首尾相調、濱松に御歸陣被遊候、（略）下

〔寛政重修諸家譜〕

九百九 山角定勝 紀伊、北條氏政、及び氏直に侍るへ、

大尊寺政繁佐久郡ヲ領ス

山角定勝三坂ニ在城ス

山角定勝

依田信季氏直ニ賴和シガメ人上野ニ半

天正十年、東照宮、北條家を御和睦ののち、督姫君、氏直に嫁しきぬふのとな、定勝御媒となふ、

〔南行雜錄〕

御懇墨拜見快然此事候、如仰近年、不申通候、去亂入之刻者、貴山之御事、御苦勞之體之由、令察存候、我等事者、信長御滅後、北條家相憑候處、家康（止）和與之節、信州家康へ被相渡候故、不慮、當年上野（江）令牢人惣社、申地、住居仕候、御使僧是迄御尋候、御眞實之至忝存候、如何様歸國之上、御禮可申入候、猶御使僧江申述候條不能具候、恐々敬白、

依田源五

信季

高野山

蓮花定院 御報

○家康ノ將酒井忠次、信濃高島ヨリ甲斐新府ニ退キテ、氏直ノ軍ト對峙スルコト、八月一日ノ條ニ、家康、甲府ヨリ新府ニ陣ヲ移スコト、同日ノ條ニ、家康ノ將鳥居元忠等、北條氏忠ト黒駒ニ戰フコト、同十二日

天正十年十月二十九日

八五五

天正十年十月二十九日

八五六

ノ條ニ、家康ノ將大須賀康高等、氏直ノ豆生田ノ砦ヲ攻ムルコト、同二十九日ノ條ニ、眞田昌幸、家康ニ屬シ、依田信蕃ト共ニ、北條氏ノ兵ト戦ヒ、其糧道ヲ斷ツコト、九月二十八日ノ條ニ、家康ノ女、氏直ニ嫁スルコト、十一月八月十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔創業記考異〕 十一月、家康公氏直無事、

家康公御女可嫁氏直之由有應諾、

一説、十月廿九日御和談、上野國沼田ノ地ヲ、北條ガ甲州都留郡、信州佐久郡ニ被替、氏直引去時、吾兵ノ跡ヲ慕ハン事ヲ恐レ、人質ヲ取カハサント請フニ依テ、公ヨリ酒井小五郎ヲ被遣、氏直ヨリ大道寺孫九郎ハ、武徳大成記ニ大道寺ヲ指越、信州ヘハ大久保七郎右衛門ヲ被遣、甲州ニハ鳥居彦右衛門直政ニヲ指越、信州ヘハ大久保七郎右衛門ヲ被遣、甲州ニハ鳥居彦右衛門、平岩主計ヲ被殘置、十二月、公濱松ヘ御歸、一説、大久保ハ明年三月ニ被遣、依田右衛門討死、其子幼少ユヘ、大久保ト被ト也、

〔家忠日記増補〕 八

十月廿九日、北條氏直數日大神君ト對陣、兵ヲ締ヒ、謀ヲ廻スト云ヘドモ、其利ナク、武徳編年集成ニハ、殊ニ糧ヲ斷タレ、衛ヲ失ヒトアリ、勇力漸ク衰フ、

氏直北條
和ヲ請

三十日娶
嫁ノ約ス

氏直砦ヲ
平澤ニ築
朝比奈泰
重北條氏
規ノ陣ヲ

是ニ依テ、北條美濃守ヲ以テ、大神君ニ和ヲ請テ云ク、上野沼田ノ地ヲ以テ、甲州都留郡及ビ信州佐久郡ノ地ニ易エ、甲信兩國ハ、大神君全ク領内アルベシ、上野ハ一圓ニ氏直是ヲ領スベシ、大神君是ヲ許シ給フニ依テ、和睦成ル、于時氏直、大道寺孫九郎直政、及山角ノ某大三川志、山角上野介、定方ニ作ル、兩人ヲ質トシ、大神君ニ獻ズ、大神君、酒井小五郎家次ヲシテ、北條ガ方ニ遣ハシメ給フ、晦日、大神君ノ姫君ヲ以テ、北條氏直ニ嫁シ給フベキノ旨御契約アリ、是ニ依テ、互ニ質ヲ取り置クニ及バズ、大神君、鳥居元忠、榊原康政、水野勝成ヲシテ、北條ガ質、大道寺、山角ヲ三坂ノ城ニ送り返サシメ給フ、北條美濃守氏規ニ是ヲ渡シ、鳥居、榊原、水野等三坂ヨリ歸ル、下略、依田信蕃、岩村田城ヲ攻ムルコトニカ、ル、

〔御年譜徵考〕 六

廿九日、北條家所々に富利ヲ失ふ故、依富氏直、叔父北條

美濃守氏矩下同シヲ以テ、和議をもふさる、上州沼田、此方ヘ申請、上州一圓ハ北條條より支配仕るヘク、甲州都留郡、信州佐久郡、汝進上仕るゑしと也、公則御許容はし、神下同シ々々、依之、即日氏直若見子表、汝陣拂ひ有テ、既ヨ引取らむとモ、然とも猶心元神下同シ危クや思ひ、甲州平澤の朝日山ハ、俄ハ砦ヲ築カシクモ、公を朝比奈彌太郎泰勝重ヲ御使とし、遣させ、朝比奈、北條衆の中ヘ馬

天正十年十月二十九日

八五七

家康ト氏規トハ幼年ノ朋友

榊原康政等氏直トトス

天正十年十月二十九日

八五八

を乗入、北條美濃守氏矩の備を聞定めて、御狀を渡し申出たる、其趣ハ、武田勝頼盛代、東上野内北條領、討取城數、善城、厩橋、山中、○治世元記、大胡沼田、六、(胡沼)七、(八、(善)九、(胡沼)十、(大胡沼)十一、(胡沼)、新條、岩櫃等あり、西上野も不及申、所々支配致を、治世元記、北條美濃守言葉、汝以言相渡し、る子細も、先年駿河今川義元代盛のとき、美濃守、我等も駿河人質、居り、互に幼年、乃朋友なる事、汝思ふ故也、然る處、此方汝押へ、爲お、若汝築るる、表裏有事、疑ひかし、是非一戰仕るる、し、御使い、急ぎ歸り來らさ、お、榊原小平多、大須賀五郎左衛門、本田豊後守、若見子の上へ、押上、ケ、左手、こ、酒井左衛門尉、松平主殿助、石川伯耆守、酒井與四郎、本多平八郎等、を、佐久、小縣へ、差向、物見、汝うけ、長澤の宿、汝取、合戰、汝も、つ、公、新府、お備、させ、お、北條方、ハ、八ヶ嶽の森の中へ、大軍、お、入立、る、哀、お、れ、合戰、も、へ、支、使、も、お、く、上、汝、下、へ、と、さ、お、た、立、北條美濃守、ハ、大道寺駿河守、う、子、孫九郎直政、汝人質とし、御本陣、お、參上、致し、全く、以、言、異、心、お、た、旨、陣、し、お、れ、榊原康政、是、汝、取、次、を、彌和、睦相、調ひ、酒井左衛門尉、息、小五郎家次、汝遣さる、依之、以後、とも、北條家へ、御使、ハ、榊原小平多、納使、ハ、朝比奈彌太郎、勤之、○治世元記、人質、ハ、則、鳥居、彦右衛門、御領、甲州、郡、内、富士、下、勝、山、村、小、佐、野

所置トアリ

晦日、北條家懇望、お、依、公の姫君、汝、氏直、被進之、御婚禮、可有之旨、御約速有之、依之、雙方の人質、とも、互、御返し、被成、北條家、笛吹、汝、越、上州、へ、歸陣也、○治世元記、大抵、同、シ、

〔岩淵夜話別集〕

○上略、家康、勝頼、ノ菩提、ノ爲、メ、ニ、寺、院、ヲ、建、立、其、後、北、條、家、ヨリ、人、數、ヲ、指、ム、ケ、甲、州、ヲ、切、シ、タ、カ、ヘ、ン、ト、是、有、ル、ニ、付、甲、州、一、國、ノ、人、民、ノ、願、ヒ、奉、ル、ニ、依、テ、七、月、十、九、日、始、テ、御、馬、ヲ、出、サ、ル、其、砌、甲、州、衆、ト、北、條、家、ト、出、合、一、ニ、黑、駒、二、ニ、惠、林、寺、前、三、ニ、天、目、山、四、ニ、岩、崎、五、ニ、小、倉、ノ、江、草、其、外、所、々、ノ、セ、リ、合、ニ、每、度、甲、州、衆、勝、利、ヲ、得、テ、討、取、處、ノ、首、正、ヲ、御、旗、本、へ、持、セ、上、ル、扱、霜、月、ニ、至、リ、甲、州、若、神、子、ニ、於、テ、北、條、氏、政、ト、御、對、陣、有、之、處、ニ、家、康、公、ヨリ、北、條、美、濃、守、氏、親、方、へ、御、書、被、遣、御、使、者、ハ、朝、比、奈、彌、太、郎、御、書、箱、ヲ、首、ニ、カ、ケ、只、一、騎、馳、來、リ、何、ノ、様、子、モ、ナ、ク、北、條、家、ノ、先、手、大、道、寺、駿、河、守、政、繁、備、へ、乘、掛、大、音、ニ、テ、是、ハ、家、康、ヨリ、使、ノ、者、ニ、テ、候、北、條、美、濃、守、殿、ノ、備、へ、ハ、何、レ、ニ、テ、候、哉、ト、申、ニ、付、駿、河、手、ヨリ、案、内、者、付、ル、彌、太、郎、美、濃、守、備、へ、出、テ、直、段、ノ、上、御、書、ヲ、相、渡、ス、美、濃、守、氏、政、ノ、本、陣、へ、持、參、致、シ、御、封、ノ、儘、差、出、ス、處、ニ、氏、政、披、見、有、則、

朝比奈泰重氏規ノ許ニ使ス

天正十年十月二十九日

八五九

天正十年十月二十九日

八六〇

氏規家康
ニ會ス
家康幼時
ノ物語ヲ
ナス

人質ヲ
預ク
原康政ニ

氏直
小諸ヲ
メ取ル

家康
ヲ提議ス

北條一門家老ノ面々ヲ召集メ、内談一決シテ、美濃守方ヨリ御請申上、其以後大道寺駿河守嫡子孫九郎ヲ、美濃守召連、新府中ノ御陣場へ參上、榊原式部少奏者ニテ、美濃守御前へ被爲呼、以前駿河ニテ、朝暮御出合ノ御物語ナト被遊、其上ニテ諸事御賢慮ノ趣キ、美濃守ニ被仰聞、美濃守ハ歸リ、孫九郎ハ暫式部少方ニ逗留仕内ニ、重テ美濃守參リテ、彌和睦ノ義相濟、孫九郎モ御目見ノ上、御暇下サレ、美濃守ト同道ニテ罷歸ル、尤西郡腹ノ御姫君ヲ以、北條氏直へ御縁組ノ御約束ニテ、御和睦有之トハ申セ、氏政ノ家老ノ世悴ヲ、美濃守致同道、事調候迄、孫九郎ヲ甲府ニ留置レ候ハ、北條家モ悉ク御旗下同前ノ様子也、此御對陣ヨリ甲州一圓ニ御手ニ入ル、北條家ハ笛吹峠ヲ越テ、信州へ働キ、蘆田、小室ノ兩城ヲ責取、上田ノ眞田迄モ、一端北條家ノ旗下ニナルトナリ、

〔落穂集〕

三

或時、家康公ハ朝比奈彌太郎を御使メテ、北條美濃守氏規方へ、御書を以被仰越候ハ、當國乃儀ハ、駿河へ取續キ、手寄の儀ハ在之間、手前より乃支配メ可致候、西上野武田の舊領を相添、上野一國ハ一圓メ、北條家より支配あはせ尤候、此旨氏直得心あられ候ニ於テハ、向後和睦を相

氏政ハ來
春隱居ス

氏直諾ス

遠山新四郎
氏政モ諾
ス
信州先方
衆小屋ヲ
普請ス
家康怒ル
朝比奈泰
重、大導寺
ニ至ル

遂、來春メ至リ、親父氏政より隱居あらせ、氏直家督致され候ハ、手前乃娘を以、氏直へ嫁せしめ、幸ひ隣國乃儀ハ有之上、万端メ付、無他事可被仰合旨、委細乃御書面を披見致、氏直を始め、北條一家乃面々、家老共迄も、一段可然との相談メ極メ、被仰越趣、氏直ハ其意を得ラ、候間、早速小田原へ申遣、氏政より返答次第メ、美濃守新府乃御陣所へ罷越可申上、此旨、氏規方ハ御返答申上、氏直近習乃侍遠山新四郎を以、小田原へ申遣候處、氏政ハ同心致され候得共、決斷乃評義相濟不申、使者新四郎、小田原メ逗留仕る内メ、漸く寒氣メ趣候メ付、山手メ陣取、信先方ハ侍共、小屋普請を初メ、冬支度を仕り候旨、家康公乃御聽ニ達シ、以の外メ御腹立被遊、或日早天メ、北條家一の先手大道寺駿河陣所へ、朝比奈彌太郎馬を乗掛來、先日メ掛御目ニ候彌太郎ニテ候、家康より使メ參り、申上付、駿河陣屋へ呼入候得ハ、彌太郎、駿河メ向ハ、家康被申候ハ、先頃和平ハ儀申談、小田原ヨリ一左右次第メ、美濃守參陣可被致との返答メ付、數日相待被居候得共、其儀無之、此間ニ至リテハ、諸陣ともメ小屋普請乃躰メ相見へ候、然ハ和談可有との返答ハ實義メあらせ、定テ時節を延ん、爲乃謀計、時分

天正十年十月二十九日

八六一

柄雪降候て、互に人馬の掛引を成間敷間、今日中の一戦を遂らるるをたとの儀を以、手切レの使に罷越候と在之に付、駿河守驚き入て申々るに、家康公乃御腹立被成候に、御尤至極の御事候、然を共氏直心底に於て、寂前美濃守方御返答申上候趣と、唯今以聊相違無御座候、いほ終乃道よを、美濃守へ御直談あらせ尤候と申候へに、彌太郎聞き、其儀を家康我らへ被申付候、誰こよらば、先陣乃衆中へ申達し、早々可被歸旨被申付候故、當陣へ罷越、貴殿へ直談申うへに、美濃守殿へ對談申こ不及と有て、座を立候を、漸々申留めて、駿河儀に、氏直の本陣へとせ行、右乃次第を申達しけむに、氏直を初メ何をも大きにおとほた、然るに於て、美濃守殿の、新府の御陣へ參らせ、何分よも無事を相調らせ可然と有ル相談よ一決して、證人の爲、駿河守嫡子大道寺孫九郎を、美濃守同道致し、朝比奈彌太郎を案内者とて、新府へ馳行道より、榊原小平太、大須賀五郎左衛門、土井豊後此三備に、若神子乃上乃山手へ押上り、御左り備酒井左衛門尉、石川伯耆守、本多平八郎此三手の組衆共に、北條方上野衆、并信州佐久小懸衆へさし向ひ、とや手毎に物見をりき、合戦を持て備を押出ス、其兩陣乃中を、彌太郎を、氏直直繁也を同

氏規實ヲ
伴ヒテ家
康ノ陣ニ
至ル

氏規辨疏
ス

道して罷通るを見て、左右乃備々よ使を馳て、事此次第を聞届候後、とて、之を備を押留候内、三人共、新府の御陣所へ乗付ケ、彌太郎御本陣へ參上して、右に次第を申上るに依り、早速美濃守を被召出に付、氏規罷出先達を被仰越候御和睦乃御請、延引乃次第を一々申上、不調法乃至り、迷惑仕る旨申上候得に、家康公御聞被遊、左様乃間違ひあくて、不叶と有仰よて、御機嫌能御笑被遊、此上の一戦よを不被及乃間、御先手乃面々儀を、人數を引入を可申由被仰出、孫九郎儀をも被召出、御目見被仰付、さき美濃守儀、若年此節に北條助五郎と申、親父氏康乃方よ、駿河今川義元乃方へ、證人として被相越、其頃家康公よ、竹千代君と申奉り、駿河宮ヶ崎と申所よ、御屋鋪双よて御座被成、朝夕の様よ御出會被成候に付、其節に儀あつと被仰出、御雜談乃上、美濃守、孫九郎兩人、御辨當に御料理を被下置、美濃守儀御暇申上候得に、其元當陣へ被參直談乃上、この證人までを不及儀候間、孫九郎を召連被歸候へと仰有るれども、美濃守承り、いや左様よて、無御座候、ケ様乃儀に幾重よを、手堅ク仕りせり、能御座候、氏直よを左様よ被申付候間、御手前よ被差置被下度旨申上候得と、然るよ於て、孫九郎引替として、此

家康モ酒
井家次ヲ
出ス

天正十年十月二十九日

八六四

家康大導
寺直政ヲ
富士ノ社
人ニ預ク

方々酒井左衛門尉世倅小五郎を其元へ可被遣と思召候得共、今日ちや
晚日よを及候間、明朝可被遣との仰を美濃守承り、こゝより此證人よ
及申間敷候得とも、夫共に可被遣と有思召よを御座候の、氏直よのり
存を明朝此表を引拂、歸陣可被致れ間、小田原へ歸城乃以後、彼地へ被遣候
様を被遊可被下候旨申上、氏規の罷歸る、其跡よて、榊原小平太、鳥居彦右衛
門兩人を被爲召、氏直よの證人孫九郎儀の、來年三月迄の、兩人へ御預ケ
被成候、其内彦右衛門儀の、當國よ居殘了申儀なれ、孫九郎をは何方よ差
置可申と存候哉と、御尋被遊候得と、元忠御請被申候の、當國とていま
まろと御手よ入ると申よても無御座候得と、外よ差置可申心當も無御
座候間、私手前よ差置申外乃儀を御座有間敷旨、御返答被申上候得と、重
被仰候の、人よの頓死頓病なとある儀もあくての、不叶ケ様の節乃人質
と有の、大切に儀おれ、外よ置所を思案致し見候様こと、仰有なれとも、元
忠の外よ差置申所とて、存寄無御座候と也、于時家康公よの御笑被遊、究
竟此置所有を、其方の心附ぎ候、孫九郎をば、富士根方へ遣し、富士社
人ともへ預置候得と、富士乃社家共此儀の、關東よ且那を多く持儀おれ、

北條氏直
政氏直
北條氏直
ノ敗北ニ
驚キ急ギ
和ヲ講ズ

北條家此家老乃子を疎略よの致をば、したぞ、我等幼少れ時、子細有て、尾州
へと登り、終と成たる儀有、其節織田彈正、我カ手前よの不置して、同國熱田
へ遣シ、社人ともへ預ケ置し也と仰有なれ、元忠承了、御尤至極乃御事と
申て、其翌日孫九郎を同道して、富士根方勝山村へ罷越、小佐野越後と申
社人頭へ預ケ置て罷歸る、○大三川志ハ、人質ノコトニツキ、家忠日記増補
ノ下ニ、編シテ、鳥居元忠等ニ命ジテ、三坂城ノ北條氏規ニ送ルコトニ
マ武徳編年集成ハ、鳥居元忠ニ預ケ置キ、郡内ノ勝山村ニ禁錮スルコトニ
ル作

〔戸田三河記〕

地

家康公與氏直和睦事

氏政氏直ハ、(北條氏直)左衛門佐カ打負ヌルニ驚キ、急キ無事ヲ引取ントテ、使者ヲ
以テ申サレケルハ、甲州郡内ト、信州佐久ノ郡ヲ渡シ可申、其方ヨリ上野ノ
沼田ヲ御還シアレト申越サル、家康公聞召シ、遠方ノ一所ヲ以テ、近隣ノ兩
所ニ替ル事、國家ノ利アケテ計ニ不及、古ニモ所ヲ易ル事、其例ナキニ非ス、
魯ノ隱公ト、鄭ノ莊公ト、鄭ノ泰山ノ妨ヲ以テ、魯國ノ周公ヲ祭ル許ノ田ニ
易シ事アレハ、尤其儀ニマカセ和睦有ヘシト仰ケル、

〔小田原記〕

八

若御子對陣之事

天正十年十月二十九日

八六五

○上略、北條氏忠、鳥居元忠等ト黒駒ニ戰ヒ敗、扱又氏直、家康若御子ニ於テ
 ル、コトニカ、ル、八月十二日ノ條ニ收ム、對陳アル、敵モ味方モ互ニ武勇スケタル名將ニテ、共ニ多勢ナリシカハ、
 終ニ勝劣無シテ數日ノ對陣ナリ、其間足輕セリ合處々ニアリシカトモ、何
 レモ勝劣ハ不付ケリ、上州衆ハ小田原方ニナリ、甲州衆ハ家康方ニナルト
 イヘトモ、昨日マテハ共ニ武田ノ家人傍輩ナレハ、互ニ恥テ、足輕軍又ハ苅
 田ノセリ合ニモ言葉ヲカハシ、共ニ尋常ナル振舞見支ナリ、カ、ル處ニ、美
 濃守氏規若年ノ昔シ家康ト駿河ニテノチナミ不淺シカハ、扱ヲ入、氏直、家
 康和談有テ、氏直ハ上野國不殘知行シ、家康ハ甲信兩國不殘知行シ、氏直
 ハ家康ノ聳ニ成テ、以來マテ入魂有ヘシトノ扱掛撞、互ニ證人ヲ取替シ、其
 後兩將對面アリ、扱同十一月下旬ニ、小田原へ御歸陣ナリ、是ヲ若御子對陣
 ト云ナリ、

兩軍ノ振舞見事ナリ

是月、神戸信孝、山城賀茂、貴船兩社ニ禁制ヲ下ス、

〔賀茂別雷神社文書〕

禁制

山城國 上賀茂同貴布禰

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、

一陣取放火、付、非分課役事、

一相懸矢錢兵糧米事、

右條々、堅令停止訖、若有違犯之輩者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十年十月 日

三七郎判

〔賀茂別雷神社文書〕

禁制

賀茂社領境內六郷

一當手軍勢濫妨狼藉事、

一陣取放火、付、非分課役事、

一剪採山林竹木事、

右條々、堅令停止訖、若違犯之輩於有之者、忽可處罪科者也、仍下知如件、

天正拾年十月日

三七郎(花押)

神戸信孝、皇大神宮領伊勢多藝莊椿井郷ヲ安堵シ、伊勢寺ニ於ケル亂妨ヲ禁ズ、

〔伊勢古文書集〕 一上

一多藝莊椿井郷伊勢大神宮領、自前々如在來、今以無相違可令所務事、

天正十年十月是月

八六七

賀茂社領境內六郷

多藝莊椿井郷

- 一 伊勢寺内陣取亂妨狼藉其外不可剪採竹木之事、
(取陣)
- 一 理不盡使、非分族、一切不可申懸事、
- 右條々、若違(違)非輩速可加成就候也、

天正拾年十月日

三七様御判

福島四郎右衛門とのへ

德川家康故武田晴信信勝頼父子冥福ノ爲ニ、岡部正綱ニ命ジテ、甲斐惠林寺ヲ修覆シ、又景德院ヲ建立セシム、

〔譜牒餘録〕岡部内膳正 岡部之傳記

公甲州ノ亂ヲ治メントテ、軍ヲ率テ進發シ玉フ、先穴山勢ヲ指遣シ、國中ヲ靜メシメントシ給フ、時ニ正綱申上ケルハ、如此被成候テハ、甲州御手ニ入申マシ、其子細ハ、甲州國中久シク治リテ、士民共ニ處ヲ安シ居候處ニ、今度勝頼滅亡ニ付、國中壞亂シ、小山田逆心ニテ、勝頼自害ナリ、依之士百姓共ニ無念ニ存シ、逆心ノ者共ヲ惡ミ怒リ候處へ、穴山ヲ被遣候ハ、幸ノ儀ヨキ弔合戰ト思ヒ押寄、穴山ヲ討殺シ、上杉景勝カ北條氏政ヲ引入、却テ味方ヲ敵ニ可仕候、先曾根下野(昌世)ト某トヲ被指遣、信玄菩提所惠林寺ヲ修覆シ、勝頼

家康兵ヲ
甲斐ニ進
メントス

勝頼戰死
後ノ甲斐

正綱先づ
信玄勝頼
ノ冥福ヲ

修セント
進言ス

家康正綱
ノ言ニ聽
ク正綱曾
昌世ト共
ニ甲斐ニ
入ル

正綱昌世
ト連署シ
テ甲斐諸
士ノ本領
ヲ安堵ス

家康景德
院ヲ建立
ス

田野一村
ヲ寄進ス
小宮山内
膳ノ弟長
因ヲ住職

〔景德院文書〕斐○甲

自害ノ郷ニ寺ヲ建立シ、兩將ノ追善ヲ修セント相觸候ニ於テハ、御志ノ厚事ヲ感シ、皆罷出歸伏スヘシ、甲州然ル上ハ、信州ハ尙以貴命ニ應スヘシト申上ル、公被聞食、正綱カ計尤可然トテ、即曾根下野、岡部次郎右衛門兩人ヲ甲州江被遣、正綱存念之趣相觸候様ニト被仰付、兩人命ヲ承テ甲州へ罷越、國中ノ士百姓ヲ呼出シ、右之趣相觸、當四月信長甲州發向ノ砌、惠林寺ノ僧五十人餘燒殺サレ、寺モ及破却候ヲ、如前々取立修覆申付、勝頼自殺ノ村ニモ寺ヲ建僧ヲ置テ勝頼ノ菩提ヲ弔ハシメ、尤二箇寺共ニ寺領迄申付、其上ニ本領安堵ノ書付ヲ、甲州士へ兩判ニテ遣シ候ニヨリ、甲州ノ士民大ニ喜ンテ、皆々公ニ歸伏シ奉ル、○上下略、寛政重修諸家譜、岡部正綱譜異事ナシ、

- 家康様田野寺建立付、御慈悲之儀被仰出候五ヶ條、
- 一 田野寺建立之儀被仰付候事、
- 二 甲州先方衆田野寺建立付、力を添候様ニ被仰付候事、
- 三 田野一村如何程在之候共、御寄附之儀被仰付候事、
- 四 小宮山内膳弟拈橋僧(取橋)田野寺住持被仰付候事、

天正十年十月是月

トナス
殉死者ノ
位牌ヲ置
ク

尾畑景憲

百姓餓死

天正十七
年ニ朱印
下付

惠林寺ヲ
取立ツ

天正十六
年ニ景德
院成ル

天正十年十月是月

八七〇

五勝頼公御供之侍土屋惣藏を初、不殘位牌を立、茶湯燒香等可爲嚴密、依是爲茶湯山、田野村之外、初鹿野村ニ而御付被遊候事、

尾畑勘兵衛

三月十五日

景憲(花押)

年代過候ヘ、忘レ申事ニ候間、記付候テ進之候、

猶々、其地久敷百姓兩人カ、死候由、不及是非御事ニ候、以上、

尊書畏拜見候、

一 田野ヘ權現様御朱印、天正十七年ニ被下置候、并伊兵部殿奉行、御披露者稻熊藏殿ニ而候、請取人ハ大久保十兵衛殿ニ而候、甲州衆悉拜見申候、我等式も十七歳之時奉拜候、就是重々家康様御慈悲之上意共ニ候、

二 此田野寺立根本ハ、天正十年十月、於新府、權現様八千之御人數、北條殿五萬ニ而御對陣之時、甲州駿河之侍衆を被召抱、惠林寺如前々取立候ヘ、又田野ハ勝頼切腹之場ニ候間、寺を取立候ヘ、其郷如何程有之共、可被下由ニ而、天正十六年ニ此寺立申候、様子候而遅々申候、其段ハ事長ク候間、

不及申候段尤ニ候、敬白、

尾畑勘兵衛

五月三日

景憲(黑印)(花押)

田野寺今之住持

本策和尚

景德院殿惣惣百中

○家康、正綱ニ命ジテ、惠林寺ヲ修覆シ、景德院ヲ建立セシムルコト、年月未ダ詳ナラズ、姑ク景德院文書ニ據リテ、茲ニ掲グ、ナホ勝頼戰死ノコト、三月十一日ノ條ニ、伊奈家次、景德院領ノ檢地ヲ免除スルコト、十七年十月二十三日ノ條ニ、加藤光泰、景德院領ヲ安堵スルコト、文祿元年二月八日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔甲陽軍鑑〕

二十 家康ハ慈悲深大將フテ、勝頼公御最期處ニ寺ヲ建テ、甲州先方衆ハ仰付ラセ、田野ハ勝頼公御墓寺ハ、家康大慈大悲ノ儀をもつ

家康ハ慈悲
深キ大將

天正十年十月是月

八七一

廣嚴院ノ
僧勝頼ノ
屍ヲ葬ル

天正十年十月是月

八七二

て、如件小宮山内膳勝頼公○朝野舊聞哀藁ふ憎まれて御供申を家康聞給ひ、内膳弟坊主を彼寺乃住持ふあさる、信玄公乃菩提所○下略の兼くとり惠林寺あれ、此寺ふ前々乃ことく乃寺領、此田野寺○上ふも、田野の郷皆付と有て下さる、

〔甲陽隨筆〕

百九十八所載

天正十年三月十一日、武田家滅亡し、右之死骸其儘捨置しを、武田○朝野舊聞哀藁は菩提所惠林寺○下略の、去ル三日勝頼を寺内拒て不入、其上○朝野舊聞哀藁こ此死骸も取納かり、織田家よ○朝野舊聞哀藁答めをも請へきやと、後難を恐れて捨置たるを、田野より四里乾の方、八代郡中山の廣嚴院と云て、曹洞宗の住僧、十一日夜入田野○朝野舊聞哀藁來而、勝頼父子を始め、從士の死骸を悉く田野觀音堂○朝野舊聞哀藁に葬して、塚を築て弔ひ○朝野舊聞哀藁おはし、和尚の曰、信長父子の咎を請る、連國主の死骸葬する○朝野舊聞哀藁よ何の恐あらん哉と云しよし、同年七月廿九日、大權現様甲州御入國之節○朝野舊聞哀藁、七月七日ノ條ニ見ユコト、此所被爲成、中山廣嚴院○朝野舊聞哀藁に被仰付、田野觀音堂○朝野舊聞哀藁に一字御建立有て、天童山景德院と號し、御朱印七拾貳石餘、田野郷一圓寺領、被下之、小宮山内膳友信○朝野舊聞哀藁う忠死を感し思召、内膳○朝野舊聞哀藁う弟坊主○朝野舊聞哀藁廣嚴院、小宮山丹後○朝野舊聞哀藁守昌友三男○朝野舊聞哀藁を被召出、住持○朝野舊聞哀藁に被仰付、景德院開山拈橋長○朝野舊聞哀藁因大和尚○朝野舊聞哀藁院七世、と稱す、

〔岩淵夜話別集〕

扱甲州主ナシ國トナルヲ以テ、北條氏政ノ子息氏直、信玄ノ孫ナレハ、筋目ニ付テモ、甲斐ノ國取ウチ也トテ、小田原ヨリ手ツカヒテ

甲斐ノ庶
民喜ア

天童山景
徳院

致トノ取沙汰專ラ也、御家へ被召出タル甲州衆是聞テ、北條家ノ國トナサシ○朝野舊聞哀藁、古傍輩共相語ヒ、不日ニ御手ニ入レ可申ト、口々ニ申上ルト云へ○朝野舊聞哀藁、家康公少モ御取上不被遊、一向信玄公勝頼二代ノ間ニ、武篇場數有之侍ノセンサクヲ遂ラレ、直參同心○朝野舊聞哀藁ト、由緒書又ハ手柄ノ品ヲ書付ニテ御取寄遊サレ、段々被召抱へキトノ御意ノ趣ヲ成瀬吉右衛門、岡部彌三郎○朝野舊聞哀藁兩人ニ被仰付故、武田家ノ諸浪人大小上下、御家へ望ヲカケズト云者ナシ、扱又信玄ノ菩提所惠林寺ヲ、信長燒拂ハレケル跡ニモ、前ノ如ク寺ヲ建、位牌ヲ立ヨト被仰付、御金ヲ被遣、其上勝頼討死ノ場所ニモ、一字ヲ建立仕レト、重々御念ノ入タル上意ヲ、甲州ニテ侍ノ儀ハ不及申、町人百姓迄モ承傳へ、難有ト申テ、悦事限ナシ○朝野舊聞哀藁、氏直ト對陣シ、尋テ、之本多信俊ヲ殺スコト等ニカ、ル、六月十八日ノ條及ビ本月二十○朝野舊聞哀藁九日ノ條ニ收ム、

〔甲斐國志〕

七十六代郡大石和筋部四

天童山景德院

曹洞宗下總州國府

天正十年十月是月

八七三

天正十年十月是月

而の無之候、以來之其御寺長久之正儀候、恐惶敬白、

尾畑勘兵衛

八七六

霜月廿三日

景憲(花押)

甲州

田野寺 慶徳院 玉机下

廣徳院玄
利ノ訛狀

關ク前

- 一 田野之人馬壹人壹疋も、中山へ遣申間敷事、
- 一 薪少も中山へとり申間敷事、
- 一 麻柄うけ取候儀、以來とり申間敷事、
- 一 一年貢未進候共、一倍宛之勘定ニ仕間敷候、如御國法ニ取可申候事、
- 一 關本に人足遣申間敷事、
- 一 炭一圓中山へ取申間敷事、
- 一 くすの事も、以來中山へ取申間敷事、
- 一 以來田野の百姓ニ、少も非分申間敷事、

景徳院ヲ
立ツベシ

景徳院ノ
什物等ハ
景徳院ヘ
返付スベシ

景徳院ヲ
以テ廣居
所ノ隱居
ルベシ

家康及ビ
前田利家
ノ朱印ヲ

- 一 肝煎之猪右衛門を、以來者百姓おとこ可仕候、付タリ、三ヶ條之盜人させ申間敷事、
- 一 田野の寺やうてゝて可申事、
- 一 關本より歸り候ハ、即時ニ田野へ移居可申候事、
- 一 田野百姓をしゝをし候二人之者、則かへし可申事、
- 一 田野の住物、(任)ん家具、其外之諸道具、如前々田野へウへし可申事、
- 一 田野へつき申山之儀、御訴訟申て、如前々之御朱印寺山ニ可仕事、
- 一 勝頼様御さめよとて勸進物仕候をも、中山ニ不置、田野寺之用ニ遣可申事、
- 一 田野陰居之儀(隱下同シ)ハ、拙僧一代之儀候、以來中山之陰居所と申間敷事、付タリ、右之子細ハ、陰居おき内ハ、田野あき寺ニ候間、右之通ニ候、以來田野之寺兒孫之儀ハ、勘兵衛殿と相談仕、玄尊公へ定置事、
- 一 田野寺ハ、權現様御慈悲之儀五ヶ條猶以承届候、
- 前後拙僧罷違候間、御侘言申候所、各御申候儀忝存候、已來少も違背之儀候者、如何様にも可被仰候、就中權現様少將殿兩通之御朱印、尋出し可申候、但

天正十年十月是月

八七七

天正十年十月是月

愚僧者請取不申候事、

右之通少も相違仕間敷候、爲後日手形如件、

中山

廣嚴院

寬永八年 未ノ二月十一日

玄利(花押)

川窪信俊

川窪與左衛門殿

同 主膳正殿

真田隱岐守殿

同 長兵衛殿

駒井右京進殿

跡部民部少殿

向井將監殿

横田甚右衛門殿

同次郎兵衛殿

各中

證文之事

甲州田野景徳院寺領、從中山數年被取候、依之百性共甲州衆各々以御公儀
に御訴訟可申上旨有之處、三箇寺各々へ佗言申候而、廣嚴院玄利長老
爲致一筆進置候、自今以後田野寺之義、從中山少も構申間敷候、若以來相違
之儀御座候者、何時も三箇寺へ可被仰越候、急度可申付候、爲後日一札如件、

摠寧寺

良尊 黒印 不明文

大中寺

韓篤 黒印 韓篤印文

龍穩寺

春道 黒印 春道印文

寬永十 酉癸 歲卯月廿四日

川窪與左衛門尉殿

同 越前守殿

秋山 修理殿

天正十年十月是月

康ニ抗ス

天正十年十月是月

八八二

信蕃ノ奮闘

昌幸戦ハズ
大井ノ家臣信蕃ニ屬ス

蘆田小屋を發せ、とき昌幸も兵を率ゐて筑摩川北邊に陣し、岩村田に備ふ。信蕃たゞちに筑摩川を渡らむと、水深くし、かふとをむと、よりて玄とらく鹽灘(名田)に屯し、先敵に強弱をこゝろをむつため、少しく城を攻め、まゝやうに兵をあゝ敵のまゝりへをまゝふて進み、たゞる、信蕃殿してこれおあゝに、城將大井とつうらまゝみく競むらゝる、味方利なくして敗走、より信蕃馬をせさゝ敵中ふいり、四方にあゝる、まゝれとも敵強くして退り、まゝたふ歩卒二人鎗を提て、信蕃より左右より突むと、信蕃兩手よかの二鎗をせらみ、勇を奮力戦と、いへとも、猶あやうし、家臣蘆田川又左衛門某としり來り、敵を逐、それ身も創をかうぬ、よりて信蕃まぬらゝる、事を得せり、衆軍こゝをまゝ、一時は競むと、みしかと、敵戦を屈して四方に離散せ、大井をまゝ城中に走せ、味方追討して城門にいさり、これを攻ること急なり、大井防くに術なく、和を請ふ降參、この日首をうる事三百餘級なり、昌幸とせしめより兵を動らさ、敵敗るゝをまゝて上田に歸る、信蕃す取とち家臣依田勘助某をして、大井よかたり、城を守らしむ、こゝをよと大井の家臣とち信蕃に屬せ、中澤、小池、岩瀬、高月等これなり、東照宮

檢使柴田康忠

中澤久吉

氏直ニ屬ス

信蕃久吉等ヲ招ク

〔寛永諸家系圖傳〕

百二十四

中澤久吉

衛門尉

信州岩村田よりはる、岩村田

大炊助よつゝへ、其後武田信玄、おあじく勝頼よつゝへ、○寛政重修諸家譜、中澤久吉譜、天正十年、勝頼没して後北條氏直に屬せ、○寛政重修諸家譜、中澤久吉譜、信濃國、東照大権現甲州新府に御進發のとき、信州ことゝを氏直に屬せ、是より蘆田修理大夫(信蕃)、○寛政重修諸家譜、中澤久吉譜、信州佐久郡見澤の山小屋に楯籠時、忠節をほくすべきにむね、御書を蘆田よたまふ、蘆田をては御味方とあり、ひそめよ岩村田に住せ、諸士よ告ぐいとく、今度大権現に屬し、てまつり、忠節を抽べきやいゝあるべきととふ、此時士とち諾し、味方よ屬していとく、こゝをよりさき岩村田よある輩、氏直より爲よ、其母を人質と

天正十年十月是月

八八三

貳百拾貫文

内山之中

拾貫文

平賀之内

拾貫文

馬流之内

新地之分

七百貫文

入澤

三百貫文

岩尾之内

右合千貳百參拾貫文、今度被屬御當方、無二可有御忠節之由承候條、任御望候、恐々、

天正十年 壬午 霜月十九日

依田右衛門佐信蕃

小山田藤四郎殿

○信蕃、昌幸ト岩村田城ヲ攻ムル年月未ダ詳ナラズ、依田記ハ、伴野城攻、前山城攻、田口城攻等ヲ混同セリ、故ニ姑ク寛政重修諸家譜依田信蕃譜ニ據リテ、是月ノ條ニ收ム、マタ家康、依田信守、戸田金彌ノ伴野城攻ノ功ヲ褒スルコト、七月十九日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

信蕃昌幸
村田ヲ攻

岩村田
兵四ヶ所
ニ塞フ

岩村田城
城主大井
氏

〔創業記考異〕

十一月、依田、真田等岩村田城ヲ攻兵ヲ引テ退處、敵跡ヲ付、依田反シ戰テ、三百餘討取、○續本朝通鑑ハ十月ニ係ク、神君年譜ハ十年是年ニ係ク、

〔御年譜微考〕

六 信州筑摩川上岩村田と云處、逆徒等四ヶ所ニ砦、ヲ築楯籠ていぬ、ヲ陥いらむ、依之味方の勢取まきて責られとも、城兵能防、ヲ戰て、落へまよふもあがりし、ヲ寄手の面々既ニ勢、ヲ引上る處、城兵等一同ニ突て出付、ヲ隨ふ、時ニ依田信蕃後殿して有る、取てかへし、士卒、ヲ我進めて戦ふほとと、惡徒等三百餘人討取る、依之信蕃并弟新九郎、ヲ武德編年集成、名、ヲ同源八、ヲ武德編年集成、名、ヲ依田豊後守、同右近、同主膳、與平金彌等、ヲ御感狀を下さむる、ヲ補及武德編年集成、家忠日記、ヲ増

〔千曲眞砂〕

八 久 郡 岩村田城 天正十一年、ヲ癸未、城主大井雅樂助降御當家、ヲ往昔建武年中落城、大井古城也、ヲ建武二年落城、兵、ヲ岩村田、ヲ古老、ヲ明曆年中、ヲ利持氏ノ子永壽王、ヲ岩村田ニ赴キ、ヲ大井持光ニ頼ルコト等ニカ、ヲル、

傳曰、大井持光嫡男大井美作守光照、ヲ私云、是等受領不可有官名、ヲ只後改大膳大夫、生五子、應仁文明中人也、長男岩尾彈正貞晴、二男根々井宮内少輔、三男耳取民部少輔信直、四男小諸伊賀守光忠、五男武石大和守信廣也、光忠、ヲ文安

享祿之頃、小諸與岩村田兼領云、此子孫記錄紛々難辨、自文明十六年住居小諸宇登坂、長亨元年丁未移居今本町云々、自文明十六年、岩村田爲村上領、自天文六七年爲武田領、天正十年壬午、至城主大井雅樂助云、孫不知其實否、一說大井信濃守不詳、十二代孫大井美作守信貞者生五子云、五子同前、又一說、大井彈正次郎義長者岩村田中興也、後住岩尾、生五子、長男岩村田民部、二男岩尾彈正、三男耳取、四男武石、五男下河原云々、又一說、大井駿河守康元者明應中之人也、岩村田城主又住下筒井云、又一說、大井朝光三代後裔朝行者住岩村田、其甥甲斐守從弟駿河守尾張守上野介左近將監等各繁昌住岩村田、略

長宗我部元親、讚岐ニ入り、十河城ヲ圍ミ、兵ヲ留メテ國ニ歸ル、

〔元親一代記〕中 一岩倉之城落去以後、直ニ讚州へ被打越事

角て讚州之城ハ、西半國ハ以前手ニ入、東讚岐境に十川と云所有、此城ハ三

好同名隼人佐是ヲ持、元親三好合戰之砌、此境目迄西衆押詰、元親ヲ待、此

寄手ノ人數頭分香川殿、舍弟觀音寺殿、長尾城主國主三郎兵衛尉、新名城主

入交藏人、寶田城主中内源兵衛、羽久地城主谷忠兵衛、大西上野守、是ハ與州

衆川口城主妻取采女馬立、居説ク新前川、金子、石川、曾我部、都合此勢一萬餘、先十川

存保十河城ニ據ル

寄手衆

元親十河表ニ出ヅ

堀一重ニナシ付城ヲ造ル

表へ打寄、城廻り在々民家發向し、在陳ス、扱元親天正十年十月中旬ニ、岩倉カそよ越と云山を越、十川表へ打出給ふ、則其日西讚岐與州勢阿波分ハ人數一ツニ成、三ヶ國ノ人數に、與州六頭ノ勢都合三萬六千ニ成夥し、則其日暮ニ十川ノ城へ矢入有、暮本ハ夜半迄鐵炮ノ音誠ニ天地も震動スル計也、十川ノ城をハ堀一重ニして其儘打置、平木ト云所ニ付城をして、讚州與州衆を番手ニ云付置ル、東讚岐在々牟登、高松、四戸、八九里、矢嶋ノ浦々無殘發向、元親矢嶋へ見物ニ渡り給ひ、寺々院主ニ古事共語らせ聞給、菟角を以テ冬ニ成、雪深ク、國元ハ兵糧以下ノ運も難成、先歸陳有し也、

○元親、勝瑞城ヲ陷ル、コト、及ビ香川五郎次郎讚岐ヲ侵スコト、并ニ

八月二十八日ノ條ニ、存保、元親ニ降ルコト、十二年六月是月ノ條ニ見

ユ、

〔參考〕

〔土佐物語〕十三 十河城責事

長宗我部元親阿州悉く平均有て、讚州へ入給ふと聞えし、香河民部少輔同舍弟觀音寺、長尾ノ城主國吉三郎兵衛、新名ノ城主入交藏人、寶田比城

虎丸城ニ
向フ
安富玄蕃
城ヲ棄テ
逃ル
存保ヲ十
河城ニ圍
△
牟禮高松
ニ放火ス
岡豊ニ歸

主中内源兵衛羽久地の城主谷忠兵衛大西の城主大西上野豫州勢ふの妻
鳥采女金子備後守石川刑部馬立新前川(居城カ)曾我部等都合其勢一萬餘騎迎と
して國境へ出向ふ元親の十月中旬岩倉を立て曾江越を経て讚岐國へ押
入阿波讚岐伊豫の勢を合て三萬餘騎虎丸城へ押寄る城主安富玄蕃是
を見て我小勢あて此大軍と戰事洪水を手あて防ふ異あらは逆も叶ぬ
物故ふあましい成軍して人の物笑ふあらんかんとて攻さる先ふ城を明
てそ落行たる頓て此城をこた捨直ふ三好隼人正存保う籠りし十河へ押
寄即時ふ町を打破す其日暮方城へ矢入有関の聲鐵砲の音に震動を
る計也存保心の剛ふとやを共過し中富は合戦ふ憑切さる家乃子郎等悉
く討を氣疲を勢盡ぬれり戦ふを及を閑り返て居よりたる寄手城は前後
を揉破り堀一重にあし裸城あして其儘閑き平木ふ付城を構へ伊豫讚岐
乃勢を番手に附置東讚岐の在々牟禮高松(八卷)やくり矢島の浦々迄一字も殘
さば放火して元親矢島へ渡寺は院主に對面有て古源平は軍あると聞給ふ
兎角それの冬ふ成雪深くして士卒も手龜カニ兵糧は運送も成りよりるへし
とて岡豊へ歸陣し給ひたり

〔南海治亂記〕

九 土佐元親自阿波發向讚州記

十河城ノ
要害

天正十年十月中旬阿波岩倉ヨリ曾江谷越ヲシテ讚州十河表へ打出玉フ、
其日三ヶ國ノ兵一ツニ成テ三萬六千人指集ケレハ其日ノ暮ニ矢合ノ関
ヲ揚タリケル鐵砲ノ音天地ヲ響ス此城ハ平阜ニシテ三方ハ深田一方大
手ニシテカラ堀フカク切立土ノ性ヨク持ケレハ屏風ヲ立タルカ如シ三
好存保是ヲ根城トシテ同名隼人佐ニ守ラシム○本書存保ト隼人佐トナ
存保トシ隼人佐トアルトシタルナルベシ元親阿波出陣ノ時ヨリ西
讚岐東伊豫阿波大西ノ兵將ヲ以中讚岐へ出陣セシム香西伊賀守是ニ降
シテ夫ヨリ東方ニ向ヒ十河表ニ出陣ス其人々ハ豫州河江ノ城守妻鳥采
女馬立中務新居前川金子石川曾我部等西讚岐ノ香川信景其弟觀音寺景
令西長尾國吉三郎左衛門財田中内源兵衛入間尻孫右衛門後號羽床伊豆
守長尾大隅守新名内膳香西伊賀守カ陣代香西加藤兵衛其弟植松帶刀大
將ニハ長曾我部親政各一萬三餘兵(千餘カ)ヲ以十河ヲ圍元親阿州ヨリ來陣ヲ待
ツ元親阿州ノ弓矢存分ニ合ヒ十月廿日ニ十河ニ來リ當國ノ弓矢ハ果敢
行タルヲ快悦ス兩軍ヲ合テ猛威ヲ振ヒ十河ノ城邊ヲ燒拂ヒ孤城トナシ

諸將十河
城ヲ圍ミ
元親ノ來
陣ヲ待ツ

讚岐飛城
シテ付城
ニ在番
ラシメ物
還ス軍

天正十年十月是月

八九二

六萬寺燒

大西ニ歸

テ、惣軍ヲ平木村ニ退ケ、爰ニ附城ヲ築テ、讚州ノ兵將ニ命シテ、番手持ニ相
定メ、一二ノ次第ヲ逐テ在番ス、夫ヨリ惣軍ヲ引上ケ、東方ヲ順見シ、元親屋
島山ニ上リテ古跡ヲ見物ス、住僧出會シテ、靈山ノ由來、屋島合戦ノ圖說、緣
記ノ書等ヲ演說シ、山中ノ古跡獅子靈巖寺ヲ順覽シ、下山アツテ西潟寺ニ
馬ヲ止メ、案内者ヲ求レ、人民山林ニ隱テ一人モ不居、爰ニ屋島ノ法橋ト
テ僧侶アリ、是ヲ尋出テ郷導トス、凡僧ナレ、辯舌利口ノ者ニテ、元親モコ
レヲ稱美シ玉フ、寺ニ中略、法橋八島ノ古事ヲ説クコト、元親六萬、明ル日出立
テ志度ノ浦ニ赴キ、原ノ大町ヲ過ル時分、アトノ寺燒亡ス、元親是非ナク思
ハレケレ、遠ク隔ヌレハ力ナシ、其所ニ馬ヲ留テ、出火ノ巨細ヲ糺シカハ、
樵汲ノ下部カ業也、元親是ヲ憤テ、彼下部ヲ斬首、四本竹ニ掛テ、罪札ヲ立テ
通リ玉フ、志度ノ浦ニ至リ、補陀落寺房崎海人野ノ里ヲ遊覽アツテ引返シ、
春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山兩山ノ間入海ニテ、山田郡小山ノ
下マテ潮サシ來ル、遠ク干潟ナレハ、春日ノ里ト木太郷ノ間、海ノ道アツテ
通用ス、元親是ヲ涉テ香河郡ヲ越、西尾越ヘ引取り、旗下ノ諸將ノ成功ヲ感
シ、書ヲ以テコレヲ賞シ、大西ノ城ニ還ル也、

老父夜話記

六萬寺ノ
梵鐘ヲ前
ノ神寺ニ
運

古ハ志度
ノ浦ノ海
底深シ

天正十年十月下旬、元親ハ大西白地ノ城ニ歸リ、伊豫讚岐降參ノ諸將ハ、交
代シテ平木城ニ在番ヲ勤ム、其時豫州ノ兵將海路ヨリ往來シテ、屋島ノ浦
ニ舟繫ス、牟禮六萬寺ノ燒跡ニ、鐘樓一字殘テアリ、此ノ鐘ヲ取テ豫州ヘ歸
リ、石槌山前神寺ノ梵鐘トス、其鐘ノ銘分明ニシテ、今ニ在セリ、六萬寺ノ伽
藍タル事不語シテ知ヘキ也、或人問テ曰ク、屋島、牟禮、高松、志度ノ浦、陝澗巖
窟ノ境ニシテ、繁榮ノ地ニ非ス、何□ノ故ヲ以テ、伽藍高大ナル、有ヤ、答テ
曰、伊豫讚岐ハ海濱淺フシテ舟繫アシ、此浦ハ山間ニ入事一里ニシテ、海
底深ク數千ノ舟ヲモ繫ヘシ、是ヲ以テ繁昌ス、古ト異ナリヌ、今ヲ以テ較ヘ
カラス、上我ニハ遣唐使ヲ立テ、諸越ノ法則ヲ受次テ、我カ國ノ法制ヲ立玉
ヒ、朝廷ニ百官職掌ヲ備テ、天下ノ政道分明ニ取行玉ヒ、凡民ニハ田圃ニ阡
陌ヲ分ツテ租稅ヲ收納セシム、故ニ山田郡ニ阡陌ヲ六萬寺アリ、安治ニ二
萬貫寺アリ、萬貫寺ヲ開基僧一人一錢ノ助力ヲ勸メ、百萬人ノ放財ヲ受テ
建立シタル寺ナル故ニ、萬貫寺ト云也、時去世久シテ寺院斷絶スト云ヘ、
名ノミ殘テ王代ノ餘波トス、寛文中、牟禮ノ村長中村某ト云、草廬ヲ六萬

天正十年十月是月

八九三

寺ノ蹟ニ造リ、燧山ノ律師ヲ招居シテ庵主トス、邦君コレヲ美玉ヒ、六萬寺山ヲ寄附シ、昔ノ蹟ヲ後世ニ垂給フ也、

〔三代物語〕

下 北臺天神 在山田村

十河十郎吉保第三子池内孫五郎高教

五代孫主殿之助高晴、世屬十河氏、居山田郡三谷村、天正十年秋八月、土佐元親將長曾我部親政將五千餘人來圍十河城、是時城主民部大輔存保在阿州勝瑞城、使三好隼人守十河城、池内高晴戍城門、高晴將數百騎禦親政之師、斬首數級甚有力焉、土佐之兵急伐之、不能陷之、冬十月、元親大軍至、凡二萬餘人連進攻之、城益固守不降、土佐之兵多死、於是元親退舍三木郡平木、城同郡池戶、待城中之勞、○下 略

〔土佐國編年紀事略〕

七 同年同月中旬

元親ソヨ山ヲ越、十河ノ城ヲ圍ム、

其軍三萬六千餘、十河ノ城ヲ堀一重ニ押破リ、付城ヲ築キ、豫讚ノ軍ヲ以是ヲ守シメ、東讚岐ノ村落ヲ巡視シ、長尾ノ城ニ入テ有功ヲ賞シ、軍ヲ大西ニ還ス、○下 略、元親一代記及ビ南海治亂記ヲ引ク、前掲

池内高晴

長尾城ニ入リテ戰ノ功アリテ賞ス

十一月小 丙辰 盡

一日、辰是ヨリ先、神戶信孝、毛利輝元ト好ヲ通ズ、是日、誓書ヲ調ヘテ、輝元ノ將吉川元春ニ送ル、

〔吉川家文書〕

吉川家什書拔萃卷三

今度隆景相談候之處種々御入魂之由祝著候、然者誓印之事承候則調進之候、如此候上、自今以後毛頭拔公事等不可有表裏候、深重申談、於何之道も不相違、諸事互可達存分候間、上口之様子並内通之趣、口上ニ申合候、恐々謹言、

十一月朔日

信孝(花押)

(折封ハ書)

三七郎

吉川駿河守殿(元卷) 座下

信孝

是ヨリ先、上杉景勝、使ヲ蘆名盛隆ニ遣シ、好ヲ修ム、是日、盛隆、誓書ヲ景勝ニ致ス、

〔上杉家文書〕

尊書拜見忝過分至極奉存候、抑向後可被仰合之由、重而爲御使被仰越旨、於

天正十年十一月一日

八九五

諸事互ニ存分ヲ達スベシ

檢使ノ上
テ神血ヲ以
ス

天正十年十一月二日

八九六

盛隆一段太慶之由被存候、依茲彼御使御驗使之上、以神血被申入候之、如斯之上者、猶以御甚深、乍恐御簡要之段奉存候、將又御刀兼光作、被掛御意候、寔以其恐不少之由奉存候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

富田美作守

富田氏實

霜月朔日

氏實(花押)

上條宜順

上條殿

〔上杉年譜〕

景勝七

同年冬十一月十一日

會津盛隆ノ家臣富田美作守方

へ、先頃盛隆ト隣交ノ好ミヲ結玉フヘキニ付、御書並兼光ノ御刀ヲ下サル、

富田御請ノ返札調エ、上條彌五郎政繁政繁ハ宜順ノ誤、土肥方マデ、今日

到來ス、其書云、○下略、霜月朔日附、上條宛、富田美作守氏實

○景勝、盛隆ノ新發田重家ヲ助ケンコトヲ恐レ、盛隆トノ舊交ヲ尋ネ、

其老臣金上盛滿、富田氏實ニ誓書ヲ要ムルコト、二月二十六日ノ條ニ、

マタ盛隆、書ヲ景勝ニ與ヘテ、景勝ノ新發田出兵ニ贊スルコト、八月十

二日ノ條ニ見ユ、

二日、丁神戶信孝、柴田勝家、瀧川一益等、羽柴秀吉ヲ除カント圖ル、然レ

ドモ越前雪深キヲ以テ、兵ヲ出スニ便ナラズ、因リテ、前田利家等ヲ遣シテ、姑ク之ト和セントス、是日、利家等、山城山崎城ニ抵リ、秀吉ト和ヲ講ズ、秀吉之ヲ諾ス、

〔秀吉事記〕 柴田退治

秀吉山崎
ニ城ク

抑羽柴筑前守秀吉者、天正十年十月十五日、相勤將軍之御葬禮以來、帝都、坤角山崎、上拵一城直下五畿内、相鎮生民、然而迎取前秋田城介平朝臣信忠、御

若君、奉安置安土、欲令守護之處、織田三七信孝相談、柴田瀧川云、於相渡若君

於秀吉者、彼一人相計天下、恣可振權威、豈眼前也、寧非招秦趙高之怨、唐國忠

之殃哉、言而一味同心介抱之、於是秀吉一端重將軍御子弟之禮、且又思誓紙

之恐、雖呈條々之懇札、信孝心不許容、剩内々企敵對之計策者也、此時柴田修

理亮勝家、令同名伊賀守勝豐、謀之爲和平之扱、前田又左衛門利家、不破彦三、

金森五郎八差、上京都、其故者越國、自初冬至殘春、雪深而難運、糧唯今於起千

戈者、人馬之疲、百姓之勞、寔國之虛也、思之儀也、○下略、秀吉、長濱出陣ノコト

ニ收

〔太閤記〕

五

秀吉卿與柴田修理亮勝家及鉾楯起之亘

天正十年十一月二日

八九七

勝家柴田
テ和ヲシム

信孝秀吉
ヲ除カシム

天正十年十一月二日

八九八

秀吉安土ニ
移シ信雄
ヲ安土ニ
移シ信雄
名代トス
トノ説

秀吉ノ威
權日ニ加
ル

勝家最秀
ス疾視

勝家一益
ト謀リ信
孝ニ説ク

秀吉卿の天正十年十月十五日、信長公被相勤於御葬禮爾來、城南に寶寺汝
爲城擲棟梁于畿内、撫育於萬民、而城介信忠卿之御若君の、信長公乃嫡孫な
むの、江州安土山よまへ奉り、北畠中將信雄卿を、若君十五歳まならせ給ふ
まゝ、爲御名代諸事御計ひ有へしと、是も安土よ置奉り尊敬せ、○秀吉、長秀
ト、八月十一日ノトナレ見ユ、頗君臣親愛之躰巍然乎、可謂忠臣矣、素秀吉卿の、
眞小輩之人なるを、數ヶ國汝領するのよからず、若君を守立ると云名のよ
にく、實の天下之政務此人よ在しは、故將軍に如く、威逐月加、祿逐年増
是偏よ離倫之才智、絶類之武勇よ因かり、然るを小智小見なる傍輩是を
妬む、是を惡む事甚以淺あらば、取分ふるう妬み思ふを、勝家よ極ける、京
童秀吉卿よ便り幸いとしたり者を、柴田方は町人うらやまつ、越前よ至て、
秀吉卿威勢之程を語りしあり、妬心日々に生し、怨憎月々に長ず、是寔よ古
今不易之同情也、因之勝家與瀧川左近將監一益縁者乃事なれど、相議し謂
けるの、秀吉今若君を安土よを奉り、をのれ後見として、天下之裁判自由
之至、不及是非事共也、最負之者よ其沙汰快し、我等あとに便りぬる者に
の、萬疎ありしと也、今不去兩葉、至後斧柯を用ゆるし、然間織田三七信孝

信孝長秀
ニ説ク

長秀明答
ヲ避ク

武勇ハ勝
家第一

よ此有増申上、秀吉を押下さんとそ計ける、かくて丹羽五郎左衛門尉長秀
へ、此趣に興しく候へと御頼をかされ可然候のん旨、瀧川指圖有により、
信孝よ三宅中記を以、委細よ被仰り、長秀奉り、仰御尤よ候、然の若君
を秀吉取立申を、いさねし給ひ、まつ若君を岐阜へ御取もとし被成、
急度御後見之義あるへきと思召候の、此御催し宜しくおしはし候の
んや、秀吉後見を嫌ひ、誰やの人其沙汰に及候共、若君御幼稚之間の、惡口兩
説絶申はしく候、能々御思惟可然おんさんやと計にく、まかと興し可申と
れ返事ありし、長秀思ふやう、天下之裁判の中々勇猛よ達しする計にて、
古今あらざる例和漢甚以多し、武勇を以てせ、柴田方の十に八九目出事
こそ多めれ、其をいあふと云よ、第一柴田の信長公之老臣よおひて、武
勇の長より、殊よ北國の、前田又左衛門尉、佐々内藏介、不破彦三、原彦次郎
かと云歴々の勇者多く有し、其上勝家甥にく侍る佐久間玄蕃允、舍弟久右
衛門尉、同三左衛門尉、同源六郎、何をせしお犯る者にしく、矧武備あり、是
偏よ柴田よ對し肩を比ふへき人なれ所瞭然より、夫天下之器よあふる地
位の、能人を知て、其用實有て、度量大やうよのひ、才智豊よ、武勇よ達しあ

天正十年十一月二日

八九九

秀吉ハ才
智古今ニ
獨歩ス
秀吉ハ才
物志ハ
辨アリ

ら武を以事とせき賞罰兩輪の如く用と云共賞を以強く罰を弱く施し何事も理の正にあつてせしむるに法度之立へき本に己を正しくし他を恵む事も大やうをむろく衆を愛し民を撫育し財寶を愛せき専威之柄を能養ふ類ひは在予久しく信孝勝家一益之行を窺見はに武勇を以事とし其外の勝を是鳥にしきいと羽翼あふ有り如し如何そ自由を得んや秀吉卿の勝家より勇功の少かけを江北淺井父子を敵とし小谷の城に向て對陣し終り得大利其後播州強敵は中は在國し是も亦程もなく一國平均は治しあり一國より六國を亡しつる秦威は似たり殊は勇猛も且備才智の古今は獨歩せし程を見えしあり秀吉天下を舒卷せん事掌握し覺ふか勝家得大利事有とも若君を蔑如とし給ふ處し周公且乃心緒あるの昔さへまれなりき今の世日本おしてありあらんそをせよ何をともとありし事の有へらす同しくのともかくをならそやと思ふある由戸田半右衛門尉高木左吉坂井與右衛門尉おとに對し悲嘆之形勢尤ふあり大なる秀吉の天下之器はあされり惜乎華麗は身を勞し自己之榮花こそ天下國家を知く乃本意なれと思へり又翫物喪

山崎ハ勝
高ハ池田
利ハ其功
ト雖モ
實ハ秀吉
ニアリ

一益謀ヲ
シテ勝家ヲ
ト和セシ
ムトシ

志之癖も有若此等之癖病あくの賢君おこそ有けぬ何として天下之器もちのし天下之器お當る才の天のあせは所也天は作る所我人道としていゝ妨々んや思ひもよらはる所也信長公御連枝歴々多く大臣あまの侍りたる共明智を討所を池田高山は在と云あら秀吉著陣を待得くこは合戦の始めけ然則主君之怨敵を亡せし實は在秀吉卿其上故將軍御送葬莫大之費ををいと勤侍る事も此人あり云彼云此忠義甚以夥し天忠義を感じ給ふ事眼前より秀吉の何も合天心所多く見ゆいあて天心は背のんや吾の天理は随のんといとぬるう思ふ也とをそのに老臣は評しけを各承り御遠慮尤宜しく奉存候是當家繁榮をへき金言はこそおのしませとて無限悦より秀吉は權威春氣之發生する如く彌増行を柴田腹くろは思ひおめつさきや任地我武威を以取消ん事卵を石は投せんより安あるへき物をと云は雪はおひさしく積りぬるを見てを腹立し上方の説を聞いておめ息をつき雪は上を飛立計はいらておたり初冬之比瀧川左近將監謀りける勝家の若き時より腹はあしき事大なるからぬ人也北國へ中冬よ中春まで雪ふあうして心八長は

勝家小島 若狹守中 村文荷齋 前田利齋 不破勝 家不勝 光金森長 近等ノ許 二遣ス

思ふ共、上方への出勢も成ました也、いさ年内の秀吉と和睦は調宜あらんと
思ひ、勝家へ其趣ひるゝに云やりければ、則應其義、前田又左衛門尉○新撰
臣實錄ニ、今按、兼能州三尾、越前府中龍門寺トアリ、城金森五郎撰
八、○新撰豐臣實錄ニ、今按、越前大野、信長時三將共與、勝並養子伊賀守○
家爲同僚、信長薨後、各被壓勝家、稍如屬其麾下トアリ、（勝下同）赴云、（下同）あひまへき
近江長濱兩城、時居長濱トアリ、を以、秀吉へ入魂有へき赴云、（下同）あひまへき
と思ひつゝ、勝家老臣は相議しければ、何も宜く候のんと也、天正十年十月
廿五日、○新撰豐臣實錄ニ、十月十五日ニ作ル、小島若狹守、中村文荷齋○新撰豐臣實錄ニ、今按、
を以、三人之衆へ、右之旨頼入之條、京都へ上り候て、信長公如此あらせ給ひ、
今幾程もなく傍輩と戰を挑まん事も口惜ゝ、和睦し、若君を取立、先君は
御恩を可奉存旨、よたふ計ひ給り候へと有しうの、何も左もこそ有へき事
ふて候へとて、十月廿八日北の庄を立、江州長濱よ至て、伊賀守は此赴を語
りければ、尤可然事は候、吾病の床は在と云共、肩輿は助らせ上著し、此事を
調見んと悦び、晦日、長濱より同船し出またり、十一月二日、至攝州寶寺、四使
富田左近將監宿所へ尋行、此人汝以、羽柴筑前守殿へ右之赴申述候へと、是
の忝奉存也、何様も勝家御差圖次第は御座有へし、信長公老臣之事を

秀吉和ヲ 諾シ勝ヲ 等ヲ饗ス

勝豐利家 等信長ノ 廟所ニ詣

と、何を以いあひ申候のんやとて、一兩日饗膳よたふ沙汰し、霜月四日、四使
を歸しなり、四人之衆秀吉の御存分思之外ろくおとしはま也、雖然其驗
あくて、遠路上りするあひなしと思ひ、をし返し筑前守殿へ申入るうの、
迎は御事お、盟は所いゝ、御座有へく候や、互に御誓紙も能候とんやと有
ければ、我もかく存寄候、丹羽五郎左衛門尉、池田勝入など、も申談、宿老共
不殘其かため宜しくおとさんや、各へ其赴申つるはし、是より一つ書を以
申上候とん、其旨修理亮殿へ被仰達候へと有しかは、四人之衆、けよ左もあ
らん事也と思ひ、重て不及右之沙汰歸よけり、其趣勝家へ懇よ以使禮申入、
各の少し在洛し、信長公御廟所へも參り、五六日も過候て下るべきとあり、
翌日五日、大徳寺へ參詣し、亡君總見院殿の席前よ至り、落涙今はらのやう
よなん見えて新あり、四使在京之由秀吉聞給ふて、種々之幣禮事盡よければ
の、各忝事身は餘り侍ると云し、かやうの事なるへしと、一入悦ひあへり
ぬ、久々親しひぬる京童温問し來り、晝夜を盡しての遊興、數年之勞一時よ
消歸路之思を亡と云共、十一月八日、都を立て、大津より船よ乘、其夜の明
あふに至長濱著津し、直よ越府よ著て、十日之晩、北の庄へ參り、秀吉より此

天正十年十一月二日

九〇四

返事之赴、勝家へ委申けまひ、寒天之節、楚辛勞力之段、満足之通、其謝尤懇也、柴田、春の時の宜き順ひなん物をと笑を含み、筑前守を方便をりしたるよと悦ひ思へり、あくて三人衆の居城へ歸まなり、

評曰、此和睦故、北國の聊油断有しとや、又三人之使者衆去六月まくの、勝家と同じさまな流傍輩なぞしなり、

筑前殿、蜂須賀彦右衛門尉、木村隼人(重忠)に向く仰ける、今度柴田の方より、四使を以和睦之事、察し思ふに、中冬より仲春あるの深雪なる故、上方へ出勢も不成之條、和談と稱し、吾に油断せさせ、春の雪消ると等く大波をうさせ、啗と攻上ほへきと謀也、抑予を方便ん者の、異朝ふてち子房、我朝ふて近きをいと、楠多門兵衛等の所及ふもあらん、柴田なとの愚意を以計見ん事、蟻蝮の斧なるへしと、嘲を笑ひまたり、此扱ひ有てより、秀吉の上方諸大名之心を取んと、二六時中工夫を費し、方々への使者、温問之品々理よるかひ淺あらざりしと、國々之城主等、秀吉之御用を立申度と、望と思ふ事、募もく行驗しよ、寶寺之門前、從遠國之使者、飛脚、捧物おとみちくくにたてひぬる事、信長公之威にも及ひなん、諸大名之心を大形取やのらけ

秀吉勝家
等ノ謀計
ヲ洞察ス

秀吉上方
諸大名ヲ
籠絡ス

親しく成ぬ、○下略、秀吉、兵ヲ美濃ニ出シ、神戸信孝ヲ圍ム、コトニカ、ル、十二月二十日ノ條ニ收ム、

〔川角太閤記〕

上ノ 一 ○中略、秀吉、大徳寺ニ信長ノ葬儀ヲ營ム、勝家越前

よく被聞届、もとや筑前守をたまとも、中々たまさるまじき事、治定也、とや事めあり申候處、此上を工夫分別有之て、岐阜ふてのほりさ、此度、内證の覺悟之通、まみやあまさん、参して、起請を以て言理中なをり、まゑき分別あり、左候の、家中、自分者ふて起請を遣し候共、具な事難成、勝家組下の前田(利孝)又左衛門を、筑前守とあひる事、れことし、其子細の、又左衛門むせめ二つのとし、筑前守もらひ、養子と仕置也、前田又左衛門の、内外共の別、而れあれる間也、是をやとひ、播磨へ使者を立とやと工夫して、又左衛門殿やとい、ひそかか、一言頼む子細あり、別條之儀、よく無之候、播磨の使、頼可申候、其様子も、あら、推量可有之、岐阜ふてのほりさ、は、又此度の御上洛之時、於京都、筑前守に切腹さ、に、急きたく、と、我等一人から、瀧川左近(長秀)、丹羽五郎左(信孝)、三七様かと御兄弟中、共、右之仕合也、去なうら、筑前守殿を、勝家在中にも、目よ可被懸と察入申候也、○勝家等、信長ノ葬儀ニ列セントシテ上洛ストノ説、十月十五日ノ條ニ見ユ、

秀吉利家
ヲ女ヲ養

天正十年十一月二日

九〇五

天正十年十一月二日

一とや、前田又左衛門殿を勝家所より、筑前守殿使者に被立申、其様子と、岐阜におるくれば、又此度上洛あら、於京都切腹させ可申との各評定必定也、勝家を初として、是れ先致くむ様成は合點也、各も其合點にて御座候、あやうふ存より候事、偏ふ天下様の御ためふ不罷成候、只此上と、以起請和合仕より外の事無御座候、爲其前田又左衛門殿相頼進之置候、起請之面あきらか御座候と思召、其上於御合點と、一人可被掛御意候、拙者之筆本可懸御目候、猶又左衛門殿へ申合候條不能詳候、右之誓紙を持ち、前田又左衛門殿姫地(繪下向)に參著候處、秀吉御馳走中々不被勝計と聞え申候、勝家これ御使とい申なら、偏ふ勝家はへ被懸御意候と御同前にて御座候、左候に、御使之様子に、とや、承届候、然上と、於秀吉と一味同心之覺悟候、先是と緩々と御逗留被成候へ、勝家御馳走のふめ候間、手前ふく一服可申上候、去あうら中國長陣之留守、數奇屋とく、くあれ申候、御馳走の爲、路地之松あと二三本うへあへ、を記やは松乃木柱ほりたて、其上いとほふさふ可仕候、新敷所勝家様の御馳走れた光也、

一又左衛門殿返事、御意之通承届候へと、左様と御數奇屋かと、さうふ被仰付候とも、日數立可申候、勝家返り被聞候と、又左衛門逗留何事ふやと、悪しくふま、んをたち候へと、互に御さめふ不罷成候と覺申候、とや、右之御馳走、勝家へたいし被成とい乍申、忝様子よく御座候、とや、罷歸、御馳走之通、殘所なく勝家へ可申との、又左衛門殿御理あり、筑前守殿御ひさゆい、如御意にて御座候、左候に、筑前守、勝家御馳走の、あま、あや、手前にて一服申度候、去あ、ら、數奇屋を新らしくとほふた、仕、勝家へ一服申上候と同前と被存候と相聞候、是ふてを逗留仕、馳走に相可申候哉と、早打を以て、勝家へ可有御尋候、五三日に内ふ様子相聞え可申候、さらりとて筑前守殿早打を、又左衛門殿越前へ被立候事、一勝家返事、逗留の何程も不苦候、筑前守殿も、と逗留尤候、何様も馳走隔心被申間敷候との、勝家より返事を、秀吉に被懸御目候、扱於秀吉心安罷成候事、一古た、まき屋と、まほし、右に被仰出候様、さふなる道具よくとり、へ、御數奇屋、又うへあ、ま、十本計、客は氣乃、はき候所とおほしき所、木

天正十年十一月二日